

---

# 常世の蟲

伊佐山詩織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

常世の蟲

### 【Nコード】

N1975D

### 【作者名】

伊佐山詩織

### 【あらすじ】

SMデリヘルの取材で知った女は得体の知れない生き物だった。不老長寿の「蟲」を体内に飼う女たちと、千四百年の昔からその女たちを守って来た一族の奇妙な共生関係。女たちの解放はこの世の滅びの序章なのか？注意！極めてグロテスクな描写を含みます。

# 1 発端

皇孫すめみまが海辺を歩いてしていると一人の美しい女に会った。

「誰の娘だ、お前は？」

「私は大山祇神おおやまつみのかみの子、木花開耶姫このはなさくやびめ。姉は磐長姫いわながひめ」

「俺はお前を妻にしたい。どうだ」

「父の意のままに」

皇孫は大山祇神に、

「お前の娘に惚れた。くれ」

大山祇神は贈り物と共に二人の娘を皇孫に奉った。

ところが皇孫は醜い磐長姫は娶らずに返し、美しい木花開耶姫とのみ交わった。

木花開耶姫は一夜で孕んだ。

磐長姫は激しく嫉妬した。

そして世にも恐ろしい形相で、

「もし皇孫が私を受け入れていれば、子の命は私の名のごとく磐のように長くなり、決して死ぬことはなかつたろう。なのに皇孫は妹だけを召した。妹の腹にいる子よ、妹の名の通り木の花のようにしておれて死ね！」

さらに磐長姫は呪いの唾を吐き散らし、

「この世に生きる者すべて、木の花の如く束の間に死ね！」

一説によると、これが「死」の起源だという。(『日本書紀』「

神代下」第九段一書第二)

床が冷たい。

レザーのボンディングスーツがこんなに苦しいとは思わなかったし。ボールを噛まされた口からは声も出せない。

苦しい 助け て

この仕事に躊躇がなかったわけではない。女性として、やつぱり、この手の取材には抵抗があった。三十過ぎのいい歳した女が、なんて言わないでほしい。三十女には三十女なりの恥じらいとためらいがあるんだし、普通の風俗ならばまだしも、女性でなければ取材を許可しないという、その特殊な「店」の営業内容にもかなり抵抗があった。

いわゆるSM系のデリヘルなのだった。電話一本で、サドかマゾの女性を男性の部屋やホテルに派遣する。体に触るサービスは一切無し。その代わり、好みのメニューは細かく細分化されていて、その表を見ただけで、私は嫌悪に気分が悪くなった。半同棲してる同僚ライターの大生健多に、

「これ何？ 『排泄系SMデリヘル』って、もしかして、男の部屋に行つて、男の目の前でやるん？」

健多はバツの悪そうな顔で、

「ガキじゃねーし、そんなことで驚くなよ」

「見てこれ、オマル持参だつて、希望者には実費でお譲りしますだつて……げーっ、やつぱり嫌だよ、こんな取材」

「もうアポも取つとるんやろ」

「じゃ、ギャラを上乗せしてくれて頼んでみようか」

「そりゃ無理やろ。もともとのギャラが破格なんやし。四件二ペーシで十万なんて、普通ありえへん額やで。これ以上の上乗せなんか、まず無理やつて。あきらめ」

「私嫌やゝ、人のオマル姿なんか見たくないよおゝ」

「本気でやめるんか？」

健多から真顔で聞かれ、ま、とにかく一度はゴネて、こんな仕事をしても私はノーマルなんだつて証明されたからいいか、と、

「うっん、やる。ギャラ的にはオイシイかも。健多は明日も京都？」

「太秦の広隆寺」

「広隆寺……百済観音のあるところだったっけ」

「そう、それと秋には牛祭」

「お上品なところでいいわね」

「ギヤラは安いよ、そのかわり。ただのガイドブックだし。一件四千円やけど、どうや、代わるか？」

「やめとくわ」

なんだかんだ言ってもギヤラの良いのがいちばんだ。

最初の取材先『美素人<sup>ミスト</sup>』は四天王寺のごく普通のマンションの一室で、玄関で私たちを迎えてくれた女社長は四十ぐらい、化粧はきつく、小太りで、シヨツキングピンクのスーツも体に合っていないのを無理に詰め込んだ感じで下品だった。ニセのルビーだと思う、真っ赤なブローチもかなり印象悪い。けれど何か、引きつけるものが全身から発散されていて、柑橘系の香水は涼やかだった。

「いらっしやい。昔オタクらの雑誌に取材頼んだら、男がゾロゾロやってきてな、女の子が怖がってもうて、やから今回は女性でお願いしますうって、強く、強く、強く、言うたたんよ」

酒かタバコで荒れたらしいかすれた声に何となく気圧され、私はカメラの涼子ちゃんと一緒に「ハア」と小さく返事した。

「まずはともかく入って。名刺なんか後ね。今一人面接中なの。様子をご覧になるかしら」

そういつて、スリッパを履きつつある私の耳元に、

「ハタチつて言ってるけど、嘘ね。十八ぐらいの小娘よ。処女だって言ってる。多分、ホストクラブに行く金が欲しいのよね。セックスなしハダカなしで時給五千円貰えるオシゴトだって、ちょっとナメてるみたいやから、これからガツンって行くわよ」

何かサディストが獲物を前に喜んでいような感じがして、廊下を並んで歩きながら、小声で、

「大丈夫なんですか、それで嫌だつて言ったら……」

「客の前で嫌やって言われるよりはマシよお」と、社長は真っ赤な口からフツと息を吐いて笑った。私が、

「それはそうですね。社長の見えないうところでそんなになつたら困りますよね」

相づちを打つと、

「そうよ。あなた、なかなかわかってるわね」と立ち止まり、三センチくらいの距離から私をしっかりと見た、その視線は、恥じらいというか、ためらいというか、そういう人間関係の「間」のようなものを決定的に欠く種類の人のものだった。そしてまた、小声で、「あなただから言うけど、面接の時にガッツてやつとかないと、前なんかあなた、ウチの経理が私が入院してるあいだに勝手に縁故採用した子がね、お客さんの所に行ったわ良いが、相手が怖くてそのまま凍りついちゃって、苦情が来たわよ。もう、即クビ。とにかくウチの商売の勘所をしっかりと掴んでもらわないとね。ウチはね、ホンバンしたり、スペシャルやったりせん分、技術と度胸と演技力があるのよ。その辺、よくわかってもらわんと駄目なんよ」

キッチンと一緒にになった応接間に入ると、ソファにはまだ髪も染めていない、明らかに十七、八とわかる女の子が座っていた。おめかしのつもりらしい安物のワンピースに包まれた体は少女体型で肉付きの良い方ではなく、オドオドとよく動く目がどこか哀れな感じだった。

「今日はね、業界誌の取材が入ってるの。面接の様子も取材したいって言うから、いいわね、アナタ」

社長の言葉に女の子は否も応もなく頷いた。

「じゃ、皆さんお座りになって。あ、カメラは後でね、モデルを向こうに用意してますから、そっちを撮ってください」

四つあるソファの椅子のこちら側に涼子ちゃんと私が座り、社長と女の子は並んで座った。社長は女の子の、それこそ鼻先で、

「で、あなた、マゾ、サド、どっち?」

「よくわからない、んです」

「さっきも言ったけど」と社長は少し声を荒げて言った。「誤解しないで欲しいのは、あなた自身の性癖がサドかマゾかって聞いているんじゃないのよ、どっちのサービスが自分に出来そうか、そのことなのよ。わかりにくかったら、宝塚の男役女役で考えてね。自分が

男が女かつてことじゃなくて、男と女とどっちが演じやすいかってことね。どう？ 虐めるのと、虐められるのと、どっちが演じやすい？ もちろん、本気で虐められたり虐めたりはしないのよ、お芝居ってコトよ」

社長は一気に言っつて、女の子を見つめた。女の子はうつむきながら、

「虐められる、ほう、です」

「マゾ、ね。私もそうじゃないかと思っつたのよ。じゃ、マゾで決まりね」

そう言っつて、受話器を取り、内線1を押しして、

「ああ、レイナちゃん、オマル持っつて来て」

それを聞いた女の子の表情が一気に硬くなつた。私ももちろん緊張した。涼子ちゃんの顔もまた女の子と同じくらい硬くなつていた。

レイナちゃんと呼ばれた女性が応接室に入つてきた。二十五前後の、痩せた、紫のスーツの似合う、どこかの大企業の社長秘書と言つても通りそうな女性だ。そんな女性が白鳥のオマルを小脇に抱えた姿はどこか滑稽だつた。ただ、表情は穏やかで、女の子のほうを見て緊張をほぐしてやるかのように微笑んでいた。

「レイナちゃん、おねがい」

ごく普通の業務のような流れで、レイナちゃんは返事よりも先に新聞紙をソファのそばの床に敷き、オマルを置き、パンティを下ろしてしゃがみ、穏やかな笑みで私たちを眺めた。私はその視線に合わすことが出来ずに、社長を見た。

「この子がね」と社長はオマルの中の水音が始まると言つた。「ウチのナンバーワンなのね。客の前でオシッコするだけで二万円稼ぐのよ。と言っつてもね、こんなやり方じゃ、男だつてお金払おうとは思わないけどね。そのことは追々教えてあげるけど。ま、とにかく、このくらい平気で出来なきゃ、お話にも何にもなりませんわ」

言い終わると、社長はそこにあつたティッシュの箱をレイナちゃんに差し出した。その先を私は見る勇気がなくて女の子の方に視線

をやった。女の子の目には、涙が、こぼれる寸前にまで溜まっていた。

「じゃ、次はあなた、お願いね。これは試験よ。女の前で出来ないのに、男の前で出来るわけがあれへんからね。大丈夫、あなた可愛いから、セックスも、男の体に触れることもせんと、時給七、八千円くらいは稼げるようになるわ」

女の子は返事出来ずにそのまま泣き始めた。大粒の涙が頬をスーッと流れ、嗚咽が始まった。

「やめるの？ 出来んのなら早よ帰ってね。ウチだつて暇じゃないんだし……」

「社長、だめですよ。そんな言い方は」

キッチンで手を洗っていたレイナちゃんが初めて口を開いた。穏やかで、しっかりとした、歌うようなアルトの標準語だった。そして女の子の後ろに立ってその右肩に手を置き、そのまましゃがみ込んでハンカチで涙をぬぐってやりながら、耳元で何かを囁いた。何を言っているのかは聞こえなかったけど、女の子の表情は一気にパアツと明るくなり、そのまま立ち上がってオマルの方に歩み、そして、レイナちゃんと同じようにしゃがみ込んだ。ただ、そこからは上手く行かないらしく、固まっていた。

「オーケー、今日はここまでで良いわ。良くできた、オツケー」

社長が褒めた瞬間、女の子の足元で水音が始まった。

「まあ、偉いわ。偉い、あなたは偉い、きつとナンバーワンになれる。偉いわ」

女の子は水音を立てながら照れと嬉しさとの混じった表情を見せ、また右肩に優しく置かれたレイナちゃんの手に自分の左手を重ねながら、今度はうれし泣きに泣いていた。

……凄まじい世界もあるもんだ……

私と涼子ちゃんは互いの顔を見ながらうなづきあった。

女の子とレイナちゃんは連れだつて食事に出て、私たちはまた別の応接室に通された。



「さっきの部屋はね、研修室なの。ああやって、汚いことにも使うから、床とか、キッチンとか、ちょっと特殊なつくりしてるのね。ここが本当の応接室で、取引先とかにはこっちを使うの。で、私、社長の北村です」

北村真理子、と名刺にはあった。

「ライターの赤城紗英です」と、私が名刺を差し出すと、

「素敵なお名前ね、本名？」

「ええ、もちろん」

私は嘘を言った。風俗関係の仕事が入るようになってからはずっと筆名にしているのだった。名刺の住所も『ナイトライブ』の編集部になっている。

社長はカメラの涼子ちゃんには本名かどうか確認しなかった。「田中涼子」っていかにも本名っぽい、でも、これもお仕事ネームなのだった。

「でね、これも前のと同じタイプアップ記事よね」

半年くらい前にも『ナイトライブ』は出来たばかりの『美素人』を取材していて、まあ、別にどうと言うことのない、ごく普通の平凡な記事になっていた。

「はい。記事の形をした広告だと思ってもらったら……」

「前の記事はつまらんかったわあ」と、社長は私の言葉を遮って言った。「男なんてあんなもんよ。ハッキリ言っつて、ウチは、オタクの雑誌に載っつて、それでお客が増えるとはちっつとも思っつてないのね。それよりも、女の子を大事にしてるっつてことを強調してもらっつて、求人の方の効果が欲しかったのよ。そこら辺、前の男のライターは全くわかつつたらんかった。あんなん駄目よ。本当に。だけど、今回オタクの編集部から出してもらった企画書、あれ、面白かつたわ。新人研修に力を入れるデリヘルっつて切り口が新しいし。インパクトあるわよ。誰が考えたの、あれ？」

「さあ、私にはそこまでは」

実際には私なのだった。ただ、それがバレてここと深い関わりに

なるのは嫌だった。

「アナタじゃないの？」

「私はただのライターですから」

「ただの？ 『ただの』って、アナタおいくつ？」

「今年二十九です」

「二つサバを読んだ。

「駄目じゃない、二十五にもなって、ただの、なんて」

「え？」

「アナタ、今、舐められないように四つサバ読んでしょ。あの女の子と一緒に。この業界をナメないでね」

何か言いわけを考えたけど、社長の目の真剣さに、私は引きつった笑みしか返せなかった。確かに若くは見られるけど。

「とにかく女が二十五を過ぎたら『ただの』じゃ駄目よ。自分で企画して人を動かす。人を動かして、食べる。そうならなきゃ駄目よ。これからの十五年は早いわよ。アナタ、四十になった自分を想像してご覧なさいよ。今のまま、『ただの』で十五年間経ってご覧、四十過ぎたら『ただの』じゃないわよ。『ただの』が『駄目な』に変わるんだから」

「そう、ですね」と言いながら、私は知人の四十過ぎたライターたちを思い浮かべた。自分のテーマを持って本を出せたライターはいいとして、そうでない、「ただの」ライターは、確かに皆「駄目な」に近い。

「確かにそうですね」

「でしょ。まあこれを機会に、この世界のことでも深く突っ込んで本にしたらいいのよ。きつと売れるわよ。もちろん、ウチのことを書いてくれても良いわよ。裏の世界の本当のノウハウは教えられへんけど、それ以外でもけっこう面白い話、あるんやから」

「ハア」

「さて、それはいいとして、まずは今回の記事ね、ウチと、あとはどこを取り上げるの？」

私はノートを開いて、

「『姫』さん、『M'sレディ』さん、『赤い首輪』さん、ですね」  
それを聞くと、社長は、いきなり、

「キヤキヤキヤ、キヤキヤ」と頓狂な笑い声を上げた。

「そりゃあかんわ。あんな所と一緒にしてもろたら。これから取材に行くんやろ？ 比べたらわかるって、ウチがどんつくらい女の子を大事にしてるか。まず、いい？ ウチは基本的にリピーターさんのお店なのね。安全なお客さんしか相手にしないの。イチゲンさんをいかにしてリピーターさんにしていくか、そのための研修はしっかりやってます。逆に新人も最初はリピーターさんに育ててもらってもいるのよ。ウチくらいお客さんとの関係が上手く行ってる店はないわ。それは断言します」

このまま喋るにまかせてたらいつ取材に入れるかわからない。とにかくよく喋る社長だ。

「そろそろ、インタビュウに入らせて……」

「どうぞ、どうぞ」と社長は両腕を開いた。私は少し身を引いて、

「じゃあ、基本的なところからいきますが、今、『美素人』に所属してる女の子は……」

「あ、そのレベルのことやったら」

社長は受話器を取り、外線1を押して、

「ごめん、ウチの資料、一部こっちに持ってきて」

受話器を置き、

「隣の部屋も借りてるのね。そっちを事務所にしてるのよ。隣にも二人、これは事務しかしない女の子がいるの」

玄関の呼び鈴が鳴った。

「じゃ、ちよつと取ってくるわ」

涼子ちゃんと二人になると、私は、

「なんか、無敵って感じやない？」

「パワーありますね。でもさっきのアレはちよつと……わかってたけど、いきなりやったから、かなりシヨック」

私たちはそのまま絶句した。すぐに社長は戻ってきた。

「これに」と社長はコピーを差し出した。「女の子の数とか、料金とか、そういうの書いてるから」

私はそのコピーを見て、

「じゃ、確認しますけど、フルタイムで事務所に待機している女の子が九人、あとは自宅からの呼び出し組が十二人ってことで……」

「そう。この業界で、これだけの規模で女の子をそろえてるのはウチだけよ、断言するわ」

「それでは、あの、『美素人』さんの研修システムというか……」

「さつき見たわよね。新人の女の子には一人、ベテランがつくのよ。それで、ひと月、みっちり、生活習慣とか教え込みながら、ロールプレイングゲームをやってもらおうのよ」

「ロールプレイングゲーム、ですか？」

「そう。たとえばさっきのペアだったら、レイナちゃんが男役になって、どんな仕草が喜ばれるかとか、どうやって男を満足させるとか、徹底的に教え込むのね。たとえばね、さっきの放尿だって、あんなのじゃ男は満足しないわよ。二万円なんかとてもとても。嫌がって、恥ずかしがって、でも仕方なく、それでも恥ずかしいから、アナタも一緒にイッてってお願いして、それで向こうがオナニーで射精したのを確認してはじめてオシゴトしたって言えるのね。そこまで出来るって私が確信してからよ、外に出すんは。もちろん、最後にはりピーターさんに協力してもらって、あそこの研修室で最終チェックするわ。そこまで大事に育て上げて行くのね。他みたいに説明だけしてすぐに実地なんていって放り出すのとは全く違う、全く違うのよ」

他のことを知らないからうなづくしかない。

「そうね、午後イチで新人さんの最終チェックが入ってるから、それも見えていく？」

私は涼子ちゃんの顔を見て、

「午後はまた別の取材が入ってますから」と嘘を言った。二人とも

念のために一日開けていたのだった。

「そう、残念ね。じゃ、研修用のビデオだけでも、持って帰って観て頂戴ね。これだけでも、ウチがどれだけ女の子の教育に熱心かっ  
てこと、わかっていたただけると思うのよ。そうだ、撮影があったわ  
ね、モデル呼ぶ？」

「あ、お願いします」

涼子ちゃんが初めて社長に向かってしゃべった。

社長は受話器を取り、内線2を押して、

「モデルお願いね、第一応接室」

やって来たモデルを見て、私は「アッ」と声を上げてしまった。

先週号で別の風俗店のイメージに使った子で、この手のモデルに  
しては可愛いから思いっきり顔を出してもらったのだった。あれだけ  
顔出ししたら、しばらく『ナイトライブ』では使えないだろう。向  
こうも私に気づいたらしく、少し気まずい雰囲気になった。

「どうしたの、知り合い？ まあこの世界じゃよくあることだし、  
気にしない、気にしない」

「いえ、社長、この子、先週号で別の風俗店のイメージに使ったん  
ですよ」

「オタクが？」

「ええ『ナイトライブ』に出てもらったんです。だから、先週の来  
週は、ちよつとマズイかな、と」

「困ったわねえ」

「社長はどんなイメージで考えてらっしゃったんですか？」

「ソフトなイメージよ、向こうの応接室で座つてるところをソフト  
フォーカスで上品に撮ってもらおうかと思ってたのよ」

「あの」と涼子ちゃんが社長に話しかけた。「SMですよね。だっ  
たら、ボンテージ路線で、レーザーマスクで顔を隠して撮るのはどう  
ですか？」

「ウチも、そういうこともしないワケじゃないから、まあ、それで

……」

「いえ困ります！」とモデルの子が言った。「そんなの聞いてません。事務所からは、普通のモデルだから座ってればいいって」

「顔は出ないのよ」と社長が少しきつい言い方をした。「マスクで顔を隠して、床に転がってくれたらいいのよ、モデルならそのくらいは……」

「私はフーズク嬢ではありません！ ノードモデルでもありません！」

「アナタ、お幾つよ」

「答える必要も義務もありません。帰らせていただきます」

モデルさんは表情一つ変えずに部屋を出て、そのまま帰ってしまった。

「チツ」と社長は舌打ちして、「最近の子はこれよ。柔軟性がない。何よ、フーズク嬢じゃありませんって、だったらこの世界になんか入って来なきゃ……」

社長の長広舌を聞き流しながら、でも今回に限ってはモデルさんの方が正しいと思った。金を払ってるんだから何でもやれというのは、まるでワガママ男の言い分だ。金で買われても出来ることと出来ないことがあるし、その線引きをしっかりとるのが、この世界に限らず、プロの常識というものだろう。

社長のクダクダに辟易し始めたところにレイナちゃんが帰ってきた。

「社長、あの子、自宅からの方に登録するそうです」

「そ、ありがと。それよりもね、困ったことが起こったのよお」

そう言って、社長はモデル帰り事件のクダを巻き戻した。

「困りましたね……」

社長がいるにははかなり長い沈黙だった。

「レイナさんを使うわけには……」と涼子ちゃんが口を挟んだ。「レイナさんだったら、顔出しでもかなり……」

「店の子は使わないことにしてるの」と社長。「安全のためにね。変な問い合わせとかあったりしても、モデルだったら、あの子は辞

めましたって言えるでしょ。店の子は駄目、絶対に」

ふと気づくと、レイナちゃんは私の真ん前に座り、私に向かって微笑んでいた。どう反応して良いかわからず、私も少し微笑み返した。よく見れば恐ろしいほどの美人だった。それでもさっきの光景の印象が強くて、普通の反応は出来なかった。

「あの」とレイナちゃんは私を見ながら言った。「この方、モデルさんでもじゅうぶんいけると思っんですけど」

「わたしっ?」

と、私は自分でも驚くような声を上げ、椅子から跳ね上がったしまった。

「駄目ですよ、駄目、そんな駄目」

目の前で手をブンブンと振る。

「いけるわ」と社長の顔がほころんだ。「いけるわよ、あなた。わたし最初から、あなたは見所あると思ってたのよ」

「ちよつと、何か言つてよ、涼子ちゃん、駄目でしょ、私なんか」ところが涼子ちゃんまでもが私をマジマジと見て、

「……いけますよ、紗英さん。紗英さん、自分じゃ気づいてないけど、顔立ちもハッキリしてるから、お化粧ちゃんとしたら綺麗になりますって。きちんとメイクして綺麗にしたら、こつ言つのもなんですけど、別人になりますよ。顔出しでもじゅうぶん大丈夫ですよ」  
「そうでしょ、そうなのよ、あなた、お化粧っ気あれへんから色気も消えてるけど、大丈夫、メイクしたらかなりいけるわよ、スタイルも良いし、いけるわよ」

「私、メイクしましょうか?」

レイナちゃんが言った。

「そうそう、この子、メイクの達人なのよ。どんな子だって……」

レイナちゃんは社長の言葉を遮って立ち上がり、私の後ろに立ち、私の右肩に手を置いた。そして耳元で、

「やりましょう、出来ますよ」

ものすごく素敵な柑橘系の香りがした。

それ以後の記憶は吹っ飛び、そして、私は今、レザーの拘束具できつくきつく拘束され、冷たい床に転がされているのだった。ポールを嘔まされた口からは声も出せない。

苦しい 助け て

涼子ちゃんのカメラのフラッシュがバシバシ焚かれる。床に流れたよだれが頬に生ぬるくて気持ち悪い、私、いったい何やってるの。

嫌、嫌よ こんなの嫌

耳元でレイナちゃんの声がして、柑橘の香りがして、私はまた真つ暗な闇の中に落ちていった。

……

「『美素人』？ あんたたち、『美素人』にも行ったんか？ あそこ変やる？ まるで宗教団体みたいやる。あそこ、女の子をマインドコントロールしてるって噂やで。だって、ここでシヨンベンしろって言うたら何の躊躇もなくシャアってするし、ウンコやって浣腸やって何やって、人前で平気の平左でやるんやで、狂とるよ」

次の取材先の男社長は、自分の店の説明よりも『美素人』批判にボルテージを上げた。

「知つとるか？ あそこ、ホストと手を組んでな、若い子をホストにハメて、それでそのホストを通じてからに、女の子をリクルートするんやで。『美素人』の、あの、なんて言うたかな、ものすごい美人があるやる、知らんか？」

レイナちゃんかと思っただけど、

「いえ……」

「有名なんやけどな、あの美人」

「ちよつと……」

「えーと、レ、レイ、あ、思い出した。レイナだよ、レイナね。あいつひつどい女やで。あれが街で、これはって子を見つけて、それでホストに声かけさせるらしいんや。それでホストクラブにハメて、金でクビまわらなくして、良いバイトあるからって『美素人』を紹介させるんやで。女の子がいったんレイナから目をつけられたら、



もう逃げられへんって、ひどい話やで」

「ハア、と私と涼子ちゃんは顔を見合わせた。

それからどこで聞いても『美素人』の評判は良くなかった。最悪と言ってもよかった。つまりそれだけ新興勢力として一目も二目も置かれていると言っことだろう。

まあそれでも『ナイトライブ』の原稿はソツなくまとまり、初稿の校正も済んで記事は私の手を離れ、『美素人』での強烈な出会いも単なる想い出の一つになりかけていた。ところ、ちよつとした事件が起きて私と『美素人』とのつながりが復活してしまった。いや、ちよつとしたと言うか、私にとっては大事件なのだけど、大事件にすることはちよつと出来そうにない種類の事件なのだった。

編集部から送られてきた『ナイトライブ』を玄関口で封を開けて見ると、なんと、私の、例の写真が、二ページ見開きでドーンと使われていて、私は靴も脱がないまま、

「ちよつと、ちよつと、ちよつと」と声を上げてしまった。

カツラのロングの茶髪やボールを噛まされた口、それから涙に溢れた目はゾツとするほど妖艶で、とてもとても私とは思えないから、これはマアいいとしても、腰の辺りの水たまりはまるで……。そしてキャプション。

「私、『美素人』のみどりです。お漏らししてごめんなさい」

私はすぐに涼子ちゃんに電話した。まだ現物を見てないという。とにかく『ナイトライブ』編集室にネジ込むにしてもまずは現地での状況を知っておきたいし、鶴橋の焼鳥屋で涼子ちゃんに会うことにした。

『正義の焼き鳥』で何も注文せずに待っていると、涼子ちゃんは青い顔をしてやって来た。

「みどりさん」と、涼子ちゃんは私の本名で話しかけた。この子は専門学校の後輩だから本名を知ってて、だから二人だけの時は「真理子ちゃん」「みどりさん」と本名で呼び合っているのだった。

「あのさ、思うんだけど、今日から本名はナシにしようよ」

「私もそれ、思ったんです」

涼子ちゃんは生ビールを注文して私の隣に座った。

「で、見たん？」

「私、今、『ナイトライブ』に行ってきたんですよ。山本さんしかいなかったんですけど」

そう言っつて、いつもの大きな鞆から『ナイトライブ』を取りだした。

「この写真、私が撮ったやつじゃないんですよ」

「なにそれ！」

「それに、このキャプションも、山本さんが入れたんじゃないらしいんですよ。どこで入ったか山本さんにもわからなくて頭抱えてましたよ。だって、山本さんは紗英さんの本名なんて……」

「知ってるわけないわよ」

「です……よね」

「それに、初稿とレイアウトがまるで違うでしょ」

「それは、さつき聞いたんですけど、編集長が最終段階で差し替えたんですって。こっちの写真の方が良いしって、デザインも含めて」

「編集長が？ 冗談じゃない！」

「実は私、もう途中から撮れなかったんですよ、ちよっと、あまりにもあんまりだし」

涼子ちゃんは私から目をそらして、やってきたビールをグイッと飲み、店員にズリと皮とハツを注文した。

「先輩は何か、注文」

「そんな気分じゃないけど、じゃ、生ビール。で、じゃあ、誰が撮ったのよ、あんなの」

「レイナちゃん」

ビールを飲む口からよそ事のように言われたその名前を聞いて、

私は頭を横殴りに殴られたような、頭の芯が揺らく感じがした。

「レイナちゃんのカメラ、コンタックスなんですよ。私、カメラじゃ全然、負けてましたね、あの時。この写真見ても、あの人が素人

じゃないってわかりますよ。私なんか、先輩の顔を白く飛ばそうってフラッシュ焚きまくってたのに、レイナちゃん、明るいレンズ使って室内光だけで、絞りを開放近くにして撮ってると思うんですけど、光の条件としてはかなり厳しい中でよくこれだけって感じですね。それで、出来たのを焼いたからって、一枚届けてくれたらしいんです、編集部に。それで差し替えになったみたいですね。でも、ここだけの話、仕上がりから見ても、これは最高ですよ」

「最高の仕上がりって、真理子ちゃん、こんなのを最高に仕上げられて……」

「先輩、本名はやめましょう」

「わかったわよ、涼子、ちゃん」

私は少し感情的になって言った。

「でも、変ですよ、記憶がないんですかあ？」

私は運ばれてきたビールに口をつけながら、考え込んだ。

先輩、先輩

遠くで涼子ちゃんの声かしていたような。

「先輩、先輩」

我に返った。

「おかしいわ、確かに。あの時の記憶が全くないなんて」

「ハダカになつた記憶は？」

「なんやって？」

頭の芯が真っ白になった。

「ハダカって、なんで、なんで私がハダカになるの？」

「だって、ボンデージスーツを着るのに」

「みんなの前で着替えたの？」

「憶えてないんですか？ あそこの社長が用事で出た後、レイナちゃんに手伝ってもらって、ニコニコしてましたよ、先輩。私、目のやり場に困りましたよ」

「憶えてない、本当に憶えてない」

気分が悪くなってきた。

「だったら、レイナさんが、先輩の耳元で、このままオシッコしようねって……」

「もうやめて！」

「先輩、本当に憶えてないんですね。なんだか私、薄気味悪くなってきた」

そう言いながらも、涼子ちゃんは皮の串を口に持って行って半分くらいをグイッと口に入れた。私は残ったビールを一気に飲んで、「なんだか、私たち、関わっちゃいけないところに関わったみたいね。私もう、『ナイトライヴ』の仕事辞める。風俗にも関わらない」私もそうします。本当に気持ち悪いですよね」

涼子ちゃんは皮の入った口でモグモグと言った。

それから少し飲んでマンションの部屋に帰ると、健多が来ていてポーツと天井を眺めていた。

「何しとんの？」

「おい、このシミ、大きくなってへんか」

言われてみると、数日前に白い天井に出来たシミが、最初は大豆くらいの大きさだったのに、今では直径二十センチ以上の大きさになっていた。

「ヤダ、本当に大きくなってる」

「これ、上で何かこぼしたんちゃうか」

私は酒の勢いもあって上の階に行き、呼び鈴を何度も押した。

『江藤祐二』は何の反応もしない。

部屋に戻ってきて、

「誰もいないみたい」

「管理人さんに言ったほうがいいんじゃないか。あれ、もし燃えるようなもんやったら、ヤベーよ」

「そうね、じゃ健多はちょっと下のコンビニに行ってくれませんか？」

「管理人に私の部屋の状況を見てもらわへんと」

七十過ぎの管理人は私の部屋のシミを見るなり、上の階に行つて私がしたように呼び鈴を押した。

「出えへんなあ」

「この人、何をしてる人なんですか？ 私、部屋に出入りするの見たことないんです」

管理人は何も答えず、

「何か、悪い予感がするなあ。こういうときは大抵ろくなコトにはなれへんからなあ。ちよつと、あんた、立ち会ってくださいね、私一人だと、あとあと面倒だから」

そう言つて、管理人が合鍵で開けたドアの向こうには、これまで嗅いだことのない、腐敗と排泄の混じつたような、どうしようもない異臭が満ちていた。

「うわー」と管理人は言いながら、玄関の灯りをつけた。

蠅が一気に飛び立った台所には、血のような、汚物のような、溜まりができていた。その溜まりの中では灯りに驚いた幾千のウジが立ち上がりわき上がり、まるで踊りのようにざわついていた。見てしまつと悪臭は耐え難かつた。その先のカタマリを見る勇氣はなかつた。

「警察、警察、警察」

管理人は管理人室に飛んで帰つた。私は部屋を出て廊下につづくまり、こみ上げてきたビール臭いものを吐いた。

「もう時間がないわ」

ふと見るとレイナだった。

「はやく会いたい」

私はまた吐いた。吐く物がなくなると、私は胃に何も吐く物のない嘔吐に苦しみながら、次第に近づくパトカーの音をどこか遠くに聞いていた。(つづく)

## 2 レイナの夢

翌日、引越しの手配は電話で健多がやってくれた。引越し業者には、説明が面倒だから、ストーカーから逃げる引越しだと言った。

「大丈夫ですよ。本当に大変な目にあわれてるとは思ってますけど、ウチも、月に二百件くらい受ける引越しのうち、十件くらいは、こんな感じのワケ有りですからね。お荷物は倉庫にいったん運んで、それで車を変えて、積み替えて出ますからね、しかも目的地に行くまでに二時間くらいかけて巻きますから、追ってこられてもわかりますし、絶対に大丈夫です。そういうノウハウは、私たちにもありますから」

その手のサービスで新居には半日で移ることが出来た。新居は少々値の張る、本格的な警備システムのある難波のマンションにした。ひと月後から健多と二人で住む。すぐに一緒に住んでも良かったのだけど、なんとというか、健多といるのがひどくうっとうしく感じられた。

健多は布団の中で私をしっかりと抱いて髪をなせてくれたのに、私はそれをすり抜けた。

「どうしたん？」

「ずっと健多とはやってない。そんな気になれない。」

「なんか、気分が悪い」

「色々あったからなあ」

「うん」

「明日から、俺、また京都やから」

「大秦の？」

「あの辺りの特集だな。今度はちよつとした歴史物やから」

「ふうん、歴史物ねえ」

「謎の氏族、秦氏の謎……」

「ハタ？」

「そう、秦の始皇帝の秦って書いてハタ」

「そりゃまたアカデミックですこと」

私は皮肉を言わずにはいられなかった。何か、そんな気分だった。

「なんで秦って書いて、ハタって読むか、わかるか？」

「機織りをしてたから？」

「そういう説もあるし、俺が聞いたんじゃ、韓国語では海のことをパダって言うらしくて、それで海から渡ってきた氏族なんで、パダからハタになったんやって」

「それ、なんか怪しい説やな」

「それから始皇帝って言うたら、徐福っておるやろ？」

「知らん」

なんだかうつとうしくなってきた。

「不老不死の仙薬を求めて日本に来たんやって、それで見つけたんやけど、その時にはもう始皇帝は死んで……」

「死体の話はもうええ、寝る」

私は健多に背中を向けた。

警察の事情聴取もうつとうしかった。指紋を採られるのも理不尽だと思つたし、何より、私にとつていちばん恐怖だったレイナのことがただの妄想だと片づけられたのが悔しかった。私は泣いてレイナを見たと訴えているのに、その話を始めると、途端に刑事の顔がほころんで、「はいはい、調べますよ、聞きますよ」とでもいった調子になるのが耐えられない。

「だから、これは『美素人』とレイナの企んだことなんですよ」

「ほう？」

「私はレイナを見たんです、あの時」

「でも、管理人さんは誰も見なかったって言ってますよ」

「あの、私の言うこと、きちんと聞いてくれますか」

「はい、聞きますよ。そのためにお出でいただいたわけですから」

「私はレイナをこの目で見たし、よくわからないことを言っただけ」

す。あれはきつと、拘束プレイの客なんですよ」

「拘束プレイ？」

「縛って放置するんです。一日とか、三日とか、そういう単位で」  
「はあ？」

「だから！　そういうプレイもあるんですよ！　そういう、常人から見たら極端なプレイを好む客もいるんです」

「そりやまた変態やな」

「そうですね、変態です。でもないワケじゃない。でね、その客を何らかの理由で殺そうと思っただら、どうします？」

「放つとけば死ぬわ、そりや」

「でしょう？　だから放っておいた。それで死んだ」

「そうそう」

と刑事は私の話を遮った。赤いネクタイが下品で攻撃的だ。

「死んでた方、女性なんですよ」

「女？　女だったんですか？　でも表札は」

「ああ、あれですか、ストーカー対策やったみたいですよ。前のオトコから逃げるために男の名前を出しとったんやね」

「縛られて……」

「その形跡は、ないですよ」

私は一気に脱力して、それでも何か残るわだかまりを言葉にしようとした。

「でも、『美素人』の人たち、私の本名まで調べてたんですよ、『ナイトライヴ』見せたでしょう？」

「はい、見ましたよ」

刑事は小馬鹿にするように言った。

「だったらわかるでしょう！」と私はキレた。声も裏返った。「『美素人』は私の写真と本名を暴くようなことしたんですよ！」

「それはちよつと、本件とは……」

「関係あります！　絶対に！　何で、何でわかってくれないんですか」



私は悔し泣きに泣いた。

「今日はこのくらいで」と刑事が言った。「もし何かあったら、いつでも相談に来てくださいね、市民生活課の方に」

え？ と私は聞き返した。

「私、この件から外れるんです。それに、ここだけの話ですが、この件、事件性はありませんよ。死因は心臓発作で……」

もう駄目だと思った。何を言っても理解してくれない。私はフラフラと立ち上がって警察を出た、そのすれ違いざまに、若い婦警が「みどりさん」と低い声で言った。全身が固まって、それでも振り返ると、その婦警はレイナだった。私をしっかりと見ながら、

「時間がないの」

そう言っただけ私の方へ歩いてきた。

走った。ただ走った。もう警察も当てにならない。

駅からはわざと遠回りになる地下鉄の路線に乗り、タクシーで新しいマンションの前まで来た。

タクシーのドアが開き、料金を払おうとしてふと見ると、エントランスの前に男が立っていた。三十過ぎの小太り、肩までの長髪、Gパンにノータイの茶色のジャケットがえも言えぬだらしなさで、変態系風俗の取材でよく見るような男だ。そのドングリのように丸い目が私を見るなり、そのまま走って近づいてきた。

「石田さん」

ゾゾツとした。

「石田みどりさんですよね」

私はタクシーのドアを無理矢理に閉め、

「駅に戻って！」

運転手は何も言わず急発進してくれた。

そして地下鉄に飛び乗り、雑誌が出てから一度も行っていない『ナイトライヴ』編集室に向かった。二度と『ナイトライヴ』の敷居を跨ぐことはないと思ってたのに、けれど、今、私の恐怖をわかってくれそうなのはここしかない。

南森町の雑居ビルの二階の物置のような廊下をくぐり、『オフィス・ゼロ』と『週刊ナイトライヴ編集室』のラベルの貼られたドアを少しためらいながら開けた。校了の終わったばかりの火曜夕方の編集室には編集長しか残っていない。

編集長は、いちばん奥の席から、  
「おお、い、赤城ちゃん、困るでえ、いきなり行方不明になんか  
なったら」

と手招きして笑った。いつものグレースーツに紫のちよつと派手なネクタイが軽薄だ。

私はムラムラと怒りが湧いてきて、わざとツカヅカとした足取りで近づき、

「私がどうして引越ししなきゃならなかったか、わかってるんですか！」

「ああ、聞いたよ。災難だったね、何あれ、自殺だったの？」

「はあ？」

「私の名前、出したでしょ！」

「名前？」

「こ、こ、こ！」

私はそこにあつた『ナイトライヴ』の例のページをめくって編集長の鼻先に突きつけた。

「ああ、これね」

編集長は平然と答え、

「ものすごい反響だったらいいで、『美素人』に五十件近く電話があつたんやっつて、みどりさん指名で。断るのに苦労したって、社長が喜んでつた」

「あの」

と私は息を飲み込み、

「誰が私の本名をキャプションに入れたんですか」

「本名？」

「私、本名、石田みどりって言っんです」

「ハア？」と編集長の声が裏返った。「赤城ちゃん、赤城ちゃんって、ペンネームやったんか？ 石田みどりが本名なんか？ そう、知らんかった。そりやまずかった……」

編集長は頭を抱えてみせた。

「まずかったって、編集長、このキャプションはどうして入ったんですか」

「これ？ ボクが入れたで」

「ハア？」とこんどは私が裏返った声を上げた。「編集長が？」

「そうやで。校了ギリギリやったから名前、思いつかんでな、『美素人』に聞いたら、前にみどりって子がいたから、それ使ったらって言っんでな。そっかあ、赤城ちゃんの本名もみどりやったんかあ、そりやまずかったなあ」

やっぱり『美素人』が絡んでいた。『美素人』の絡みで、さっきの男もやってきたのか？ いや、『美素人』が私の新しい住所まで知っているわけはない。そうか、警察、か。私をいま「石田さん」と本名で呼ぶのは警察以外ない。あの住所を知っているのも警察だけだ。きつと、何かあの事件の絡みで動きがあったのだろう。それはまあ、それとして、レイナは？ あの場所でワケのわからないことを言っって脅迫して、しかも婦警にまで化けたレイナは。

「おい、大丈夫か、赤城ちゃん」

「あ、はい」

と返事しながら、異様な気配に気づいて振り返ると、レイナがちようど入ってくるころだった。

「みどりさん、時間がないの」

そう言っって近づいてくるのだった。

「やめてよっ！」

私はそこにあっただ週刊誌をひつつかんでレイナに向かって投げた。週刊誌はレイナの顔に向かって飛び、よけた大きな鞆に当たってバサツと床に落ちた。レイナの顔も一緒に落ちたのか、もとの場所

には編集部の山本さんの顔があった。

「赤城さん……」

山本さんの顔は壁のしつくないのように蒼白になっていた。

「山本さん、ごめん、私、なんだか今、おかしいんです」

「赤城ちゃん、色々あって疲れとるんやって」

「疲れてる？ 確かにそうかも知れない。」

「名前の出たお詫びさしてえな、な、これから『おごじょ』にでも行こや、今日はおごるで、じゃんじゃんやって。ええかな、山本ちゃん、あとの整理お願いして」

「はあ」と山本さんはワケがわからないといった風にうなづいた。

「ええやろ、行こや」

いつもなら断るお誘いだったけど、たった今取り乱したことへの申し訳なさもあって、

「いいんですか？ 私今日は飲みますよ」と応じた。

実はこの編集長とは肉体関係があった。もう四年も前の話だけど、妻子ある男との気の迷い、とでも言うのだろうか。あの時は何でああなったのか、いまだにわからない。猛烈なテクニクで肉体的にも精神的にも徹底的に屈服させられて、その屈服させられた恥辱と屈辱に重なる快樂がまた良くて良くて、もうこれ以上のセックスはないだろうと思っただのに、ひと月後にはもつと良くなって、半年後にはもつともつと良くなって、これは危険だと思っただけ、それからもう応じなかった。もちろん編集長は誘ってきたけど飲みにも二人では行かなかった。そのうち健多とデキて、健多との素朴なセックスも、これもまたいいかな、と最近では思っていた。

もしかしたら と今になって思う。私は編集長に「父親」を求めていたのかも知れない。なのに編集長は「父親」ではなく、紛れもない「男」だった。編集長には悪いことをした と今になって思う。

編集室からすぐの熊本料理の店はカウンターとテーブルが四つだけの、小さくてお洒落な作りだった。テーブルに向かい合って座る

と編集長はビールの他にキビナゴの刺身とさつま揚げを注文した。

「いやあ、大変やったね、とりあえず、乾杯！」

私たちはグラスを合わせた。

「でも、あの写真、ボクもグツと来たで」

編集長は腕で下品な仕草をした。一瞬でひどく嫌な気分になった。

「やめてくださいよ」

「いや、ホントに。キミの緊縛写真集出しても結構いけるんちゃうか」

「気持ちの悪いこと言わないください、冗談じゃないですよ」

編集長はいたずらっぽく目をして、

「ホントにお漏らし、したんか？」

「演出です！」

ククク、カカカと編集長は笑い、ビールを干しておかわりを注文した。今年四十五歳で二度の離婚歴があり、それぞれの元妻に子供が二人ずついて、今の奥さんとの間にも五歳と三歳の女の子がいる。俺は子供のためにどんなことをしても死ぬまで働く、が口癖のオヤジだ。

「でも、あの写真はよかったあ。石田ちゃんよりもいい写真やな」

「涼子ちゃんは遠慮してくれたんです、あんな写真撮るのを」

「みたいやな。演出？ してからの分は一枚もなかったから。でも

なあ、プロとしちゃ、どうやらな。先輩への気遣いも大事やけど、

いい仕事って意味じゃ……」

「そうそう」と私は編集長を遮って言った。「モデル代はただだけ

るんですか？ あんだけ顔出ししたんやから、要求しても当然やと

思うんですけど」

「駄目。そりゃ無理」

いきなり事務的な口調になった。

「経理上無理やで。ライターにモデル料なんか払るとしたら税務署に何言われるか。その代わり、別の、割のいい仕事をまわすから…

…」

「なんだか私」と私はまた編集長を遮って、

「この世界の仕事、嫌になっただんです。私の知らないところで顔は出るし、本名は出るし、なんだか薄気味悪い事件は起こるし」

「顔出しと本名は申し訳なかったけど、薄気味悪い事件はウチとは関係ないやろ」

「なんだか無関係には思えないんですよ」

私は、レイナや『美素人』が上の部屋の変死事件に関わっているとは思えない、本名まで出てしまったことも含めて、この一連の事件がどこかでつながっているとは思えない、とそんなことを編集長に言った。例の撮影の時の記憶が飛んでしまってることや、レイナが変なことを言ったこと、それから警察の入り口でレイナに会った件も言った。

「う~~~~ん」

と編集長はいつもの頭を抱え込むマネをした。

「女の勘、つてやつか？」

そう言って、パツと顔を挙げた。

「よくわからないんです」

「まあ、論理的に考えたらありえへんわな、そんなの。女の勘とかな」

「女の勘、ですか。でも、そんなんじゃないんで、もっと、よく言えないんですけど」

編集長は芋焼酎のお湯割りを注文した。私も同じのをたのんだ。

「論理じゃないんですね。刑事さんにも同じ話して否定されたんですけど、確かに論理的な必然性は無いと思うんですよ。『美素人』やレイナと、上の部屋の事件と」

「ほっ」

「でも、これって、論理じゃないんですよねえ」

ふと見ると、焼酎を持ってきた女はレイナだった。私はギョツとして凍りついた。言葉も出ない。なのにレイナは、

「時間がないんです」

とつぶやきながら、にこやかな顔で焼酎をテーブルに置くのだった。

私はもう我慢出来なかった。なぜ私につきまとうの。

「ちよつとアナタ」

私はレイナの腕をつかんだ。

その瞬間、私は消えた。

私という壁が消え、鹿児島出身でこの店のオーナーの姪で専門学校に通いながらここでバイトしつつ恋人はいるけどセックスにはまだためらいのあるこの子の気持ちが一気に流れ込んできて、腕をつかまれた不安と恐怖が私の胸にも突き刺さって　ごめんなさい、なんでもないので、なんでもないので　と、私は私の気持ちを送りこみ、どうしてそんなことが出来るのかはわからないけれど、ただ、出来るということはわかって、一気にこの子の気持ちが穏やかになり、私に全てを任せていることもわかって、私はこの子の全てを受け入れ、私の全てをこの子にあずけ、受け入れて、あずけられて、まるでセックスでもしているような恍惚と安心感が私たちに訪れて、それはセックスのようでセックスではなく、何も硬いところのないフワフワと柔らかい心が柔らかいままに触れあい、溶けあい、何の不安もなく、恐れもなく、ただ私は私で、この子はこの子で、一人一人でありながら互いの壁がなくなって互いの気持ちだけがダイレクトにわかる、不思議な心地よさで、こんな気持ちがあるなんて私たちは時間もなくてただ溶けあって、溶けあって溶けあって一人だった記憶や気持ちが無も残らないくらい溶けあって私もこの子も消えてしまいそうになったその時、

「おいおい」

という編集長の声で我に返った。

私はこの子の腕を離した。

この子は驚きながら、それでも柔らかかな、少し恥ずかしそうな顔をして、何もなかったかのように厨房に戻っていった。

今のはなんだったのか。

いつたい何時間あはしていたのか。

「おいおい、赤城ちゃん」

「編集長、今の見てました？」

「何を？ それより赤城ちゃん、なんであの子の腕をつかんだ？」

「まずいで、いきなり」

「私、どのくらいつかんでました？」

「一秒くらいか？」

一秒 私は呆然としながら、さっきのあの子との数時間を思った。あれは絶対に一秒じゃない。一時間でもない。そんな短時間であるはずがない。あれは何もかもが分かり合える数時間だった。絶対に。間違いなく。

そしてふと見れば、編集長の顔は想像出来る限りで最悪の顔だった。

「どこが、というのではない。ただの嫌悪のカタマリとしてそこにあるのだった。」

「編集長、ちよっと」

と、私は編集長の手を握ってみた。何も起きない。嫌悪感があるだけだ。四年前にあれほど感じた男の手とは思えない。編集長が握りかえしてくるのを急いで抜き、おしぼりで拭いた。手のひらのじつとりとした油が想像を絶して気持ち悪い。

「いきなり、何？」

そう聞いてくる編集長だけでなく、とにかく男というものが気持ち悪かった。なぜこんな気持ちになったのだろう。生まれてこの方、これほど男を気持ち悪いと思ったことはない。これからの一生、男を避けて生きて行けたらどれほど幸せだろう。そうやって男を避けながら、さっきの女の子のように私もなくあの子もなくなただ壁のない部屋のようなあけすけの気持ちを通じ合いながら漂って生きて行けたらどれだけ幸せかわからない。なぜこんな気持ちになったのか。

そう思っつてふと周りを見回せば、レイナ！



そろそろいつぱいになり始めた店の中にレイナがいた、あちらにも、こちらにも。そして、ひたすら、レイナと抱き合いたくなった。抱き合う、なんてものじゃない。セックスがしたい。どんなふうにするのかは知らないけど、とにかくレイナとつながりたい。つながって、それが何かはわからないけど、とにかく何かを受け取って。

「赤城ちゃん、赤城ちゃん、どうしたの？」

ふと我に返り、恐ろしいことだと思った。私はレズじゃない。中学の頃までは同級生の女の子に憧れとかそういうことを感じたことはあったけど、男の子を好きになってからは、あんなのは恋愛でも何でもなかったことに気づいた。恋愛の対象としては、ましてや肉体関係の相手としては、私には男以外にあり得ない。と思っていた。

けれど、この男に対する嫌悪感はいったい何？

そしてレイナへのこの飢餓に近い欲望は、何？

おかしい。

絶対におかしい。

そういえば、『美素人』に行つてからだ。『美素人』に取材に行つて、記憶を無くして帰ってきてから、なんだか健多がたまらなくうっとうしくなり、セックスもキスもせず、今日まで男を避けてきた。

危険だ。

これも理屈じゃない。

男を避け続けていると、かならず私に良くないことが起こる。私の心の中で何か良くないことが、必ず起こる。

私はそう確信した。確信して、編集長に言った。

「編集長、これから言うことを誤解しないで聞いて欲しいんですけど」

「なんや」

編集長はあらたまった目つきをした。

「ギャラのこと以外なら、何でもええよ。もしこれから抱いてくれるっていうのも、アリやけど」

「本当ですか？」

「本当、ほんとう。断る理由なんかないやん」

「正直に言っていていいですか？」

「いいよ。抱かれたくなっただんやろ？」

「その正反对です」

「ハア」と編集長は顔に引きつった微笑を貼りつけた。

「今の私の気分は、男を一生避けて生きていきたい、なんです。これ、わからないと思うんですけど、というより、私にもよくわからないんですけど、やっぱり『美素人』やレイナと関係があると思うんですよ、この気持ち。何より、男を避けたいんです。でも、ここで避け続けてたら、ものすごく危険な目に遭うような気がして、なんというか、とにかく、ごめんなさい、目の前にいるだれでも、男ならだれでもいいから、セックスをしておきたいんです」

「なんや変やで、赤城ちゃん。ボクはかめへんけど、同棲してる子とおっただんやなかつたか、その子やったら駄目なんか？」

「駄目です！」と私は声をあげた。「この嫌悪感が健多への嫌悪感になっちゃったらどうするんですか。編集長なら距離を置けますけど、健多は無理なんです」

「自分が男性嫌悪症になったのかどうか、ボクで試したいってこと？」

「多分そういうことなんだろう。私にもよくわからないし、とにかくこの件に健多を巻き込みたくはない、絶対に。」

「出ましよう。できるだけ早いほうがいいんです」

私は何か突き上げてくるものに突き上げられながら、まるで編集長の手を引くようにして『おごじよ』を出た。四年前、あれほど躊躇逡巡して入ったホテルだったのに、今回は全く、何の引っかかりもなく、私から足を入れた。四年前は編集長の奥さんの顔がちらついで、申し訳ない、申し訳ない、とばかり思っていたのに、今回は

自分からいちばん安い部屋を選んでエレベーターにも自分から入った。部屋でも私は灯りも消さずに服をポンポン脱ぎ捨て、ロブもまとわれないまま掛け布団を引っ掛けて、うつぶせになり、膝を立ててお尻を突き上げた。これは四年前にさんざん弄ばれた体位だった。編集長からは何もかも丸見えだろう。でも何の恥ずかしさもない。ただ試したいだけ。とにかく、ためらいみたいなもの、そういうものの一切が私の心から消えていた。

後ろで編集長が服を脱ぐ気配がした。四年前にはちょっとドキツとした、ベルトを外すカチャカチャとした音にも何も感じなかった。編集長の顔が私のお尻に近づき、肛門に息を吹きかけたのがわかった。でも何も、性的なことは感じない。

「あゝ」と編集長が言った。「ペーパーがついてる」  
「はあ」と平然と答えた。

「嘘だよ」

「そんなのどうでもいいから、早くして下さい」

編集長は私の女の部分に口を付けた。と思えばすぐに離してバタバタとベッドを降り、トイレに駆け込んでものすごい声をあげて戻っていた。

私はその様子をお尻を突き上げたまま聞いていた。

「すまん、飲み過ぎた」

私の後ろに戻ってきた編集長は言った。

「戻したんですか」

「すまん」

四年前はこうやって明かりの下でシャワーも浴びずに女の部分を舐められるのが嫌で嫌で、しかも味や形や匂いの変化までも事細かに論評される屈辱も耐え難くて、その恥辱までもを、さあ味わえとばかりに責め立てられる快楽に身も世もなく悶え狂ったものだけ、今は何もない。醒めている。醒めた嫌悪だけがある。

「編集長」と私は言った。「舐めなくてもいいですから、ペニスを入れてもらえませんか」

編集長は何も返事せず、私の腰を抱いたまま自分のペニスをいじっているようだった。私の中の嫌悪はたまらなく膨らみ、もうどうしようもないところまで来つつあった。

「どうしたんですか？」

「無理や、すまん！」と編集長は言っつて、そのまま私から離れ、

「無理や、無理。ちよつと、今日は無理」

安心したような、残念なような、それでも私はホツとして、脱ぎ捨てた服のいちばん上にある、少し汚れたパンティをはいた。昔はパンティなんか小さく折りたたんで服のいちばん下に滑り込ませたものだったのに。

「おい、赤城ちゃん、大丈夫か？」

「編集長こそ、大丈夫ですか」

「いや、オレは歳やで、もうあかん」

「そうですか」と私は軽く言っつた。

「赤城ちゃん」と編集長は言いにくそうに言っつた。私はブラの上にババシャツを着ながら編集長を見た。編集長は私から目をそらして、「あんな、匂いの変やで、赤城ちゃんのおそこ」

「変？」

「変やで。これまでまったく嗅いだことのない匂いやし、味も、何とも言えん、味わつたことのない味や。とにかく変や。だつて、オレ、舌、今でもしびれてる」

と編集長は舌を出して見せた。

私はその舌を見て、ヒツと息を呑んだ。

黒と黄色のマダラに気味悪く変色していた。

「もしかして……」と編集長は言いよどんだ。「赤城ちゃん、なにが薬物使つてない？」

「薬物？」

「変な向精神剤とか、その手のドラッグ」

「全然、全く……」

何も思いつくものはなかった。私は服を着ながら、編集長が同じ

ように服を着ているのを何か不思議な感じで眺めていた。

匂いが変、味が変わ、考えてみれば、女にとってこれほど屈辱的な言葉はないだろう。トイレに駆け込んで戻すほどのものだ。なのに何も感じない。むしろホッとしている。何かがおかしい。私の何かが変わった。

編集長とはホテルから出てすぐに別れ、地下鉄に乗り、一人で、今度は歩いて新しいマンションに帰ってきた。エントランスには昼間と同じ、三十過ぎの小太り、肩までの長髪、Gパンにノータイの茶色のジャケットがえも言えぬだらしなさの、変態系風俗の取材でよく見るような男が立っていた。昼間と同じように、そのドンダリのように丸い目が私を見るなり、こんどは歩いて近づいてきた。警察とわかっていればもう逃げる必要はない。

「『美素人』の件でしょ」と私は先手を打った。

「そう……です」

男はオドオドと答えた。

「新しい情報ですか」

「というかぁ」と男は言いよどんだ。

「部屋で話しますか？」

「いええ、出来たらあ、ウチまで来ていただきたいんですけど」

「この時間からですか」

「はあ」

時計は十一時をまわっていた。けれど、この男は私が『ナイトレイヴ』に逃げていった五時からずっとここで待っていたのだろう。

何か申し訳ない気がして、

「いいですよ、お宅まで行きましょう」

そう言うと、男の顔がパアツと明るくなった。新米の刑事なのか。その安心した顔に私も少し安心した。

「車とつてきますね、そのこの駐車場に入れてるんです。ちょっと待っててください」

男はそう言って走った。

携帯をチェックした。

健多からのメールだった。

「太秦の牛祭、青鬼、赤鬼、マダラ神。秦河勝、マダラになって祭られる」

なんだこりゃ。またメールをメモ替わりに使ってるな。

返事も書かずに、私は助手席に座ってドアを閉めた。

「石田さんは今フリー、なんですよね」

発進すると男は言った。

「そうです。あちこちからフリーに扱われるって意味だけのフリーですけど」

「フリーってそういう意味なんですか？」

「そうですよ。自分の自由になることなんか何にもないんです。相手の要求に応えてるだけで」

「相手の自由って意味のフリーなんですか」

「そうですよ」

「なんだあ」

「納得して貰えました？ ま、どこにも所属してないなんて、そんなもんですわ」

そういうと、私はなんだか安心してひどく眠くなり、目を閉じた。思えば長い一日だった。昼前に起きてパンとゆうべの残りのスープとジュースとコーヒーでランチにして少し原稿を書いたりして、それで二時には家を出て、三時前に警察についたのに、一時間近く待たされて、それで話をしたのは三十分くらい、警察の玄関ではレイナに会うし、逃げてきたここではこの男に会うし、それでまた逃げて『ナイトライブ』に行つて、編集長と会つて、飲みに行つて、ホテルに行つて、それでも結局うまく行かないで、帰ってきて、しかもまたこれから警察と話なんだと。こりゃ、今日は私のいちばん長い日になるな……。

「着きましたよ、この三階です」

目が覚めてごく普通のマンションの前で下ろされた。

男は車を駐車場にもっていった。

「ここですか」と、私は戻ってきた男に聞いた。あまりにも普通じゃない。

「ええ」と男は少しはにかんで言った。

まあ、警察にも何か事情があるんだろう。担当の刑事は私の上の部屋の事件と『美素人』とは無関係だつて断言してたし、だからきつとそれとは別ルートでの『美素人』の調査が進んでいて、あちらには気取られないように、こうしてこんなところで話を聞くのだろう。警察の中の派閥争いみたいなのは良く聞く話で、そんなことにあまりこつちが細かく気を使わない方がいい。こつちは素人なんだから成りゆきに任せたほうがいい。たぶん。

案内されたのは、表札には「畑野勝也」とある、恋人が来る前に急遽片づけたような、ごく普通の独身男性の部屋だった。何か変だど一瞬思い、それでも特に詮索する気も起きなかつた。刑事が自宅で話を聞くこともあるんだろう。

それにしてもハタノカツヤ、ハタノカツヤ、どこかで聞いたことのある名前だった。

「どうぞ」と座布団を勧められるままに座り、Gパンだったから脚を崩した。

「あの」と男は言いにくそうにして、そのままうつむいてしまった。

「何でも聞いて下さい。そのために来たんですから」

「何か飲みますか？ ビールもありますけど」

「じゃ、ビール下さい」

畑野は台所で缶ビールの栓をあけ、コップに注いで持ってきた。

私はそれを一息で飲み、また缶ビールの残りをコップに注いで、

「何でも聞いて下さいね」

「料金、なんですが？」

「料金？」

「一体何を言ってるの、あなた。」

「フリーでも料金は『美素人』と同じなんですか」

「ハア？」

私はまた聞き返した。

「料金？」

「もう『美素人』は辞めたんでしょう。いまフリーだって」

「フリーって、フリーライターって意味じゃ……あの、あなた、刑事さんじゃないの？」

「……」

「違うの？」

畑野はうつむいて黙りこんでしまった。

とんでもない勘違いに気づいて、私は「帰る」と言って立ち上がり、それならどうして畑野は私の本名や新しい住所を知っていたのか！

これだけは聞いておかなきゃ。

「アンタ、私のストーリーカーなん？」

私は落ち着いて、畑野を見下ろしながら言った。

何も怖くなかった。もし変なマネをするようだったら、こんなヘナチヨコ男、蹴り倒したらいい。今、こいつの頭はちょうどローで蹴り倒すのには अच्छい位置にある。中学までやって段位も持っている拳法はこんな時に使うものだ。

「いえ、そんなんじゃない……」

「そんならなんで私の本名とか、新しい住所とか、知ってんねん！」  
畑野は泣きそうな顔をして黙りこんだ。

「なんでやつ！」

言葉を荒げ、蹴るマネをすると、畑野は両腕を上げて自分の頭をかばい、腕の下から、

「モニタリングしてたんだよお、『ナイトライブ』のパソコンを」

「モニタリング？」と私は聞き返した。「何や、それ」

「『ナイトライブ』のパソコンにネット経由で侵入して、データの更新をチェックしてたんだよ。それで、『ナイトライブ』に出てたみどりさんの住所が変更になって、『フリー』って書き込まれた



んで、一回、みどりさんに会いたかつたんだ、それだけだよ」

どうして『ナイトライヴ』が私の本名を知ってるの？ それってさっき編集長に言ったばかりじゃん。

「そのデータ、そのパソコンに入っとるの？」

私は男の机の上のパソコンを指さした。

「そのデータ、見せてよ」

「嫌だっ！」

いきなりなんだ、こいつ、なんて生意気なヤツ！ 自分の置かれた状況をちよつと体に教えてやろうか。

「暴力は駄目だよお、ボク何にもしてないのに」

私が型を決めたのを見て、泣きそうな声でこいつは言った。

そうだ、冷静になって考えてみれば、こいつは私に何の危害も加えてはいない。私がこいつに暴力を振るっていい理由はどこにもない。ここにやって来たのも、単に私が勘違いしてただけなんだし。

「暴力は振るわないからさ、そのデータだけ、見せてくれないかな」  
私は少し下手に出て言った。

「駄目だよ、石田さん、『ナイトライヴ』に告げ口するだろ」

「せーへんて！ それはない。やって、もしそんなデータがあるんやったら、私もあそこの被害者いうことになるんやで」

「そんなの信用出来ないよ。それに、大変だったんだから、ファイヤールール破ったり、エニグマを解除したり、弱小のミニコミ編集部にしてはやたらと……」

「ねえ」と私はまた下手に出て言った。「やらしてあげるから、データ、見せてよ」

編集長とはうまく行かなかったから、こいつで試してみよう。もう男だったら誰でもいい。どれも同じ嫌悪のカタマリだ。

「やらしてくれるまえに……」

「何よ」

「オシッコちょうだい」

何を言い出すのだ！ こいつは。

「そういう店なんですよ、『美素人』は。そこにいたんですよ、石田さんは」

呆れながら、まあいいかと思った。そう思った自分に呆れながら、やっぱり自分はどうかしている、と思った。本当に目的のためなら何のためらいも羞恥も感じない。

「どうしたらいいの？」

畑野は立ち上がって台所に行き、大きめのガラスのコップを持ってきた。

「ここでしたらいいの？ 飛び散るわよ」

「新聞紙を敷くから」

畑野は新聞紙を広げ、その真ん中にコップを置いた。

「してよ」

何の羞恥もためらいも感じなかった。

見られても、使用済みのペーパーを広げられて嗅がれても、また、コップの中身を口に含んでブクブクと音をさせながらじつくりと味わう畑野を見ても、ただの嫌悪しか感じないのだった。こういうの、まともな女だったら生きていけないような恥辱じゃなかるうか。私は女でなくなつたのか、いったい私は何になつてしまったのか。

「ねえ、石田さん」

畑野は口もゆすがずに言った。

「妊娠してる？」

「してへんよ」

「絶対に？」

「うん、絶対に」

「でも、生理、遅れてるでしょ」

生理……生理ってなんだっけ それにしても、何にしても、最近やってないのだから妊娠のしようもない。

私の返事を聞くと、畑野はまたコップの中身を口に含み、ブクブクと味わうのだった。そして、

「絶対に妊娠してる、でも」

私は何か気が遠くなるような気がして、

「な、何よ、何が言いたいのか？」

「言っとくけど、まともな妊娠じゃない。妊娠というより、もっとちがうものかな。ねえ、みどりさん、何か病気にかかってない？」

「かかってないよ、そんなの」

「みどりさんは、人間？」

何を言ってるの？ バカじゃない、こいつは。でも私は言葉をなくした。

「みどりさんって、本当は女神とかそういうのじゃないの？」

「何を言ってるの？」

「この香り、嗅いでごらんよ」

畑野はコップを差し出した。ものすごく素敵な柑橘系の香りだった。レイナと同じ香りだった。

それに気づかないふりをして、

「やめてよ」と言い、早くこの話題から遠ざかりたくて、

「じゃ、約束よ。私のデータを見せて」

「もうちょっと待ってよ」

そう言っただけ畑野はまた口に含み、ブクブクと味わった。

そして私をじっと見た。

私は少しいらついできた。

「いったいどうしたのよ」

畑野は口の中のを飲み込み、

「みどりさん、年は？」

「失礼ね。いったい、何が言いたいのか？」

「五千年も生きてるなんて言わないよね」

「ハア？」

「みどりさん、本当は女神でしょう」

私はギョツとして、

「な、何を言うかと思えば。あんた本当の変態だな」

「変態からお金を取るのが商売のくせに、何を言ってるんだよ」

ひどく生意気な口調に、私が本気で蹴りを入れようかと思ったところ、

「『美素人』のレイナちゃん知ってる？」

と出鼻をくじかれた。

またレイナ！

「レイナのことも知ってるの？」

「知ってるよ。有名だから。半年前、レイナに今と同じこと言ったら、ブラックリストに載せられちゃった。気持ち悪いって、出入り禁止。でもみどりさんはフリーだから、別にいいんでしょ、直接交渉で」

そうだ。こいつの下らない趣味に付き合ってる暇はない。とにかく今は、その『ナイトライブ』のデータだ。

「だから早く、そのデータを見せて」

「うん」と、畑野はコップの残りを、まるで残ったスープか何かのように冷蔵庫に入れた。

「ちょっと」と私は気になることがあって畑野に言った。「口の中、見せてくれる？」

畑野が開けた口の中は黄色と黒のマダラに変色していた。

私は不気味さに声も出なかった。鏡を見ろとも言えなかった。

「さて」と畑野は居間のパソコンに向かい、「登録リストを見てみようか」

畑野が画面に広げた表には十数人の「氏名」「住所」「電話番号」

「現状」の項目が並んでいた。

「石田さん、石田みどりさん、これだね」

畑野はカーソルを私の位置に持っていった。

「今の石田さんの住所、これで間違いないよね。電話はまだ（未）だよ」

私は呆然として、

「なんで、なんで『ナイトライブ』が私の新しい住所知ってるの」「知らないよ、そんなの」

私の住所の横には「現状」の欄には「フリー」。

フリーってフリーライターのことじゃないのか。

「あんだ、さつき、私が妊娠してるって言ったよね」

「間違いないよ、ただし、まともな妊娠じゃない」

「どういう意味？」

畑野はまた考え込んだ。

「何かに寄生されてるとか、そういうのかもしれないし。とにかく味が違うとしか言えないなあ」

「味？ そんなのでわかるの？」

「わかるよ、絶対に。ボク、二千人くらいの女の人のオシッコ飲んだんだから」

ゾゾツとした。

「こんな味がするのはレイナちゃんとみどりさんだけだよ」

ああ、薄気味悪い。私はまたパソコンの画面に戻り、そして、前のマンションと同じ住所を見つけた。

私が「501」で、そして「601」！

あの部屋だ。「江藤祐子」。なんで「江藤祐二」の本名を知ってるんだ、「ナイトライヴ」が。

「現状」の欄には「神上がり」。

「神上がり」ってなんだろう。死んだってこと？

「ねえ、このデータ、プリントアウトして」

「駄目だよ、みどりさん、これ警察に持っていく気だろ。そんなことされたら、どこで手に入れたってことになって、ボクのこと絶対言うだろうし、そしたら、警察に調べられて、ボクのやってることがばれて、困ったこと……」

「あゝ、わかったわかった」と私は面倒になって畑野を遮った。とにかくクダクダ理屈を言う男は嫌いだ。それにひどく眠い。怖くて不安なのに、とにかく眠い。起きていられない。

「私、ここで寝てもいいかな。もう十二時過ぎてるでしょ。起こさないんだったら寝てる間に犯してもいいからさ。布団だけ貸して」

「本当？ それとさ、朝一番のオシッコを」

「やるよやる。だから布団を敷いて」

「ウンコも」

「根っからの変態だな、あんた」

「変態を食い物にしてる連中に言われたくはないね」

「アタシは違うよ。フリーはフリーでもライターだもん。『美素人』  
なんかただの取材先だよ」

「でも、『美素人』の売り上げでギャラもらって食ってるわけだし  
よ」

「まあ、そりゃそうだけど」

「一緒じゃん、それに、さっきボクの目の前でオシッコした」

「なんだかひどく面倒になってきた。」

「もういいから、なんでもやるから、早く布団敷いて」

「頼むよ、明日の朝」

私は服の上からブラを外すと、パンティとババシャツだけの姿で  
畑野の布団に潜り込んだ。カビくさいかと思えばそんなことはな  
かった。シーツも洗い立てで家の布団よりも快適だ。私はすぐに眠り  
に入った。

「ハタはいけない」

レイナが言った。

「どうして？」

私は聞き返した。

これが夢の中だということにはわかっていた。なのに、このリアル  
さはそのまま現実で、しかも心地よかった。そう、まるで、『おご  
じょ』での数時間のよう、私が私でなくなった心地よさだった。  
レイナに対しても、これまでのような不気味さは感じなくなっ  
ていた。

「危ないわ」

「危ない？ どうして？」

「危ないわ」

「危ない？ どうして？」  
「危ないからよ」  
「危ない理由は？」  
「危ないからよ」  
「危ない理由は？」  
「とても危ないからよ」  
「そんなに危ないの？」  
「そうよ、危ないの」  
「どうしたらいいの」  
「殺すのよ」  
「殺すの？」  
「そうよ、殺すのよ」  
「どうして？」  
「殺すからよ」  
「誰が殺すの？」  
「あなたが殺すのよ」  
「私が？」  
「あなたが殺すのよ」  
「どうして？」  
「あなたが殺すからよ」  
「どうして私が？」  
「あなたがあなただからよ」  
「私が私だから？」  
「そう、あなたがあなただから」  
「私が私だからね」  
「そう。殺せばいいの」  
「殺せばいいの？」  
「殺せばいいの」  
「どうやって？」  
「殺せばいいの」

「どつやって？」

「殺せば死ぬから」

「殺せば死ぬのね」

「そう。殺したらすぐに死ぬから」

「殺したらいいのね」

「そう。殺せばすぐに死ぬから」

ふと目を覚ますと、もう朝の光が部屋に差し込んでいた。思ったよりも明るく、小綺麗で、本棚にはファイルやコンピュータ関係の本がきちんと整理されていて気持ちの良い部屋だった。物をあまり置いていない広い床に斜めから朝日が差し込んで、爽快な朝だった。思えば化粧も落とさないで寝てしまってたんだ。そうだ、アイツはどうなったのか、あの変態は。

時計を見ると四時十五分。

四時！

もう夕方なのか。

服は？ なんで裸なの？

猛烈な吐き気。

真っ赤な血がトイレに飛び散った。見たことのないような赤が、水の中に溶けていきながら黄色と黒の渦を描いた。

畑野の口の中を思い出してまた私は吐いた。

なんて気色の悪い色……。

吐いた物を流し、洗面所で顔を洗い、口をゆすぎ……携帯が鳴った。私のだ。鞆から取り出して出ると涼子ちゃんだった。

「赤城さん、ご存じでした？」

いきなりご存じもないだろう。

「何を？」

「編集長のことですよ」

「編集長がどうかしたの？」

「落ち着いて聞いて下さいね」と涼子ちゃんは言った。涼子ちゃん  
は私たちの関係を薄々感づいていて、四年前から心配してくれてい



たのだった。

「亡くなったんです」

私は気が遠くなり、それでも自分をしっかりと支えなきゃと思い、  
「いつ？」

「ゆうべらしいんです。あまり詳しいことはわからないんですけど。  
葬儀は密葬で明日、今日の通夜も親族だけで済ますらしいんです」

「そう……」

私は編集長とホテルに行ったことを思い出した。結局出来なかつたことも。やっぱり、体調がよくなかったんだ。

「死因とかは？」

「警察がね……」と涼子ちゃんは口ごもった。「さつき、赤城さんと編集長との関係で知ってることがあつたらって聞いてきたんですよ」

私は心臓が飛び出そうなくらい驚いて、

「警察？ 殺人とか、そういうの？」

「わからないんです。私も今日、警察が来たから、編集長が死んだのを知ったくらいで。そっちには警察、行かなかつたんですか？」

「来てない、と思う」

「……と思う？」

「涼子ちゃん」と私はしつかりと言った。「私の回りで起こってる事件って、絶対につながりがあるの。『美素人』やレイナや上の人や編集長が死んだのや」

「はあ」と涼子ちゃんは曖昧な返事をした。

「実は、きのうの夜から今日の記憶がないの。きのうの夜、寝込んでしまつて、気づいたのが今なのよ」

編集長とホテルに行ったことは黙っていた。

「変ですねえ」

涼子ちゃんは少しの間、黙りこんだ。その沈黙の雰囲気、涼子ちゃんが私を疑っているのがわかった。

「じゃ、また連絡するから」

携帯を切り、隣の部屋の戸を開けた。

そこにあいつが裸で倒れていた。少し出た腹を抱えて何かの幼虫のように丸まって、目は見開いたまま黄色と黒のマダラに染まった舌を出して倒れていた。口からの血と下半身の血が一つの血だまりになっていて、その中に白い裸が浮かんでいるのだった。

私は不思議と落ち着いていた。レイナの夢を思い出した。

「殺せばいいの？」

「殺せばいいの」

私が殺した？

胸にこみ上げてくるものがあつて、またトイレに駆け込んで吐いた。また血がドツと溢れた。そして気が付けば脚の間からも血が溢れている。

何これ。

脚の間から、ヌルリ、と、何かが滑り落ちた。

床に落ちたのは、黄色と黒のマダラの、指くらしいの太さと長さの細長い虫だった。血にまみれてグルグルとのたうった。

私は気が遠くなって赤い血の中に倒れ込んだ。

……

(つづく)

### 3 マダラ神

目を開けると見たことのない天井だった。

「聞こえますか？」

拡声器を通した男性の声でした。

私は起きあがろうとして、

「そのまま動かないでください。ご自分の名前がいきますか？」

「石田みどり」

「生年月日は？」

「一九七三年三月三日」

意識戻りました

プシュツと空気の抜けるような音がして、部屋に灯りが点いた。

まぶしさに目を手で押さえながら起きあがると、

「気がつきましたか？」

白衣の似合う男が近づいてきた。三十代前半だろうか、細い縁なしメガネのノーブルな顔つきに、信じられないほど爽やかな笑みを浮かべている。歯並びはこれ以上ないほどよくて、歯そのものも真珠のように白い。イケメンだ。

「あなたは……」

「私たちについての説明は、面倒だから後にさせてください」

男は落ち着いた声で言った。

「それより、記憶、戻ったんじゃないやありませんか。『美素人』に行っ

た時のこと」

「記憶？」

そう言われて

記憶が

記憶

。

私は叫んだ。

叫んで、叫んで、叫んだ。

おぞましい、あまりにおぞましい記憶の奔流に、私は耳を押さえ  
て叫んだ。

叫んだ、叫んだ、叫んだ。  
私は強姦された。  
レイナに。

ぴったりと貼りつけられたレイナの女の部分から私のそこへとト  
ンネルを潜るようになってやってきたものの感触がよみがえって私は  
また叫び、そして 足もとでのたうつ黄色と黒のマダラの  
叫んだ、叫んだ、叫んだ。

叫び疲れ、こんどは黙って頭を抱え、ひたすら泣いた。

「大丈夫ですか？」

「あなたは、誰？」

「レイナを追ってる者ですよ」

「レイナ？」

「そうです」

「なぜレイナを？」

「あなたも体験されたでしょう、レイナのこの得体の知れなさ」  
私は震えながら頷いた。

「誰に、どう説明します？」

「あなたは、警察？」

「それに近い者です」

「編集長は？」

「お気の毒ですが……」

「もしかして、私とホテルに行ったことが……」

「わかりません。関係があるともないとも、今のところは」

「今のところ……」

「私たちは無関係だとは思っていません。ところで、畑野の死体、  
ご覧になりましたよね」

八夕の死体

そうだ、私は畑野が死んでいるところも見たのだった。

なんでこう、記憶が飛び飛びなんだ！

「あいつ、死んだんですか？」

「あなたはご自分の体の異変に気づいておられましたよね」  
体、というより、気持ちの異変の方が著しかった。でも、

「はい」

「あなたの子宮の中には寄生虫がいたんです。その寄生虫の毒にやられたみたいですね、畑野は」

私はひらめくものがあった、この男に聞いた。

「畑野は私をヤツたのね」

男は深々と頭を下げ、

「お気の毒です。私たちの追跡も間に合いませんでした」

私は、ふう、とため息をつき、そういえば、あの時の私は変になっていて、畑野には寝ている間にヤツてもいいよと約束していたことも思い出して、

「畑野ってどんな男だったの？」

「ただの変態ですよ。変態のプログラマーですね。あいつのパソコンから、数百人の女性の尿の味とかそういうデータが出てきましたよ、笑うでしょ。糞尿マニアの変態でしょうね。まともなセックスなんて出来ないんじゃないですか。今回はあなたにビールに入った睡眠薬を飲ませたみたいですね。とにかく、あんなの、死んだって誰も悲しまない変態です。人間のクズです。カスです。ハハハ、カカカ」

男の爽やかな笑いを聞きながら、私は自分の気持ちを眺めていた。  
編集長と畑野　私に関わった男が二人、死んだ。それなのにほとんど悲しくない。

「わたしは、どうなるの？」

「大丈夫です。レイナと接触した女性はあなたが初めてじゃありません」

「他の女性は？」

男は少し躊躇して、それでも爽やかに「はい？」と聞き返した。

「他の女性は？」

「落ち着いて聞いて下さいね」

「はあ」

「あなたの前の部屋の、上の方、あの方は、レイナに接触した女性だったんです。私たちがずっと監視してたんですが、いつの間にか行方不明になって……」

私は気が遠くなるのを堪えながら、

「私は、どうなるの？」

「わかりません。レイナと接触したことの確認がとれた女性は、あなたが二人目なんです」

「私、死ぬの？」

「なんとも言えません。研究は始まったばかりなんです」

「私、その寄生虫に寄生されてたの？」

「そうです。ただ、ハッキリ言つて、どんな寄生虫なのか、サンプル数が少なすぎて、なんとも言えないんです。全くの新種だということだけはわかっています。それと、わかってるのは、人間の精液に弱くて、精液を浴びると子宮から出てきて死ぬことですね。だから男の嫌がる臭いを出して、また、毒も出しています。体質によっては自分も相手もショック死することもありますね」

畑野はそれで死んだのか。私もこんな状態だし。

「人が死んだのなら、警察に……」

「この件に関しては、もつと上の、巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で壮大で大きな意志が働いています。あなたはなにも心配する必要はありません」

奇妙な言い方だなと思つたけれど、私は少し安心して、

「私、帰つていいのかな？」

男は少し悲しそうな顔をした。

「ここにいて、健多に知らせなきゃ」

「あ、ああ、その方には、あなたが事件に巻き込まれて警察で保護しているだけ伝えます、ご心配なく」

「健多……心配、してた？」

「もちろん」

それを聞くと、いきなり涙があふれてきた。

健多！ 懐かしい健多！ 会いたいよう。

私は泣いた。今度は静かに泣いた。なんでこんなことになってしまったんだ。

そつだ、携帯は？ 私の携帯。

「携帯、ありますか」

「病院内は携帯は使用禁止なんです。もう少し回復したら、待合室の公衆電話をお使い下さい」

私はがっくりと肩を落とした。

「お気の毒です。でも、しばらくはここにいて下さい。あなた自身の安全のためでもあります」

「あなたは、誰？ 本当のところは、誰なの？」

「知らない方がいいでしょう」

男はこともなげに言った。

「知らない方がいい？」

「裏の世界の自衛隊とでもいいますかね。この大日本を脅かすのは外国だけじゃありません。人間だけでもありません。レイナのような存在も、この大日本の根幹を揺るがしかねませんから。私たちは常に網を張って、そういう、妖怪であるとか、幽霊であるとか、鬼とか悪魔とか、そういう邪悪な存在をチェックしているんです」

男は実にはきはきと爽やかに言った。でも言ってることはメチャクチャだ。

「邪悪な存在……」

「あなたも体験なさったでしょう。得体の知れない寄生虫をうつされて、記憶も操作されて……」

「邪悪な存在……」

私の脚の間から滑り落ちた黄色い黒い

私はまた叫ぼうとした。それを男は私の口に人差し指を置いて押しどめ、

「さあ、少し休んで下さい。あなたは丸二日、寝てたんですよ。体が元に戻るまで、とにかくお休み下さい。元気になられたら、またお話しを聞かせて下さい。あなたは巨大で巨大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で巨大で大きな意志に守られているってことをお忘れなく」

パジャマの前を合わせて横になると、側にいた男の看護師が掛け布団を整えてくれた。

「何も考えなくて結構ですよ。早く回復して下さい」

看護師が点滴を付け替えた。私はまた眠りに落ちていった。

……

バタバタと廊下が騒がしかった。遠くでは女たちの叫び声も聞こえていた。

あれは夢？

どれくらい寝たのかわからない。

私はまた起き上がり、下半身に尿を取る管をつけられていることに気づいた。

まるで重病人みたいだ

座ってポーツとしてしているとまたあの男が入ってきた。

「ごめんなさい、目がさめてしまいましたね」

見れば、白衣は血で汚れている。

「これですか？」と私の視線を気にしたのか、男は爽やかな口調で言った。「ちよっと、動物の解剖実験が入ってましてね。気になりますか？」

「いえ、いいんです。でも、なんだか向こう、女の人の声が出たみたいで」

「驚かないで下さいね」

「これ以上、何に驚けって言うんですか」

ハハハ、カカカと男は実に爽やかに笑った。裏の世界の自衛隊軍人の笑いとは、多分、こういうものなんだろう。

「実はですねえ」と男は愉快そうに笑い、「あなたと一緒に『美素



人』の常勤の女を八人とも確保してたんですよ」

また『美素人』か。

「『美素人』って、女の子は九人でしたよね」

男の爽やかな表情が一瞬、曇った。結構わかりやすい男だ。

「そうですよ……」

「レイナは？」

「確保出来てません」

男の顔が実に残念そうに歪んだ。

「レイナって、何者なんですか？」

「その答えを探してるんです、私たちは」

そう言っつて男はベッドの食台を広げ、そこに二枚の写真をならべた。いちばん古いのはファッションから言っつて二十年くらい前、そして現在のカラー写真。どれも集合写真で、場所にも組み合わせにも共通点はない。ただ、一人の顔を除いては。

「これが、レイナです」

男の顔から笑みが消えていた。

「ありえませんか」と、私は首を横に振っつてみせた。実際、ありえない。どれも二十五前後のレイナなのだ。

男もまた首を横に振った。

「私たちが追っつているのは、こういう存在なんです。歳をとらない、老けない、死なない」

「不老不死、つてことですか？」

「わかりません。とにかく、私たちが追っつているのは、そういう存在なんです」

「レイナはあなた達から逃げてるの？」

「レイナ自身にはそんな意識はないと思います。寄生虫に操られてるだけで、自分の考えなんかないんじゃないでしょうか」

「私はもう、寄生されていない、んですか？」

「一応は、そうです」

「一応？」

「まだ疑いは残ってるってことです。ほら、本来なら女性が来るはずでしょう、私のような医官にしたって、看護師にしたって。でも、疑いがある間は、女性を近づけるのは危険だと判断して、こうやって男性が来てるんです」

「レイナからうつされた女が、別の女性に、その、寄生虫をうつすことはあるんですか？」

「もしうつるとしたら大変なことになります。その例はまだないみたいです。それより……」

と男は実に爽やかな笑みを見せた。

「お腹、すいてませんか？」

「あまり感じなかったんですけど、今も、それほど」

「カロリーは点滴で取ってますから、空腹は感じないと思いますよ。まあ、もう少ししたら重湯も食べられるようになります。それじゃ、今はしっかりとお休み下さい。とにかく、あなたは巨大で巨大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で巨大で大きな意志に守られているということ、これをお忘れなく」

点滴を交換すると、男は靴音をカツカツと響かせながら出て行った。軍人の足音とはあんなものなだろう。

「邪悪な存在……」

一人になると、私は声に出してみた。そして私が寄生されていた間にやった所行、女の子の手を握って恍惚となったこと、編集長とホテルに行つてやったこと、そして畑野　すべてを思い出して赤面どころじゃなかった。私は編集長の癖のように頭を抱え、そして編集長も畑野も私に関わって死んだことを思つて、泣きながら横になり、またまどろみに落ちていこうとした、そのとき、バタバタとした足音が近づいてきて病室の戸が激しく開いた。前にもいた男の看護師だった。

「無事でしたか？」

「ハア」と答えると、看護師は私の点滴を外して絆創膏を貼り、

「失礼、少し痛みますよ」といいながら、下半身の管を抜いた。嫌

な感触に、私は「ヒッ」と声をあげた。

看護師は尿の袋を外してカッターで切り、中身を洗面所にザツと流した。

なんか嫌なコトする人だな。

「あの……」

「静かに。とにかく、私と一緒に逃げるとです」

奇妙なアクセントで話す看護師は私の手を取った。私が裸足で床に降りると看護師はスリッパを差し出した。

「何がどうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも、あなた、生きたまま解剖されて尿を取るだけの体にされたくはなかでしょう？」

「解剖？」

一瞬で気づき、ゾツとした。あの男が「邪悪な存在」に寄生された人間をそのままにしておくはずがない。さっきの血まみれの白衣。あの男はきつと誰かを解剖して……そうだ、「美素人」の女たちは？ もう解剖されてしまったのか？

看護師に導かれて廊下を走った。突き当たりの戸を開けて外に出ると陽の光がまぶしかった。そのままスリッパを履き、看護師の持っていた男のコートを被って振り返ると、白い、冷たい感じのコンクリートの建物だった。

見たことがある。

私は看護師について生け垣を潜り、雑木の林の中に入っていった。木々の中を看護師の後ろ姿を追いかけながら、とにかく走った。下りだった。あの病院はかなり山の上にあるのだろう。

それにしても 生きたまま解剖、だと。

私は寝ている間に聞こえた女の悲鳴を思っ脚が崩れそうになりながら、走った。看護師のはじいた枝が顔に当たった。触ると少し血が出ていた。それでも声も上げずに私は走った。

すぐに舗装された広い道に出た。そこに停めていた四駆の後ろの座席に私を押し込み、看護師は運転席に乗りこんだ。運転席の時計

をみると九時だった。

「全部、忘れて下さい。このことも」

「ここは、何だったんですか？」

「知らん方がよかです。あなたは何も知らんし、憶えていない。そうですね？」

看護師は真面目な口調で言った。

「私は何も知らないし、憶えてない」

「そうです。あなたは薬を投与されて、大阪のマンションから連れ去られたんです。それで気がついたら、これから行くホテルの部屋にいた。その間のことは、あなたは何も知らんし、憶えてない。これから誰に聞かれても、そうお答え下さい。それ以外にあなたが生き残る手段は、多分、無かいです」

「生き残る……」

「そうです」

ポツポツと民家が見え始めた。そして振り返ると、見たことのない景色が広がっていた。大きな山の裾野らしい。

ここも、見たことがある。ものすごく懐かしい場所として。

「ここは？」

「富士山です」

一瞬、自分の巻き込まれた事態の深刻さに、気が遠くなった。

「驚かれたでしょう」

「驚くよりも、なんだかひどく疲れました」

「どうぞ横になって寝とって下さい。連中の薬が、色々、効いとりますけん」

私は後部座席に横になった。確かに何か薬が効いているのだろう。あれほど寝たのに、まだ眠い。

起こされると、ラブホテルの駐車場だった。

「心配しないでください。降りて、とりあえずこの部屋にいて下さい」

パネルで部屋を選んだ看護師は私をすぐにエレベーターに乗せた。

部屋に入ると、

「シャワー浴びて、ゆっくりお休み下さい。いいですか、あなたは何も憶えとらんとですよ。生き残りたかったら、全部、忘れるとです。これからこのことは大事件になるはずですよ。よかですか？ あなたは気が付いたらここにいたんですよ。巻き込まれて大変な目に遭いたくなくなったら、あなたは全部忘れるんです」

私は曖昧にうなづいた。

「今のあなたは健康です。誰が何と言っても何も問題はなかとです。寄生虫とかナントカ、『巨大で巨大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で巨大で大きな意志』だのなんだの、全部が嘘のデタラメです。連中は奇怪な宗教団体なんです。いいですか、あなたは薬物漬けにされて、記憶もムチャクチャになってたんです。だから、本当に見たと思ってても、それは薬で見させられたんじゃないかもしれないってことも疑ってくださいね。いいですか、寄生虫なんていないんですよ。誰に聞かれても、このことは憶えてないって言ってくださいね、でないと、警察とか、いいや、もっとややこしいところも動いて、あなたの人生はメチャクチャになりますよ、わかりますか？」

「はあ」

「とにかく、人の命なんか屁とも思わない連中なんです。しかも、これを国家のプロジエクトだと思い込んでるんです」

「国家……思い込んで……」

「だから何でもやります。人の命も屁とも思いません。わかりますね、忘れるという意味」

私は曖昧にうなづいた。

「それでは、お元気で。すぐに助けが来ます。まずシャワー、浴びてくださいね」

看護師はそのまま部屋から出て行った。

まずシャワー浴びて、か。そんなにひどい格好かな。

私はバスルームに入り、そしてギョツとした。

鏡の中のやつれ果てた女。額にはうつすらと血がにじみ、髪は細かな埃にまみれて灰色、落ちくぼんだ目と頬、肌と境のない唇。

これが、私？

自分で抱いた肩には骨しか感じられなかった。コートとその下のパジャマを脱いでも鏡を見る勇氣はない。シャワーを浴びながら見た足の細さ、いつのまにか剃られた陰毛……これが私なのか。

生きたまま解剖

確かにこれは解剖される寸前の生き物だ。

でもシャワーは信じられないほど心地よかった。そこにあったシャンプーで洗った髪はドライヤーで乾かすとバリバリに硬くなっただけど気持ちいい。鏡の中の私も少しはましな顔に戻って、笑顔を作ってみた。そうだ。私は元々楽天的な女なんだし、笑っていれば何とかなるさ、たぶん。

部屋に置いてある浴衣を着ると、不安よりも、恐怖から逃れた安心の方が勝ってきて、少しだけ旅行中の気分になった。鏡の中の顔もかなりマシになっている。

さて、電話だ。健多に。でも、なんてこと、携帯の番号を憶えていない。携帯に憶えさせてたから。

それに眠い。ひたすら眠い。ベッドがあると思うと耐えられなく眠い。

私は横になり、すぐに寝入り、そして寝てしまっていながら、自分が複数から呼びかけられていることや、その呼びかけに答えることもうつつとうしくて黙っていると担架に乗せられ救急車に乗せられどこか他の病院に移されていることもはっきりとわかった。

病室で、

また点滴とカテーテルか、嫌だなあ

と思ったのが最後、私はまた眠りの中に落ちていった。

警察病院で目がさめて二日目、地元の警察らしき女性が病室に入ってきた。私は重湯をすすっているところだった。

「始めまして」と女性は笑みを作った。

「あの、警察の方ですか？」

「そうです。ご安心下さい」

本人が警察だと言うからといって安心出来るわけじゃない。所属がどうかこうとか、よくわからない長ったらしいことを言うこの女性が本物なのか、どうなのか、私はボオツとした目で観察を続けた。三十五くらい。ショートカットは染めてない。灰色のスーツが型どおりで、融通の利かないタイプ、かな。

「何か憶えておられること、ありますか？」

私はあの看護師の言葉を思い出した。

あなたは何も知らんし、憶えてない。これから誰に聞かれても、そうお答え下さい。それ以外にあなたが生き残る手段は、多分、無かです

私は首を傾げ、

「気がついたらホテルの部屋だったんです」

「気がついたら？ ですか」

「はい」

「どんなふうに気がつかれたんですか」

警察としては出来るだけ正確な情報を得たいんだろうが、こっちはそれがうつつとしい。職業柄、向こうの聞きたいことはわかるけど、こっちは答えたくないんだし、こっいつときは聞き返すに限る。「どんなふうに、とは？」

向こうの持っていない情報を聞き返せば、もう聞いては来られなくなる。こっいつのがライターが悪知恵というものかもしれない。

「だれに連れてこられた、とか」

「あまりよく憶えていないんです。なんだか頭の中がぼうつとして」

「じゃあ、もう気づいたら」

「ホテルでした」

「その前の記憶は、どうなんですか？」

「その前の記憶ですか……」

私は畑野の部屋にいて、トイレで出血して倒れたのだった。けれどそれも本当の記憶かどうかからない。あの看護師が言ったように憶えていないことにした方がいい。

「大阪にいたんです。マンションの前にいたのは憶えているんですけど……」

「それでいきなり、目がさめたらホテルですか？」

「そうです」

「目がさめて、まずシャワーを浴びた」

「はい」

「落ちて着いてましたね。慌てたりしなかったの？」

私はあくびをかみ殺すマネをした。どこまで嘘をつくか、まだ心の準備が出来てない。

「あ、お疲れですね。どうぞ、お休み下さい」

女性は部屋を出て行った。

眠いどころじゃない。私の心臓はバクバクと高鳴っていた。今もしウソ発見器にかけられたら一発ではれるだろう。

次の日も同じ女性がやってきた。それで、一晩考えた作り話、ホテルで目がさめてシャワーを浴びてそれでやっと自分の置かれた立場がわかるほどに意識が回復してそれでそのまま寝てしまった、とそんなデタラメを話した。

女性刑事はフンフンと聞きながら、それでも私の何かを疑っているのか、深くはうなづいてくれない。ましてや私に何が起こったのかまったく話さない。電話で通報があり、ホテルで昏睡しているのが発見された、とそれだけ。

「私、誘拐されたんですか？」と聞いても、

「いま、それを調べてるんです」と言うだけ。

警察病院の病室とはいつても、新聞や雑誌は自由に見ることが出来たし、テレビも見放題で、もしあれがなにかの『事件』だったのなら何かしらの報道があるはずなのに、何も無い。でも、だったら早く無罪放免で大阪に帰してくれたらいいのに、それも無い。これ



じや健多に連絡出来ても何の説明も出来ないし、いったいいつまで拘束されるのか。

多分、警察は、編集長のことや畑野のこともあって、私の身边を探っているのだろう。でも、何が起こったのか、聞かれたら答えるけど、寄生虫がどうのこうのの話は出来ないし、したって狂ってると思われるだけだろう。何をどう説明したらいいのかわからない。説明したって、どうせ前みたいにせせら笑われて終わりだろう。

それ以後の女性刑事との話は世間話にしかならなかった。

とにかく、私がホテルにいるという電話をしてきた男の特定を急いでいる。誘拐事件として捜査は進める。けど、プライバシーの問題もあるから、出来るだけ私には負担がかからないようにする、と、そういうことだった。

私は目がさめて五日目に退院して、警察が貸してくれた十萬円で服を買って大阪に戻った。

新大阪のビルも、難波の雑踏も、全てが懐かしくて、私はマンションに帰る前の数時間、大阪の空気をひとり嗅いで歩いた。

約束の時間に戻ったマンションでは、健多が取材で行った北海道の土産の魚をさばいて待っていてくれた。

ホッケの造りはこれがあの飲み屋で出てくる開きの魚と同じかと思っくらい滑らかで甘かったし、ハツカクとかいう魚の造りも歯ごたえがあつて美味しいし、毛ガニの刺身はとろけるようで、透き通るようなイカそうめんが霞むくらいだった。

そしてビール、日本酒、焼酎の湯割り……最高だった。

それよりなにより、健多がいろいろとつまらないことを聞いてこないのがよかった。電話の感じでは、警察から、私の失踪の概要だけは聞いているようだったけど、何も聞かなかつたし、私も喋るつもりはなかった。

けれど、一つの布団に入って、私は抱き合う以上のことを拒んだ。大丈夫だとは思つたけど、心理的な部分でどうしても駄目なのだった。

「もう少し待って」としか言えなかった。

健多は強く抱きしめるだけで我慢してくれた。

「仕事はどうなの？」と私は聞いた。

「また京都。大秦」

「また？」

「なんか、あの辺りから逃れられへんみたいやな」

「こないだのメール、変やったわ」

「ああ、赤鬼、青鬼、マダラ神ね」

「あれ、何？」

「大秦の祭なんやけどな、何なのかよくわかってへんねん。赤鬼、

青鬼はともかく、マダラ神はこの神さんともわかつたらんらしい。

秦河勝自身だって話もある」

「ふうん、変わった名前やな、マダラ神さん、ねえ」

マダラ神、マダラ神、そう唱えているとすぐに眠りに落ちていった。

翌日は引越しの荷物を片づけたりして半日を過ごした。そして、夕方になって思い切って『ナイトライブ』へと出かけた。編集長のお悔やみも言わなきゃならないし、何より私のデータの件を確認しないといけない。

いつもと全く変わらないオフィスの編集長の席には編集長の奥さん、つまり株式会社『オフィス・ゼロ』の専務の奈美ちゃんが座っていた。四年前関係があった時には薄々感づかれていて、かなり気まずい想いをしたことがある。その想いがよみがえってきた。

「このたびは……」と私は頭を下げた。

「本当に、主人のことではご心配をおかけしました」

「なんだかヒンヤリとした空気が流れた。」

「四時五十分」と奥さんは言った。「ちょっと早いけど、飲みに行

かへん？ 私、ちょっと疲れてるのよね」

「いいんですか？」

「いいの、いいの。ちょっと聞いて欲しいこともあるし」

「お子さんは？」

「いま、京都の実家に預かってもらってるから」

そこにいた何人かに後かたづけを頼んで、奥さん、というか、奈美ちゃんと私はオフィスを出た。なんだかデータの件を聞く機会を奪われた。もしかしたら健多や涼子ちゃんから聞いていたのかも知れないし。でも、上の人は あれは偶然とは思えない。そのことだけでもどうにかして確認しないと。

でも、『おごじょ』に入るまで私たちは口をきかなかった。

編集長と来た時と同じ席に座り、編集長と同じようにビールとキバナゴの刺身とさつま揚げを注文する奈美ちゃんを見て、私は罪悪感に押しつぶされそうになった。

ビールが来て、私たちは無言で乾杯した。そして奈美ちゃんは吐き捨てるように言った。

「本当に、妻としてどういう態度を取れっちゅうの？ 風俗で腹上死って。最低やんか」

風俗 私は何も言えなかった。

多分、私で駄目だったから、どこかで試したかったのだろう。

「聞いてた？」

「うっん、今初めて聞いた……」

「どうする？ 赤城ちゃん、カレが風俗で腹上死したら？」

「殺す」

「と思うやろ、ところがもう死んで、死体になってそこにおるんよ

……」

私は発言の無思慮に気づいて、

「ごめんなさい、つい」

「ええんよ。でも三人いるあの人の結婚相手の中で、私がいちばん貧乏くじ引いたと思わへん？」

「貧乏くじ？」

「だって、子供はまだ小さいし、こんな恥ずかしい目に遭うし」

「会社はどうするの？」と、私は話題を変えた。

「私が社長になるわよ。こうなったら意地やんか。赤城ちゃんにもこれからもっともつと協力してもらおうからね……」

「その話なんやけど」と私はさえぎって「私、風俗関係の仕事はもう止めよう思ってるのよ……」

「なんで！」と奈美ちゃんはマジな声をあげた。そして店員に飲み干したビールのジョッキを指さしてお代わりを求め、「そんな困るやんか」と私に向き直った。

「赤城ちゃん、ホントに頼りにしてるのよ、あなたのこと。だって、もう、『美素人』からはあなたをご指名で次の記事の企画も来てんのよ」

『美素人』！ 私はゾツとして、

「それだけは嫌！ 『美素人』のことがあるから、私、風俗関係はダメなのよ」

「そんな……」と奈美ちゃんはがっくりと肩を落とし、「じゃあ、断れっていうの？」

「私じゃなくても……」

「あなたの記事を気に入ってるのよ、あの社長が」「社長が？」

「そうよ、何か、ものすごく大量に女の子を引き抜かれたらしくて、存続の危機とか言ってるのよ。前に赤城ちゃんが書いたような、新人研修に力を入れてる風俗って感じの記事をまた書いて欲しいんだって。求人の方にね。四ページで、グロスで百万出すって言ってるのよ。赤城ちゃんにも、相応のお礼はするから。私、この仕事、絶対欲しいのよ、お願い」

奈美ちゃんは手を合わせて私を拝んだ。

「『美素人』、女の子を引き抜かれたの？」

「らしいのね。常勤の子、全部らしいの」「引き抜かれたんじゃないか、あの男たちに拘束されたんじゃないのか。」

「あそこのナンバーワンのレイナって子が独立したんだって。その

時にごつそりと女の子を引き連れて出たんだって」

レイナが独立？

「じゃあもう、レイナもないのね、『美素人』に」

「いないでしょ、そりゃ。独立したんだから」

私は何かホツとしてビールのジョッキを干し、お代わりを注文して、

「だったら話は違うわ。受ける。その話」

「ありがとう、赤城ちゃん」

奈美ちゃんは自分のジョッキを私のジョッキにカチリと合わせ、

「これで、主人とホテルに行った件は許してあげる」

口から心臓が飛びでそうになった。

「あの日、主人とここに来て、それでホテルに行ったやろ」

「……」

「私、主人が死んだのに納得がいかへんで、会社を出てからのあの人の足取りを探ったのね。それでも昔は新聞記者だったから」

いきなりのことに、ごまかしようがない。黙るしかない。

「でも、あの日はデキなかった。多分、あなたの事情で……違う？」

何も返事出来ない。

「考えようによってはよかったかもね。赤城ちゃんの上で死なれてたら、私、赤城ちゃんを生かしてはおけへんもん。それに、どうせ、主人の方からしつこく誘ったんやろ」

私は編集長に変な要求をしたことを思い出して、編集長にも、奈美ちゃんにも申し訳なくて涙をこぼした。奈美ちゃんはテーブルに置いてあるティッシュを取ってくれながら、

「……ごめん、泣かす気はなかったの。ただ、言わずにはいられないっていうか、わかるでしょ？ 主人はもう死んだのよ。何を言っても聞いて貰えないし、本当は浮気しても何してもいいから、生きててほしかったんよ。やのに、あの人はもう帰ってこないのよね。浮気してもいいし、愛人作ってもいいし、風俗に行ってもいいのよ、生きててくれれば。こんなことに今頃になって気づくんよ……」

奈美ちゃんも泣いていた。ティッシュを引き抜いて、化粧を崩さない気遣いからか、こぼれる寸前に涙を拭きながら、

「ああ、なんか、主人が死んで、初めてやわ、泣いたの。私、泣く間もなかったんよ、忙しゅうて」

結局、データの件を言い出すことは出来ず、終電まで、店を代えて奈美ちゃんと編集長の想い出を話しながら飲むことになった。わかっていながら互いに触れないセックスの部分がかくかく、でもいつかはそんな話も出来るようになるのかも知れないと思いながら、私たちは笑い合っけて別れた。(つづく)

#### 4 ヨモツヘガイ

翌日からずっと引越しの片づけに追われる三日が過ぎて、まだそれでも少しも片づかないのに、約束の『美素人』の取材に行くことになった。カメラは前と同じ涼子ちゃん。取材に行く前に『美素人』の最寄りの四天王寺の喫茶店で落ち合って昼食を取った。涼子ちゃんは私が何かの事件に巻き込まれたらしいことは知っていて、だから逆に、私が二週間近く大阪にいなかったことにも触れなかった。

「レイナちゃんって、『美素人』、辞めたらいいですね」

「コーヒーを飲みながら涼子ちゃんは言った。」

「らしいね。独立したんでしょ」

「女の子と一緒に常連さんも引き連れて行ったんだと思いますよ、

『美素人』も大変ですね、これから。あの女社長って、女の子の扱い強引そうだし」

「レイナが異常なのよ。あんなのに頼ってること自体、普通やあれへん」

「レイナって、赤城さん、呼び捨てですか？」

「別に……」

レイナの話は体のどこかがざわつく。

「それより、編集長のこと、警察が来たの？」

「そうですよ。私怖くって……」

「どんなこと話したん？」

「どんなことって……ごめんなさい、赤城さん。私、怖かったし、全部喋ったんです」

「全部？」

「知ってること、全部。ごめん、なさい」

涼子ちゃんは申し訳なさそうに下を向いた。芝居や腹芸の出来るような子じゃない。仕方ない。

「来たのは刑事やったの？」

「よくわからないんですけど、何か、話し方が、異様に滑らかで、役者みたいな爽やかな感じで……」

私は聞いていられなくなって、

「三十五くらい、細い縁なしメガネの、笑うと歯並びが良くて異様に爽やかな感じの男ね。結構イケメンの」

「そうそう、そうです！ イケメン、イケメン。やっぱり赤城さんの所にも行ったんですね」

「ん……」と私は曖昧に答え、「そろそろ、行こか」と席を立とうとした、その時、

「赤城さん、お久しぶり」と、前に事情聴取で会っていた刑事が話しかけてきた。大前だったか、大谷だったかな、名前。その側にはもう一人、不気味な印象の、長髪でやせ形、背の高い男を連れていた。

私は何か嫌いな予感がした。

この予感は、私が私になる前から続いているような、とにかく、嫌いなものだった。

「お久しぶり」と刑事は言った。もう一人の男は「はじめまして」とだけ言った。

「お連れの方は、カメラマンの石田涼子さんですね？」

「刑事さん、カメラ『マン』、じゃないんですが」と私は言った。

涼子ちゃんは明らかに怖がっていて口もきけない。

「いや失礼、最近色々あって難しいですね。そのうち婦警って言い方もダメになるかもしれませんよね。ところで……」と目つきが鋭くなった。「今、よろしいですか、それほどお時間はとらせませんが」

「あの、これから取材なんです、二人で」

「あ、そりゃ失礼。じゃ、一点だけ確認したいんですが、石田さん……」

「ハイッ」と、涼子ちゃんはいきなり話しかけられて、叱られた小学生のように頭を挙げた。



「あなた、三月の十七日の午後四時十八分に携帯電話かけてますよね、それで一分四十三秒、通話してますよね」

畑野の部屋で受けた携帯だ。まずい。私はあの時は記憶が飛んでることになってる。

涼子ちゃんは怯えながら、

「はい、だと思えます」

「誰とお話したんですか？」

涼子ちゃんは私を見た。

「赤城さんとお話したんですか？」

「はい」と涼子ちゃんは私を見ながら言った。「刑事さんが来られたことを……」

「刑事が来た？」

私は頭の中が真っ白になるのを必死でこらえながら、どう話のつじつまを合わせたらいいか考えた。

「はい」と涼子ちゃんは力無く答えた。

「その刑事はどこ所属といました？」

「鶴橋署だって」

「それで、あなたに何を聞きました？」

「あの……」と私は刑事をさえぎって「もう取材の時間なんですよ」「いえ、本当に時間は取らせません、ほんの少しですから」

万事休す。

「で、石田さん、その鶴橋署の刑事はどんなことを聞いたんですか？」

「『ナイトライブ』の編集長が死んだってことで、赤城さんとの関係で知ってることを教えて欲しいって」

「はあ……そんなこと聞いたんですか……ところで、この中にその人はいますか？」

刑事は鞆から六枚の写真を取り出してテーブルに並べた。

涼子ちゃんはその中の、私のよく知っている人物を指さして、

「この人」

「赤城さんは、この人は？」

「知りません」

「エッ」と涼子ちゃんは声をあげ「赤城さん所には来なかったんですか？」

さつき涼子ちゃんに話したことを私は心底、後悔した。

「赤城さんの所に？」

刑事は怪訝そうな目を私に向けた。

「来てません」と私は落ち着いて否定した。

これはウソじゃない。

「赤城さんは、この人は？」

「知りません」

これは真つ赤なウソで、涼子ちゃんが刑事と私の顔を交互に見つづ落ちつきなくうるたえているのがうつつとつしい。

「この人は、刑事じゃないんですか？」と涼子ちゃんは震える声で言った。

「違います。それに鶴橋署なんてもの、この世にありません」

「じゃあ……」

「こんど、この六人の誰かを見かけたら、必ず私たちに通報してくださいね、必ず、ですよ。どうぞ、この写真は赤城さんがお持ち下さい」

刑事は写真をまとめ、その上に電話番号を書いた紙を二枚乗せ、

「赤城さんとはまたゆっくりお話しをしないとイケませんね。また後で連絡します」

そう言つて私に渡して一礼して出て行った。私は連絡先の紙を一枚涼子ちゃんに渡し、伝票を持って立った。

刑事たちが店の外に出るのを確認して私も立った。

伝票を持って先に歩く私の後ろから、「赤城さん、赤城さん」と涼子ちゃんは申し訳なさそうに「私、何かまずいこと言いましたか？ あの人、刑事じゃなかったんですね、どうしましょう、私、怖かったんで……」

私は涼子ちゃんに向き直り、

「涼子ちゃん、正直がいちばんの策よ。嘘をついちゃだめよ。泥沼になるから」

「どついう意味……」

「涼子ちゃんは正しいってこと」

領収書を受け取って私たちは喫茶店を出た。『美素人』までの道のりはひどく長く長く感じられた。

前に来た時と同じ『美素人』のドアが開くと、何とも言えない異臭が鼻を刺した。前ときは柑橘系の素敵な香りがしていたのに。

涼子ちゃんも同じことを感じたのだろう、私たちは目で異状を確かめ合った。社長は私たちの様子に気づいて、

「ちよつとバタバタしてて、片づいてないのよ。人手もないし。恩知らずのせいでね。とんでもない恩知らずがこの世にはいるのよね。お世話になつた人に後足で砂かけて出て行くようなマネ、よくできるわよね。世も末よねえ。なんでこんなこと出来るんかねえ、聞いてるでしょ？」

ずっと奥の部屋からは何語かわからない言葉でザワザワと話す女たちの声が聞こえてきた。意味は解らないながらも、決して上品な女たちでないだろうことはわかる。

私は靴を履き替えながら、スリッパに黄色いシミが付いているのに気が付いた。そのシミがレイナの不在を思わせて、私は少し安心して言った。

「レイナさん、独立なされたんですよね」

「独立？ 冗談じゃないわよ。あんなブーツとした子にこの仕事の経営なんて出来るわけじゃない」

社長のピンクのワンピースがものすごく下品な印象だ。前はそうでもなかったのに。それに、前には強烈に漂っていた、何というか人を引きつけるオーラみたいなものが消え失せていた。ただケンケンしているだけというか。。

「独立じゃないんですか？」

「違うわよ、引き抜きよ、引き抜き。引き抜きというか、これまで預かってくれて言って連れてきて、やっと軌道に乗ったらかえせつて、常勤の八人と一緒に」

「八人？　じゃあ、九人全員ですか？」

私は富士山で聞いた話を思い出して、わざと聞き返した。

「そう、ウチみたいなのところって女の子の確保が難しいのよ、それがわかってやったんだから、恩知らずもいいところよ、ああ、思い出すだけで悔しい」

「いったい、誰が」

「知らないわよ。この店を出すときに、突然、ホストみたいな男がやってきて、女の子雇ってくれて、レイナとか九人。住む場所がないからって、マンションまで借り上げたのよ、私。それで今度は手切れ金みたいな二百万円、置いていっただけ。これでよろしくつて。とりつく島もない。それでも九人とも音信不通よ……まったく、人間もこんなんじゃない、どこに行っただってやってけないわよ、絶対。辞め際って大事なのに、こんなんじゃない、もうどうしようもないわよ。人間の、道徳とか、倫理とか、そういうのあるでしょ？　こういう仕事だから、逆に、人間の道徳や倫理を無くしちゃだめなのよ」

道徳　倫理　その言葉に私の心のどこかがざらついた。道徳や倫理を無くす。

「何が正しくて、何が間違ってるか、こんな仕事だから、そのところ、きちんとわきまえてないとすぐに身を持ち崩して破滅よ、すぐ」

「はあ」

「あなた方だつてそうでしょ？　言われるがままのヨイシヨ記事ばかり書いてると、すぐにライターとして駄目になってまうんちゃうの？　今回私が求めているのも、単なるヨイシヨ記事じゃないのよね、客観的に、うちのシステムが優れてるってことを、うちが女の子を大事にしてるってことを、本当に、客観的に、書いて欲しいの

よね。じゃ、ちょっと待ってて」

前の時と同じ、キッチンと一緒にになった応接室に通された。異臭の元はここらしかつた。田舎のトイレのような臭いと前にはなかった床のシミがここでやられてることの汚らしい証拠だった。涼子ちゃん、私の脇腹に、肘で『これはまずい』とでも言うような合図を送ってきた。

「これは……」と私は小声で言った。「駄目ね、もう」

「そう、思います」と涼子ちゃんも言った。

社長は自分で持ってきたコーヒーを私たちに差し出して、

「さあ、遠慮なく」

そう言われてもこの臭いの中で口を付ける気にもならず、いきなり本題に入った。

「研修のシステムについては、前と変わってはいませんか？　□

ールプレイングゲームを繰り返すとか、そういう……」

社長の顔が曇った。

「そう、そうね。その辺を、前の記事では書けなかったところまで膨らませて、書いてもらったらいいと思うの」

「女の子へのインタビューと、写真なんです」

「向こうに三人、用意しています。今回はウチの子の写真で、目だけ隠して出して貰おうかと思ってるの」

「じゃあ、もう早速ですが、女の子にインタビューさせていただけますか？」

「インタビュ―ねえ……」と社長は言いよどんだ。「ここは、あなた、相談なんだけど、女の子のインタビュー作って貰えないかしら」

「作る？」

「お宅の編集長に聞いたんだけど、いえ、今の編集長よ、もちろん。あ、そうだ、ご愁傷様でした。大変だったわね」

「いえ、私はちょっと大阪を離れていたものですから」

「ああそう、でね、インタビューがとれなかったら、店の了解を得て作ってくれるって話だったんだけど」

「それはちよつと、私には……イチから作るつてのは無理があると思っんですけど」

「そういう無理を聞いて貰えるだけの額をお宅には提示したつもりだったんだけど」

社長は高飛車な口調で一気に言った。

「わかりました」と私は奈美ちゃんの立場を思いやって言った。「でも、全くの創作っていうのは、やっぱり迫力に欠けますから、少しでもいいからインタビュ―させてください」

社長は少し考えこみ、

「あの、赤城さんは、ロシア語できるかしら？」

と唐突に言った。私は全てを悟って、

「ロシア人しか、いないんですね」

少し間があつて、社長はいきなり、

「日本人はア」と叫んだ。顔は真っ赤になり、頬は小刻みに震えていた。表情は貼りつけたように硬く、目は輝いているけれど虚ろで、何かの彫刻のようだった。

「もうだめよつ！ 恩とか、義理とか、人情とか、そういう日本人の良さつてあるでしょう！ わかるつ？」

「はい！」と私たちは同時に返事をした。涼子ちゃんは泣きそうな声だった。なんで今日はこんな目に遭いまくるのか、理不尽さに耐えている声だった。

「もおおお、どいつもこいつも、金、金、金！ レイナがいなくなつたら、みんな自宅待機の連中もドンドン登録抹消していくのよ！

恩とか義理とか人情とか、恥とか外聞とか、道徳とか倫理とか、そういうのつていつから無くなったの？ だいたいねえ、人前でオシッコしたりウンコしたりする仕事なんて、最低の、下の下なのよ、男のいちばん嫌らしい部分を刺激してお金を取るわけでしょ、売春みたいに体を提供するわけじゃなし、これは最悪の恥さらしよ、わかる？」

「はあ」

「そういう仕事を外国人にやらせて、それで自分たちは平気なの？  
これって差別じゃないの？ え？ そう思わない？」  
「差別ですか？」

私は噴き出しそうになるのを必死でこらえた。

結局、ナターシャとニキータとカチユーシャの三人のインタビュ  
ーは名前しか聞けず、写真はとれたものの使えるかどうかは微妙だ  
った。

「スラブ系って、美少女と太ったオバサンしかいないですよね」  
と、取材が終わっての帰路、涼子ちゃんは言った。「その中間って、  
見ないですよ、あんまり」

「そうね。男も、美少年がいきなりエリツインになったり」

「でも、今日の三人は、だいたい中間でしたよね」

「かなり太ったオバサンに近いお姉さんたち、って感じかな」

「言っちゃ悪いけど」と涼子ちゃんは言った。「あの臭い、食べ物  
のせいかな」

「さあ」と私は曖昧に答えた。

レイナは消えた。八人と一緒に。そう考えると、ふと思いつく  
ことがあって、

「ごめん、涼子ちゃん、私、聞き漏らしたことがあるから、『美素  
人』にまた戻るわ」

そういつて涼子ちゃんと別れ、『美素人』に戻った。

社長が出てきた『美素人』の玄関先で、私は、

「ちよつと見て欲しいんですけど」と、刑事から受け取った六枚の  
写真を広げた。

「こいつよっ！」

私は何も言わないのに、社長は私のよく知る男を選んだ。

「これなに、これ、何の写真なの？」

「ここだけの話ですよ。絶対に他では話さないくださいね。この  
人たち、凄腕の引き抜きなんですよ。要注意ってことで、この写真、  
あちこちにまわってるんですけど、お宅にはまわって来てなかった

みたいですね」

「来てなかったわよ、そんなの！」と、またヒステリーが起こりそうなのを放って、私は、

「それでは。また記事が出来たら送ります」とドアを閉めた。

社長が追いかけてくるかと思っただけ、それはなかった。私はエレベーターを一人で降りつつ、『美素人』の女の子たちの運命を思った。

あなた、生きたまま解剖されて尿を取るだけの体にされたくはなかでしよう？

あの看護師の言葉がよみがえった。

いつたい何なの、それ。

一階に降り、エレベーターの戸が開くと、郵便受けの前に刑事とあの不気味な男が立っていた。

「何を聞きに戻られたんですか？」

いきなりのことに絶句するしかなかった。それに、ここでウソについても刑事たちが『美素人』に行けばすぐにばれる。ああ、なんて軽率なことばかりするんだろう、この私は。

「あの」と私は攻撃的に言った。「お互いフランクになりましょう。私も正直になるし、あなた方も、聞きたいことをしっかりと話して下さいますか」

「そりゃいい」と刑事は言った。「さっきの喫茶店にでも行きますか？」

「そうですね、人のいるところの方がいいです」

「さすがですね。警戒心は大事ですよ、人がいれば、そうそう連れ去れるものじゃありません。誰かが見てますからね」

私は早足で駅前に向かった。

「石田さんの勘には驚かされました」

刑事は喫茶のテーブルに腰掛けるなり、言った。

「私たちの捜査でも、『美素人』と、あなたの前の部屋の上の女性の死と、やっぱりつながりがあるみたいだとわかってきたんです」



何を今さら。

「もういちど話してくれませんか、石田さんの推理を」  
目を見られて、脇の下を冷たい汗が流れるようだった。何を、どこまで話したらいいのか。

「刑事さん、前に私がそれを言った時、論理的に考えてあり得ないって言いましたよね」

「すみません」と刑事は唇に薄笑いを浮かべながら言った。「本当はそういう否定の仕方をしては駄目なんですけど、あの時はそう本気で思っていましたから、本当にすみません」

「それはいいんですけど、実は、私も、論理的な関係はよくわからないんですよ。関係があつたし、ある、としか」

「この男を知ってますか？」

刑事の出した写真を見て、血の気が一気に引いた。

「これは、なんというか、尋問みたいなものですか？」

「とんでもない」と刑事は言った。赤いネクタイが攻撃的で嫌だった。「プライバシーの問題がありますから、答えたくないことは答えないで結構ですよ。あなたは被疑者でも何でもありません。純然たる被害者です」

もうほとんど警察は知っているのだろう。少しヤケになって、

「その人、生きてる人ですか？」

刑事はフツと笑った。

「たぶん」

「生きてるんですか？」

私は心のモヤモヤが少し晴れた気になって、もう一度、

「生きてるんですか？」

「生きてます、たぶん」

私はホツとして頭に血の気が戻り、注文していたミックスマジューズに口を付けた。けれど、よく考えてみれば、畑野が生きていてあの夜のことを喋ったのなら私のウソはバレバレじゃないか。

「で、この人、どうなっただんですか？」

「知りたいですか？」

「ええ」

「もう、お互い、腹のさぐり合いはやめて、腹を割りましょうよ。あなたが連中に何を吹き込まれたかはだいたいわかってます。あなたが警察を信用出来なくなっているのもわかりますよ。でも、ハッキリ言つて、連中は詐欺師の犯罪集団ですよ。まだ逮捕に到る確たる証拠がないだけで」

「連中、とは？」

「もうご存じでしょう」と不気味な方の男が初めて口を開いた。ねちっこい声だった。「あなたが山梨で会った男たちですよ」

私は黙つて刑事の目を見た。

「これを見て下さい」と、刑事は白黒の写真を一枚差し出した。

神社のような建物に『常世の蟲』と書かれた額がかかり、その下に、巫女の衣装で女が一人立っていた。それは今私がつとも恐れる人物だった。白黒がセピアに変わった写真に、私はつい、いつの写真ですか、と聞きそうになった。

「レイナさんですね」と刑事は言った。

私はうなづいた。けれど、私はレイナよりも、額に描かれた文字『常世の蟲』の方が気になった。心のどこかがうずく。思い出さなくて思い出せない、何か、悔しいような切ないような、もどかしい想い。でもそんな想いに浸る間もなく、もう一枚、写真が差し出された。これはかなり最近のものだ。

そこには同じ『常世の蟲』の額の下に何人かの男が写っていた。その中に私のよく知る男がいた。

「あなたを山梨に連れて行ったのも」と刑事はその男の顔を指さした。「この男ですよ、間違いなく」

「そうなんですか……」

心臓がバクバク言っている。いったい、どんな返事したらいいのか。

「ものすごく大がかりな組織です。あなたは救急車で畑野のマンシ

ヨンから運び出されたんですよ。本物そっくりな救急車で」

あの看護師は、国家のプロジェクト、とかそういうことを言っていた。国家なら、救急車を手配するくらい簡単だろう。もちろんあの男の言うことが本当かどうかはわからない。

「畑野のマンションから、私が？」

私はトボケ通すことにした。

「またまた、もうやめましようよ」と刑事は、呆れた、とでも言うように笑った。「私の経験から言えば、そうやって聞き返すときは、大抵、そこに重要な情報が隠れてるんです」

ライターが悪知恵も通じない。私は黙るしかなかった。

「あなたは前の夜から畑野のマンションに行ったんですよ。それで、まあ詳しくは分かりませんが、色々あって、あなたは運び出された……ちやいますかね？」

自分でも呼吸が荒くなっているのがわかった。

「まあ、今日は」と刑事は言った。「ここまでにします。断っておきますが、別にあなたを疑っているワケじゃないんですよ。あなたは純然たる被害者です。ただし……」

「ただし……？ 何ですか？」

「強力にマインドコントロールを受けた、被害者です。薬物で幻覚を見せられた可能性もあります。見た記憶があるからといって、それが事実とは限らないってことにはご留意下さいね」

「薬物で幻覚……」

看護師と同じことを言う。そして私は足下の血の海でのたうつ黄色い黒いマダラの寄生虫を思い出して血の気が引く音さえ聞こえるような感じがした。けれど、看護師は寄生虫なんて嘘だって言った。あれも幻覚なのか。 いったい記憶って。

「いいですか」と刑事は言った。「あなたを守るのは警察だけです。全てを話して下さい。今でなくてもいいですから」

刑事と不気味な男は伝票を取って立った。二人ともコーヒーに口も付けていなかった。

私はミックスジュースをすすり、恐怖の去った安心感と、それでも残る不安に必死で耐えた。

誰を信じたらいいのよ

携帯が鳴った。知らない番号からだ。これは新しい携帯であり人には教えていないからワン切りだろう、と思っただけでいると、留守のメッセージが再生され、その後、

「刑事二人は帰りましたか」と、実に爽やかな声が出た。爽やかすぎる声に私は恐怖を覚え、あわてて切り、喫茶を飛び出して刑事二人を追いかけた。広い歩道の向こうにまだゆっくりと何かを話しながら歩いている、がっしりした短軀とひよる長い長身。

「刑事、さーん」と私は思いきり叫んだ。二人は振り返り、私だとわかると駆けてきた。

「どうしました？」

私は焦って、焦って、両手を振りながら、

「話すから！ 全部話すから！ だから……助けて！」

「どうぞ、一緒に来て下さい」

刑事は『ほれ見ろ』とでも言うように首で私を促した。その仕草が何か横柄な感じで、私の焦りを一気に消した。私は冷静になって周囲を見回した。そしてもう一度刑事を見た。

信じていいのだろうか、この人たちを

あの看護師の言葉がよみがえった。

あなたは何も知らんし、憶えてない。これから誰に聞かれても、そうお答え下さい。それ以外にあなたが生き残る手段は、多分、無かです

「どうしたんですか？」

私が返事出来ないでいると、さっきの喫茶店の店員が走ってきた。

「これ、忘れ物です」

私の携帯だった。鳴っていた。受けるとあの声だった。

私は「失礼」と言っただけで、刑事に話を聞かれないように少し離れた。「大変なことがウチでも起きましてね、なかなか連絡とれなかった

んです。巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で壮大で大きな意志にもホコロビが生じ始めたのかも知れませんか」

「はあ」

「はあ」

「いいですか、寄生虫は体の中で産卵します。つまり、あなたの体にはまだ卵が……」

頭が真っ白になった。まだ終わってなかったのだ、あの悪夢は

。「イヤよ！」

私は刑事に聞こえるのもかまわず大声をあげた。

「静かに！ 体力が回復したら処置をするはずだったんです。それをウチのバカの一人が誤解してあなたを連れ出したんです」

。「どうしたらいいの？」

刑事を見ると、明らかに私の異変に気づいて身構えている。

「まず刑事をまいて下さい。それで一人になったらまた連絡します。いいですか、この件はバカな刑事が追いかけてどうこうなるようなちやちな事件じゃありません。大きく言えば人類の命運がかかっているんです。私たちは巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないよ。うな、巨大で壮大で大きな意志で動いてるんです。それにあなたの命だっかってますよ。前の部屋の上の女性の件、憶えてるでしょ？ それではまた後で」

切れた。

。「どうしました？」

「仕事の件です」と私は言った。「急ぎなんです。すみませんけど、今日はお話し出来なくなりました」

「それは残念ですね」と刑事は言った。「でも、大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「一言だけ」と、不気味な方の男が言った。「連中が希代のカルト集団だということは、心のどこかにとめておいて下さいね。あなた

は戦後最大のカルト宗教事件に巻き込まれているのかもしれないということも」

「カルト宗教？」

「あなたは不老不死を信じますか？」

いきなりに驚き、私は頭を横に激しく振った。けれどレイナの影を振り払うことはできなかった。

「そりゃ結構。不老不死なんて、女神ならともかく、生きている人間にはありえないことです。それだけはしっかりと心にとめておいてください。そうすれば大丈夫です」

刑事たちが立ち去ると、私は地下鉄の駅の方に向かって歩き出した。

もう何が何やらわからない。それにしても本当だろうか 卵

駅のホームで、ふと、さつき見せられた写真にあった文字が頭に浮かんだ。

「……常世の蟲……」と私は口に出して言ってみた。

「何か、吹き込まれたみたいですね」

後ろからの声に私は飛び上がるほど驚いた。

「振り返らないで。あなたは警察に尾行されています。このまま地下鉄に乗って、次で降りて、千日前線の南巽の方に乗り換えて下さい」

「あなたは？」

私は振り返らずに言った。

「あなたの味方です。信じて下さい」

今さら、何を、誰を信じろっていうの。

私は地下鉄に乗り込み、谷町九丁目で降り、千日前線のホームで先に来た、マンションのある難波方面とは反対方向の南巽行きの車両に乗りこんだ。誰も信じられないけど、ここで面倒を起こしてもしょうがない。今はとりあえず「卵」とやらが気持ち悪い。とにかく「卵」についての情報がほしい。

地下鉄のドアが閉まると、ホームでは男が一人振り返り、明らか

に『しまった！』とでもいうような顔で私を見た。  
やっぱり尾行られていた。

「上出来です」とさっきの声があった。声よりも若い印象の、サラリーマン風の男だった。ダークのジャケットが似合う、長身のスポーツマンのような体だ。

「次の鶴橋で降りますよ」

鶴橋 懐かしい ついこの間まで住んでいた街。

「鶴橋でどこに行くの？ 私はどこだっていいわよ、焼き肉でも食べに行く？」

私は少々ヤケになって言った。

「いいですね、そうしましょう」

「本気？」

「実はそのためにここで降りたんですよ」

そういつて男は焼肉店の並ぶ方向の階段を上がり、地上に出ると、まっすぐ私を『大將軍』へと連れて行った。美味しいと評判の、だけれどもすごく高い店で、私は入ったことはない。

「個室を予約してます」

二階の六畳ほどの部屋には焼き肉のロースターのテーブルとカラオケがあつて、男が一人で『夢の中へ』を歌っていた。実に爽やかな声だった。

「お久しぶり」と男はエコーの効いたマイクを通して言った。「先によつてましたよ。ただ、ちよつと前に頭を強打したもんだから、酒は飲めないんで、巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないよな、巨大で壮大で大きな意志に従つてウーロン茶でやってます」

男はカラオケを途中で切り、マイクをモニターの前に戻して、「コースを三人前頼んでます。どうですか、体調は？」

そういつてロースターのテーブルに座った。

「私、『卵』のことだけ、聞きに來たんです」

「『卵』ですか？ あれは冗談です」

「冗談！ 冗談！ 冗談じゃないでしょ！ 私がどんな気持ち

で刑事をまいたと思ってるのよ、冗談じゃないわよっ！」

私は自分でも驚いたほど大きな声をあげた。

「まあ、お座り下さい」

爽やかな声で男は言った。

「『卵』でなくても、巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で壮大で大事な話もありますよ」

目が、本気な光を放っていた。

「私はもう、あなた達から逃げられないの？」

「人聞きの悪いことを言わないでくださいよ」

仲居さんがビール二杯と大皿に載った肉を運んできた。さっきの私をここまで連れてきた男はその肉からミノとテツチャンを選んで焼き板の上にのせた。

「まずはホルモンから焼きましょう」

「あの」と私は口を挟んだ。「焼き肉食べてる場合じゃないと思うんだけど」

「そうですね」と爽やかな声があった。「まずはビールでしょう。」

まあ、お座り下さいよ。別にあなたをさらっていこうってワケじゃない」

私が仕方なく椅子に座ると、爽やかな声で、

「それでは巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で壮大で大きな意志に感謝しつつ再開を祝して」と男が乾杯を促した。

私は面倒だと思いつつもまた仕方なくグラスを合わせた。

「ところで、刑事たちはどうでした？ 鋭いところを突っ込んできましたか？」

と爽やかな声があった。

「あなた方には関係ないです」

「そうですね？ そのバッグの中には私たちの写真が入ってるんじゃないありませんか？」

私は軽く笑いながら、



「あなた達が、そもそも警察につけねらわれるような集団なんですよ。とにかく、私は『卵』のことだけが気になってるの。私、大丈夫なの？ 死ぬようなことって、ないよね」

「死ぬ？」

「そうよ」

「やっぱりあなたも死にたくないですか？」

男は爽やかな声で言って、カカカ、と笑った。私はムカツと来て、「当たり前でしょう！」

「それより、焼けてますよ、テツチャン、ミノ」

私は何となくバカバカしくなって、テツチャンをタレにつけて食べてみた。

甘く香ばしい香りが鼻から体中に広がり、肉汁とタレの甘さとが口いっぱい……

んまい たまらなく旨い。生まれて初めてだ、こんなのに！

焼き肉って美味しいんだ。あれ、これまでに焼き肉って食べたことあつたかな、なかつたかな。

「美味しいですか？」

私はブスツとした顔のままうなづいた。なんとなく癪だったから。「ところで石田さん、ご両親は？」

いきなり聞かれ、またムカツと来た。

「なんでそんなこと聞くんですか？」

「いえね、その歳まで独身ということは、結婚というものに何か疑問でも抱かれてるのかと思ひましてね」

「抱いてますよ。制度としての結婚をする気はありません」

私は母との地獄の日々を思い出して言った。

「まあそう硬くならず」

「なりますよ。それにもう、全部調べたんでしょ？ 私の母親が自

殺してること、父親が行方不明なこと、全部」

「気分を害したのなら謝ります。申し訳ありません」

男は頭を下げた。

「それがあなた方と何の関係があるの」

私は焼けてきたセンマイを食べた。これもまた　　んまい！

「どうですか？」

「すごく美味しいですよ」

「美味しいでしょ、ハラワタ」

爽やかな口調のくせに、なんかすごく嫌な言い方するヤツだな、こいつ。

私の不機嫌を察したのか、もう一人の男は、

「どうぞ、どんどん食べてくださいね。今日は何も難しい話をしにきたんじゃないんですから」

じゃあ何をしに来たと言うんだ。私は黙ったまましばらく食べ、飲み、少し酔ってきた。

封印していた記憶たち。父親の家出、そして母の自殺、ずっと封印していた記憶が溢れてきて、ものすごく切ない気持ちになった。実は両親のことは、大阪に出てきてから誰にも話したことはない。高知で生まれ、四国のおちこちを放浪して専門学校に入るためにやってきた大阪、ここには私の過去を知る友達は一人もいない。健多にさえ、両親は交通事故で死んだと言っている。隠して、隠してきた両親のこと。でもこの男たちは知っている。私は、なんだかたまらなく両親のことを話したくなった。

「あの」と私は、八十年代のニューミュージックか何かの話題で盛り上がっている二人に割り込んだ。「私の両親のこと、どのくらい知ってるんですか？」

「お父さんは行方不明のままですね。それからお母さんはお家で…」

「そうじゃなくて、父がなんで家出したのかとか、どこで住んだとか、そういうことは知らないんですか？」

二人は顔を見あって、

「石田さん自身はどこまで知っておられるんです？」

と、私をここに連れてきた男が言った。

「変な宗教団体に引っかけたって、田畑を売って……」

「なんという宗教かは？」

「知りません。誰も教えてくれないし」

「知りたいですか？」

「もちろん」

「知ったことを後悔しませんよね？」

「しませんよ。別に、そんなところに今さら関わるうとも思わないし」

「じゃあ、こちらから質問しますよ。石田さん、今日、刑事から写真を見せられましたね」

「さあ」と私はとぼけようとして、その瞬間、記憶の奥底の様々な記憶がつながり、つながって、巨大な網になった。

そしてその網は、私の封印した記憶から、

『常世の蟲』

をすくいあげた。

『常世の蟲』

憶えがある。

父と祖父母の言い争いの中で常に出ていたその名前。

爽やかな声の男は鞆から一枚の写真を出して私に回した。そしてその写真を見た瞬間、私の血は凍りつき沸騰しつつ頭蓋骨の中を駆けめぐって脳細胞をグチャグチャに破壊した。

写真でしか知らない若い頃の父。

今と変わらないレイナ。

『常世の蟲』の額の下に並んで座る二人。

私はその写真を持つ手を額に押し当てて泣いた。そして写真を膝の上に置いて眺めながら、そこにあったティッシュを全部使うかと思っくらい、使いまくって、涙を拭き、鼻をかみ、泣きに泣いた。

そうだ、私はレイナに会ったことがある。あれは遠い遠い記憶の彼方、レイナは私を優しく抱き、子守歌を歌っていた。  
「大丈夫ですか？」

男の声を無視して私はレイナを思い出そうとした。

そしてわかった。レイナは私をさがしている。なぜだかはわからないけど、とにかく。

数分が経って、私はようやく、

「大丈夫です」

と返すことが出来た。

「つい最近まで」と爽やかな声の男は言った。「レイナ……」

私は男を遮って、

「あなたたちは、誰なの？ 何なの？」

「あなたと同じですよ。親が『常世の蟲』に関わった子供です」

「どういうこと？」

「『常世の蟲』の二世ですよ」

「意味がよく解らないんですけど」

「親を捜してるんです。どこかで生きてるはずだって」

親が生きている？

「どうしました？ 美味しい物を食べてるのに、顔色悪いですよ」

「あなたたちは、何者？」

「言ったでしょ、『常世の蟲』の二世、あなたと同じですよ」

「だったら、レイナのこと、知ってるんでしょう？ あれがどういうものなのか。父がいなくなったのもレイナと関係したからじゃないんですか」

「今となつては」と私をここに連れてきた男が言った。「確認しようがありません。『常世の蟲』に関わった人間全てが消えたんです。最初は集団自殺かと疑われて、でも一人も行方が知れないので」

「私はね」と爽やかな声で男が言った。「私の父親はまだどこかで生きてると思えてしかたないんですよ。だって、レイナがああやって生きてるわけでしょう。若いままの父親がね、どこかで……」

チチと鉄網の焦げる音がした。

「あなたたちのこと、警察はカルト宗教の……」

「まあそうでしょうね。私たちのような存在は胡散臭さのカタマリ

でしょうからね。でも、なんと思われようと、そのうち警察が我々に感謝する日も来るでしょうよ。警察ごときがどうにかなるようなところに我々はいないんです。もつと巨大で壮大で並の人間は絶対には動いてるんですから。それに、警察ごときにはレイナを確保することは出来ません。絶対に」

時計を見るともう九時を過ぎていた。

「私、帰ります。かめへんですよね」

「どうぞ、どうぞ」と男は言い、「ただ」と付け加えた。

「今回のこのこと、警察には黙っておいた方が無難ですよ。警察も、もちろん、あなたのお父さんが『常世の蟲』に絡んでいたことを知ってますから。警察に言ったらあなたにとって面倒なことになりますよ」

「前の部屋の上の住人みたいに、ってこと？」

「それはどうでしょう」

「それとも、あの看護師のように、という意味？」

ハハハ、カカカ、と男は爽やかに笑った。

「アイツは死にました」

「なんですって？」

「冗談です。元気ですよ。アイツは元気がありすぎて困ります。あの時も、アイツにこの……」と男は頭の包帯を指さした。「頭をバツトで殴られましたね。思い切ったことをするもんですよ。あなたをホテルに置いて、それからテレビ局に行っただんですよ。駆け込む前に我々が確保しましたけどね。ま、また今度みんな飲みましよう」

そう言つて「タクシー代です」と一万円を差し出した。

「多いんじゃない？」

「口止め料としては？」

「それは……ひどく安いんじゃない？」

「とにかく、あなたの安全を祈ってますよ。もしレイナが近くに現

れることがあったら、さっきの携帯の着信からかけてください、お願いします」

「あなた、お名前は」

「大野、とだけ言っておきましょう」「つつづく」

## 5 私はいつたい、誰？

大野たちとは店の前で別れ、私はタクシーに乗りこんだ。

酔ったからだけでなく、気分は最悪だった。変な事件に巻き込まれた、その遠因に父がいるということ。これがもう、私にとって最悪だった。

父が私を連れて『常世の蟲』に行ったときのこと記憶の中に蘇ってきた。山の中で、子供たちがいて、学校にも行かないで遊んでいた。レイナがいた。もちろん、レイナという名ではなかった。名前は忘れたけど、とにかく、幼稚園の先生みたいな感じで、みんなの輪の中心にいた。

父の両親が来て私だけ連れ戻された。

いつか解るから、いつか解るから、そのときまで俺を恨め、でもそのときがきたら俺のことを

狂信者お決まりのセリフ。

父のいない地獄の日々。

母と二人、父を待ちながら親戚にお世話になり、別にそこで意地悪されたわけでもないのに母は二人きりになると親戚の悪口を言うようになり、次には表だって言うようになり、でも意地悪の事実はないからいたたまれなくなってそこを飛び出し、また別の親戚のお世話になり、そしてそこでも別に意地悪をされたわけでもないのにまた母はその悪口を言い始めていたたまれなくなって飛び出して……同じことを繰り返し、繰り返し、もう自分以外の人間全てを悪人だと言いつらすようになって、でも本音は、

「私はね、捨てられたのよ。捨てられた女なのよ、死にたいわ、死にたい、死にたい、死にたい、死にたいのに死ねないよお、誰か私を殺してよお」

私は何も言えず、ただ泣くだけだった。

「捨てられたのよ、私もあんたも。捨てられた女なのよ、女は捨て

られたら何の意味もないのよ、悔しい、悔しい、悔しい、この世の全てが悔しいのよ、いつか滅ぼしてやる、この世を滅ぼしてやる…でもその前に、誰か私を愛してよお、愛してよお」

そして母は誰にも愛されることなく自分にとっての「この世」を滅ぼした。実家に戻って首をつつたのだった。

「見ちゃ駄目」と祖母は言った。でも、畳の上に伸びきった脚は隠しようがなかった。

私は泣かなかった。

むしろあんな母から解放された喜びを感じていた。

なんて非道い子供なんだ、と私は十七になったばかりの自分を咎めた。

でも、咎めても、咎めても、自分はこれから自由なんだという、溢れでてくる爽快な感じを留めることはできなかった。そしてそのことをまた、私は自ら咎めていた。

ああ、最悪だ。

なんでこんなこと思い出すんだろう。大阪に来てからはバイトしながら専門学校に行って、すぐに就職して、フリーになって、毎日毎日、あんな暗い過去のこととは振り切って、楽天的に未来だけを見ながら楽しくやってたのに。実際、楽しかったのに。なんでこんなことになったんだ。

うんざりだ、本当に、うんざりだよお。

「あれ、規制ですね」と運転手が言った。確かに私のマンションの前には人だかりが出来て、警察の車も止めてある。

「じゃ、ここでいいです」と言っただけはさっきの一万円を渡し、「おつりはいいですから」

運転手が「困ります」と言うのを振り切ってそのまま降りた。

運転手がどんな顔をしたかも見ないまま。

お金で厄落とした。

さあ、気分を切り替えよう。

少し歩くと、人だかりの向こうに電柱に衝突した車が見えた。



事故？ 縁起でもない。

私は人だかりを避けてマンションへと歩いて行こうとした、その時、横から、

「お帰りですね」と昼間にも会った刑事が話しかけてきた。またまたひどく嫌な気持ちになった。せつかく気持ちを切り替えようとしてたのに。

「事故ですね。自損ですか」と私は私の色々な事件とは関係のない話題をふった。

「いいえ。人身です」

「どなたか怪我……」

「刑事が死にましたよ。夕方、あなたにまかれた刑事が」

私は声も出なかった。刑事をじっと見た。

「どうして……」

「待つてたんですよ、あなたを。マンションの前の電柱の横で。そこに酔っぱらい運転の車が突っ込みました」

「どういうこと？ また人が死んだの？」

「きつと今度も、あなたとは無関係でしょうな！」

刑事は激昂する寸前に見えた。私は何も言えなかった。

「ヤツはこないだ二人目が生まれたばかりで、そりゃ良い父親でしたよ！」

「おい、やめなさいよ」

と刑事を止めたのは、昼間にもいた不気味な男だった。ひよろ長い手が刑事の肩を横からつかんでいた。その手を振り切り、

「いいか、絶対突き止めてやる、お前の正体をな、絶対に」

不気味な男はまた刑事の肩に手をやり、私を見て、

「ちよつと動揺してるんです、仲間が死んだんで」

不気味な男が私と刑事の間に割って入り、刑事を遠ざけながら、  
「気が動転してるんです。何を言ってるか、自分でもわかってないんです。早く、早く、マンションに戻ってください」

不気味な男に促されて、私は一人マンションに入った。

部屋に入って一人になると、あの谷町九丁目のホームでこちらを見た男の顔が浮かんできて、そして今日の色々なデキゴトが悲しくて、大泣きする心の用意を始めた。ところに携帯が鳴った。

大野だった。

「マンシヨンの前、何か事故ですか？」

「あなたたち、私を見張ってるワケね。刑事と同じだ」

「刑事にも見張られてるんですね。それはいいとして、とにかく、あの事故は石田さんに関係のある事故ですか？」

「さあね」

「あるんでしょう？」

「あなた方なら、調べたらすぐにわかるんじゃないの？」

「わかりませんよ。石田さんは私たちを誤解しています。私たちは警察の無線を傍受するような組織じゃないんですよ」

「でも私の携帯を傍受したりはするんですよ」

「なかなか鋭いですね。でも今はよしましようよ。どうなんです？ 張り込んでいた刑事に誰かの運転する車が突っ込んだとか、そういうことじゃないんですか？」

知ってるんじゃない、何もかも。

「すっかりご存知じゃない」

「やっぱりそうですか……それはレイナの仕業ですよ」

「レイナ？」

「言いませんでしたか？ レイナは人を操るって。操られた運転手が刑事を殺つたんですよ」

「バカなこと言わないで」

「バカなことじゃない。とにかく、レイナは絶対にあなたの近くにいます。何かあったら必ず連絡下さい」

切れた。

人を操るだなんて、気持ちの悪いこと言わないでよ。

ふと時計を見ればもう十時近い。

酔ったし、今は寝て、明日は原稿を書かなきゃ。締め切りは明日

の午後だから。

とにかく日常生活を崩さないことだ。  
そこにまた携帯が鳴った。

「申し訳ありません、大阪府警の大谷です。先ほどはごも取り乱してすみませんでした……」

さっきの刑事か。やっと落ち着いて謝ってきたんだ。

「ご苦労様です」

私は出来る限り爽やかに答えた。

「ちょっと教えてほしいんですが、あなたが午後『美素人』に行かれたとき、社長と社員の様子はどうでした？」

「社員と言っても……ロシア人三人しか知らないんですが」

「そうですね、その三人と社長です」

「別に気がついたことは何も……」

「あの、申し訳ありませんが……」

「何ですか？」

「今からそちらにお伺いしてもかまいませんか？ 込み入ったお話しをしないといけないんです」

「今でないと駄目ですか」

「実は、そのために来たんですよ。あの事故は偶然なんです」

人が死んでることだし、しんどいけど断れない。

「疲れてるから、手短かにお願ひしますね」

すぐに玄関のブザーが鳴り、刑事二人の顔を確認して、私はエンランスのロックを解除した。

「先ほどは本当に申し訳ありませんでしたっ！」

大谷刑事は部屋に入るなり畳に土下座して言った。

「あまりのことに取り乱したんです。あなたのマンションに来たらあの事故で、それで……」

私にも気持ちわかるから、

「どうぞ、頭あげて下さい。それより、早く話をしましょう。私、ひどく眠いです」

大谷刑事は頭をあげて、

「驚かないで下さいね」

「はい？」

「『美素人』の社長とロシア人の従業員、みんな死んだんです」

何を言ってるの？

「嘘でしょう？ だって、夕方まで元気にしてたんですよ」

「周りの人が叫び声に気づいて110番通報したんですよ。私たちもあの時近くにいたんで、それで、交番から来た警官と一緒に管理人に鍵を借りて中に入ったら、四人、殺し合ったみたいで……」

殺し合った。

私は気が遠くなって何も言えなかった。

「どういうことですか？」

「あまり詳しいことは言えませんが、とにかく刃物を持ち出したらしいんです。どうですか？ そんなになる気配というか……」

「ないです！ そんな、殺し合うなんて……」

そこにまた携帯が鳴った。番号を見ると大野だった。

「ちよつと失礼……」

私は隣の部屋に移った。

「刑事が来ましたね」

やつぱり見張ってるんだ。

「なんで？」

「わかりますよ」

「それで？」

「適当に対応して下さいね」

「は？」

「適当ですよ、適当」

「なんでそんなこと」

「あなたは今日、私たちとハラワタを食べたでしょう。もう仲間ですよ。ヨモツヘグイといましてね、『常世の蟲』の儀式ですよ。犠牲のハラワタを食べたらもう仲間です。逃げられないと思って下

さいね。もう一蓮托生ですよ。わかりますね。あなたのお父さんと同じですよ」

「お父さん？」

「あなたがお父さんの子供であることから逃れられないように、もうあなたは『常世の蟲』からは逃れられないってことです、わかりますね」

薄気味悪くなって、切った。

「失礼しました」と刑事たちのいる部屋に戻ってコタツに座った。

「お忙しいみたいです」と大谷刑事は言った。明らかに探りを入れるような口調だった。

「まあ、でも、『美素人』がそんなになっただんじや、原稿書いてもしょうがないですね。あゝあ、仕事ひとつなくしちゃった。結構良いギヤラだったのにな」

と、私は本気で言った。この仕事なくなったら、奈美ちゃん悲しむだろうな。

「『美素人』の他の女の子はどうなったんでしょうね」

刑事はすぐに話を『美素人』に引き戻した。

「引き抜かれたって言ってましたけど」

「引き抜かれた？ 殺された、の間違いじゃないんですか？」

血が凍るかと思った。

生きたまま解剖

まさか、そんな。

隠しようのない動揺に、大谷刑事はたたみ込んで、

「もうすぐ大問題になると思いますがね、『常世の蟲』とやらを拝んで、『常世の蟲』ドリンクを飲んでれば不老不死になるんですと聞いたことはありませんか？」

私は首を横に振った。実際、何も知らないし。

「これですがね」

大谷刑事が出した小さな瓶には、黄色と黒のマダラの芋虫を大きくあしらったデザインのラベルが貼ってあった。

「連中、山梨の山奥で集団生活してますよ。大きな研究所も建ててあなた、そこにいたんじゃないですか、畑野勝也のマンションから連れ去られたあと」

私は必死で首を横に振った。もう泣きそうだ。

「勘でものを言っではいけないんですけどね、『美素人』の女の子もみんな、同じ所に連れて行かれたんじゃないですか。そしてみんなは今でも行方不明。でも、あなただけは戻ってきた。なぜでしょうね」

「もういいじゃない！」と私はついに切れてしまった。

「一人にして下さい！一人で泣かせて下さいよ！私のまわりでいったい何人死んだと思ってるんですか！」

私は顔を両手で押さえて泣いた。もう誰はばかることなく泣いた。なぜ、どうして、みんなで私を虐めるの？

いったい私が何をした？

「もうふたつだけ、聞いたら帰ります」

大谷刑事は信用出来るのか。

とりあえず一晩考えよう、一晩考えて、警察に話すかどうか、決めよう。

「まず」と大谷刑事は言った。「あなたの前の部屋の上の部屋で亡くなった女性なんですが」

私の目を二人がじっと見た。

「それが何か」

「面識は全くなかったんですね？」

「ありませんよ、まったく」

「これを見てもらえませんか」

大谷刑事は写真を鞆から写真を一枚取り出した。『常世の蟲』の額の下に集合写真だった。巫女の装束をした女が11人いて私は言葉をなくした。

「あの女性の部屋にあった写真なんですよ」

「これは……」と刑事はその写真の中の真ん中に写る女性を指さし

た。

「あなたじゃないんですか」

私はそれよりも、その隣に座る女性に目を引かれた。

レイナだった。

なぜ？

「これも」と言って大谷刑事が差し出したのは履歴書のコピーの束だった。

「写真をご覧くださいね」

私は八枚を一枚ずつめくり、そして最後の一枚を見て、刑事に返した。

「それが、どうしたんですか」

「こんな偶然があり得るんですかね」

「あるんじゃないですか」

私は動揺を隠しながら言った。皆が『常世の蟲』の巫女？

「もうひとつ」

そういつて刑事は写真を一枚差し出した。

これは……何？

私は男の顔を見た。いったい、どういうこと？ でも言葉にならない。

「これ、二十年前の写真なんですよ」

あまりのことに言葉が出ない。男たち二人は顔を見合わせた。不気味な方の男が大谷刑事に何か促した。

「それでは」と大谷刑事は言った。「今日はもう帰りますので、ごゆっくりお休み下さい」

私は刑事二人を玄関で見送り、

いったい何が起きてるの

そう思つて呆然と立ちつくした。

そこへまた携帯なのだった。大野だ。

「帰りましたね、刑事二人」

「何か用？」

「そりゃあんまりですね、せっかく心配してかけたのに」

「心配？ 自分たちの心配でしょ、私が何を言ったかが心配なだけでしょ」

「……何を言ったんです、刑事に」

「何も言っていないわよ。私はもう誰も信用しないから。何も聞かないから」

「それは駄目ですよ。ヨモツヘグイをしたからにはあなたも私たちのウカラです。私たちと一蓮托生ですよ」

「それはあなた方の論理よ。勝手な論理よ。私はそんなの知らないし、自由に行動する。私はアンタたちには縛られない」

「確かに私たちの勝手な論理かも知れませんが。でもこうやって私たちは自分たちを守ってきたんですよ、ずっと」

「守ってきた？」

「そうです」

「何から？」

「世間からですよ、世間の無理解からでしょう」

「それが私と何の関係があるんですか」

「……関係あるから言ってるんですけどね。まあ仕方ないと思いますよ。でも、今、ヒルメ様が追いかけているのはアナタなんです」

「ヒルメ様？」

「レイナなんてのは、『美素人』の社長が勝手につけた下らない名前ですよ。私たちはヒルメ様とお呼びしているんです」

ヒルメ様！ 憶えがある……日留女さま！

「どうしました？」

お日留女さまと、日留子さま

「どうしました、石田さん？」

……

お日留女さまと、日留子さま

黄色い黄色い和魂、黒い黒ウろい荒魂

お連れ下され常世へと



お日留女さまと、日留子さま

黄色い黄色い幸福サキミタマ、黒い黒ウろい奇魂クシミタマ

お連れ下され常世へと

下され下されお日留女さまよ

可愛や可愛いお日留子さまを

.....

耳に残るこのお経のような文句。

間違いない、小さい頃に『常世の蟲』で聞いていた歌だった。

私は我に返って、

「レイナは、なぜ、私がいることがわかってるのにここに来ないの？」

「わかりませんよ。日留女さまのなさることにいちいち意味なんかありません。日留女さまはお目覚めになられて、とどまる場所として大阪を選ばれた。私たちがわかるのはそこまでですよ」

もう！ 言うことがコロコロ違う！ まともなの？ こいつがいちばん信用出来ない。

「もういいわ。アンタの言うこと、もう聞かないことにしたから」  
「いやあつて、大野は、

「大生さんは大丈夫でしょうかね」  
「ゾツとした。健多がどうしたと。」

「どういうこと？」

「日留女さまの動きを見てると、どうもアナタに関わる男性を皆殺しにしているように見えるんですがね、どうでしょう？」

健多は今、韓国に長期取材に行っている。二週間後に帰ってくる。帰ってきたときに、まさか、編集長やあの刑事のように。

「健多にまで手を出したら、アンタたち！」

「どうするんです？」

どうしようもない。

「どうしようもないでしょう。日留女様の前では警察も無力です、それもわかりですよね」

「また、『巨大で巨大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で巨大で大きな意志』とか言うわけ」

「……あなたもその大きな意志に関わってるんですよ。ちやかすような発言は控えて下さい」

あまりにもクソ真面目な口調に、私は黙っているほかなかった。

「とにかく」と大野は言った。「日留女さまの足跡を見つけたら、必ず知らせてください。ヘタしたらこの世が滅ぶようなことになりますよ。いいですか、警察は当てになりません、絶対に。この件に関しては私たちがいちばんの専門家です。そのことは国もわかっています」

「もう眠いから、切ります」

私は携帯を切って畳にへたり込み、コタツに潜り込んで灯りを消した。

もうこのまま寝る。

なんだかとても悲しくてバカバカしくて。

父が祖父母に一生懸命説明していた。

「イザナギとイザナミの最初の子ね、ヒルコって言うんだけど、そのヒルコこそ、不老不死をもたらす神だったんだ。ヒルコはね、アマテラスの別名のヒルメと対になってる神で、最高の神と同じだけの力を持ってるんだ」

祖父母は首を横に振って、ワケがわからない、といった仕草をした。

「わからないかなあ」

父は焦り、祖父母は黙っていた。

「たとえばね」と父は言った。「お父さんお母さん、この世に『死』なんてないんだよ」

やや長い沈黙があった。

「でもみんな死ぬ」と祖父がぼそりと言った。

「それは死んだだけでしょ」

「死んだだけでも何も、死んだから死んだんじやろが」

「よく考えてよ」と父は少しいらついた口調で言った。「それは『死』じゃないよ、ただ厄災にあつて死んだだけだよ」

「それでも死んだことには変わりないじゃろ」

「いいかい、厄災に遭うことと、『死』とは分けて考えないといけないんだよ。あの人は事故で死んだ、この人はガンで死んだ、とかつて、どれだけ具体例を積み重ねたつて、それは『死』があることの証拠にはならないんだよ。それは死因のリストを作っただけだからね」

また沈黙があつた。

「けど、ウチの親戚で百をこえて生きとる者はおらん」

「それはね、厄災に逢つたからでしょ、事故とか病気とか。そういう厄災を取り除いていったら、この世に『死』なんかないんだよ」  
「でも、年取つたら誰だつて死ぬ」

「だから、そういう『老い』も厄災の一つなんだよ。ボクらはこれを禍津日まがひの仕業だと考えてるんだけど、この禍津日の仕業を取り除いてくれるのが、ヒルコなんだ。ヒルコが老いという厄災を祓ってくれたら、人間は絶対に死なないんだよ、絶対に」

祖父母は、どうしようもない、と言つた顔で首を横に振つた。

「ほら、ここに書いてるんだよ」

そういつて父は『始皇帝未来記』と書かれた古文書のどこかを指さして読んでいった。秦氏がどうの、徐福がどうの、蓬莱山がどうの、不老不死の仙女がどうの、よくわからない話だった。

「もういい。わしら学は無いけん」と祖父は言った。「とにかくみどりは連れて帰る」

「ちよつとまつて、もう少し聞いてよ」

「何を？」

「お父さんは、どうして人間は死ぬようになったと思う？」

「そんなもん、昔から決まつてるワイ」

「だからね、『日本書紀』によるとね、人間が死ぬようになったのは、僕らの祖先がね、イワナガヒメとコノハナサクヤビメっていう

姉妹のうち、コノハナサクヤビメだけと交わったからなんだ。だから人間は木の花のように朽ちていくんだ。もしもうちどイワナガヒメと交わることが出来たら、人間は死ぬことはないと思うんだ」

「そりゃ、神話の話じゃろが」

「違うんだよ。最新科学の話だよ。つまりね、人間に限らず動物の細胞には、みんな寿命を決める遺伝子があるんだよ。わかる？ 遺伝子だよ、遺伝子。テロメアって言うんだけど、この遺伝子を無効化するウイルスもいるってことがわかったんだ。つまり、寿命遺伝子は無効化出来るんだよ。そのウイルスのことを僕らはヒルコって呼んでるんだ。ヒルコが体内に入ること人間は不老不死になる。だからイワナガヒメとの交わりって意味はね、そのウイルスに感染した女性と交わるってことなんだ。つまり、ヒルコを持っているイワナガヒメをさがして交われれば、人間は絶対に不老不死になる。でね、良く聞いて欲しいんだけど、ボクらは見つけたんだよ、イワナガヒメを！ 『始皇帝未来記』には仙女って出てるんだけど、間違いない、イワナガヒメなんだ」

「もうええ！」と今度は祖母がキレた。「とにかくみどりは連れて帰る」

寝ながら泣き、泣きながら寝た夜はすぐに明けた。

刑事が最後に見せてくれたあの写真、あれは間違いなく私だった。二十年前の私そっくりの他人なんてものじゃない。あれは絶対に私だ。

考えてても仕方ない。私は楽天的に生きると決めただから、楽天的に生きよう。と思う。

こんな大変な事件が起きてるからこそ、日常のリズムを崩してはいけない。

起きて、化粧を落として、顔を洗って、歯を磨いて。  
朝食だ。

作り置きのお鶏ガラスープを小鍋で温め、そこに茹でて冷凍しておいたジャガイモをレンジで解凍して放りこむ。塩と胡椒で味を調

えてスプーンで荒くつぶしたらなんとなくポタージュっぽくなって、そこに乾燥パセリを散らして出来上がり。

ゆづべは肉を食べ過ぎたから、今朝はこのスープだけでいい。

私はゆっくりと、ひと匙、ひと匙を味わった。

口にスープを運ぶたびに、

「楽天的、楽天的」

と心の中で呪文のように唱えた。

そして皿に二杯のスープを飲み終えて、携帯から大谷刑事にかけた。

大野は怪しい。言うことがコロコロ変わる。いちばん信用出来ない。

反対に、大谷刑事とあの不気味な男の情報は確実に、しかも筋が通っている。

賭けるなら、大谷刑事の方だ。

十時にそねちかで待ち合わせた。

時間はじゅうぶんある。UVケアだけきちんとして、白のブラウスに春らしい水色のプリーツスカートをはいて、曾根崎署まで自転車で行く。曾根崎署は御堂筋の北の端だから、ここからはずっと歩道だけで行ける。良い天気だし。

自転車で走ると春の風が心地よかった。久しぶりにはいたプリーツの裾をひるがえしながら私は御堂筋を走り抜けた。大阪に出てきた頃、御堂筋を歩きながら、ビルのスカイラインが綺麗に揃っているのに感動したものだ。あれもこんな晴れた朝だった。親から自由になって、親戚からも自立して、不安と希望とで胸は信じられないくらい爽やかだった。あの時私は、ただ、良く生きよう、と思っていた。誰にも迷惑をかけず、誰からも恨まれることなく、ただ、良く生きよう、と。

それなのに、と心が少し沈んだ。私の回りでどんどん人が死んでいく。

そして私の写った二十年前の写真……。

私は何も信じられず、ただ恐ろしくなつてペダルをこいだ。

もつかまわない、全部警察に言つて終わらせよう、この異様な世界を

旭屋の前に自転車を止めて地下街に降りた。十時前の地下街はまだ静かで、けれど朝のヒンヤリした爽やかな空気が流れていた。わたしはそねちかの椅子に座り、大谷刑事を待った。隣ではおばさんがスポーツ紙を読んでいた。一面には、デリヘルで四人死亡、の大きな文字が舞っていた。

一応連絡しておいた方がいいと思つて奈美ちゃんの携帯にかけた。「知ってる？」と私は挨拶もそこそこに言つた。

「知ってる」と奈美ちゃんの落ち込んだ声が帰ってきた。

「原稿、もういいよね」

「うん、もういい」

何か話そうかと思つたけど、話の接ぎ穂が見つからなかった。

そのまま切つた携帯がすぐに鳴った。大野だ。

「今どこですか」

「わかつてるんじゃないの？」

「自転車とは考えましたね、見事にまかれてしまいましたよ」

「別にまくつもりはなかつたんやけど」

「で、今どこです？」

「言つ必要も義務もあれへん」

ちようど大谷刑事が来た。

私は携帯の電源を切つた。

「上に、行きましょうか」

大谷刑事に促されて私は地下街から曾根崎署へと歩いた。

案内された二階の広い会議室の端の方に置かれた小さなテーブルに、私と大谷刑事とは向かい合つて座つた。

「ここしか空いてなかつたんですよ、二人なのになんか勿体ないですよね」

大谷刑事はそういつて軽く笑つた。この人の笑みははじめて見る。

なんか、悪い人じゃなさそうだ。

「さて」と大谷刑事は刑事らしい顔に戻った。

「あの……」と私は遮っていった。「私が話す前に、大谷さんに一つ聞きたいんですけど……」

「なんでしよう」

「昨日見せていただいた写真ですね、あれはどういう……」

「ちょっとこれを見て欲しいんやけど」

大谷刑事は鞆から男性の写真を取りだして並べた。

六枚。その中には私のよく知る男が二人いた。父と、大野。

「これもまさか、二十年前の写真なんですか？」

大谷刑事は無言でうなづいた。

「……」

「さらに、こういうことです」

さつきと同じように、また男たちの写真が一枚一枚、二十年前のものに対応して並べられた。これは前に貰っていた写真だった。よく見れば、横顔で気づかなかっただけで、一枚は紛れもなく父の写真だった。

「どういうことですか？」

「こちらが教えて欲しいくらいですよ。あなたはいつたい、誰なんですか？」

私？ 私は私よ。

高知に生まれ四国を転々として高校を卒業して大阪で専門学校に通って卒業してちょっと就職してすぐにフリーになって今に至る私よ。

私はそのことを説明した。

「驚かないで下さいね。まず、あなたの本籍地に問い合わせましたが、石田みどりという人の戸籍はありません」

「どういうことですか？」

「高知県中村市を本籍とする石田みどりという人はこの世に存在しないということです」

私は目の前が真っ暗になった。ように感じた。

「それから……石田さんは難波クリエイターズカレッジのご出身ですよね」

「そうですね。そのライターコース」

「問い合わせましたが、難波クリエイターズカレッジに、石田みどりという卒業生はいません」

「ちょっと、ちょっと待って下さいよ、つまり私が何か、詐欺でもしてるって言いたいんですか？」

「ちがいますよ。それで、卒業後、就職したのはどこでしたっけ」

「『月刊浪花つ子』です。二年間勤めました」

「そこにも問い合わせたんですが……」

「はあ」

「誰も、石田みどりさんを知りませんでした」

「だって、あそこ入れ替わりが激しいから」

「石田さん、『月刊浪花つ子』の編集長の名前が言えますか？」

編集長？ 編集長の名前？ 知らない それどころか『月刊

浪花つ子』で働いた記憶が全くない 私は頭をバットで横殴りに

殴られた。ように感じた。

私は、誰？

「最近、ご親戚には会われてますか？」

「いいえ」と私は首を横に振った。嫌な思い出しかない親戚たちに何で会うものか。

「ご親戚はどこどこにいらっしゃるんですか？」

「四国ですよ」

「四国の、どこ、ですか？」

「四国の……」

言えない 嫌な思い出があるだけで、具体的な記憶が全くない。

私は、誰？

私は崩れそうになる世界を必死で支えた。



私は、誰？

「あなたは石田みどりさんじゃ、ないんでしょう？」

そうだ、多分、違う。父の記憶も親戚の記憶もニセモノだ。私はもつと別の、別の。

記憶の網に何かが引っかかりそうになった。

私の後ろのドアが開いて誰かが入ってきた。

「何か？」と言う大谷刑事の声は『パン』という音に消された。大谷刑事は硬い表情をしてヘナヘナと崩れた。

振り返ると制服の警官が銃を構えていた。

薄く煙が上がっていた。

警官は銃を自分のこめかみに当てた。

私は目を閉じ、耳を塞いだ。二度目の『パン』の音がした。

私は何も見ずに会議室を駆け出した。銃声に気づいた人たちが次々に殺到してくるのをかき分けるように廊下を走り階段を駆け下りて曾根崎署の外に出た。

空を見上げた。

涙目にも、春の爽やかな日差しだった。

この世は何も変わっていない。

なのに、私の全ては変わってしまった。

私はいつたい、誰？（つづく）

## 6 千四百年の恨み

手には、大谷刑事の持つてきた資料があった。いつの間に  
私はそれを鞆に入れ、涼子ちゃんに電話した。

挨拶もそこそこに、

「涼子ちゃん、涼子ちゃんは難クリのフォトコースやったよね」

「はあ、そうですね」

「難クリで私に会ったこと、あったっけ」

「はあ？ だって、よく一緒にコンパしたじゃないですか」

確かに。

「涼子ちゃんずっと仕事してたんだっけ」

「そうですね。え、いったいどうしたんですか？ 赤城さん、ヘン

ですよ？」

「もう一度確認したいんだけど」

「はあ」

涼子ちゃんは少し辟易しているようだった。

「私たちは同じ難クリ出身よね」

「そうですね」

「神仏にかけて誓えるよね」

「神仏？ 神と仏とを一緒にしないでください」

涼子ちゃんの声が変わった。重い口調に私は絶句した。

「みどりさん」と涼子ちゃんは私の本名で言った。「みどりさんが

そんなんじゃない駄目でしょう」

何を言ってるの？

「警察に行っただんですね」

「そうよ。今、警察の前」

「やっぱり、間違いなく今日だったんですね……」

何を言ってるの？ 私は絶句した。

「みどりさんは覚醒し始めてます。とにかく、心のままに動いて下

さい」

何を言ってるの？ 涼子ちゃん。

涼子ちゃんまでもが、いったいどうなってるの？

気がつけば目の前にあの不気味な男が立っていた。

昨日と同じダークスーツに青いドレスシャツ、ノータイでもだらしなく感じないのはスタイルが良いからかも知れない。足が長い。

「ごめん。ちよつと用事。切るね」

「はい。お被い場で待ってます」

涼子ちゃんは最後にまたワケのわからないことを言った。

私は男を無視して自転車に乗った。

とりあえず帰ろう。

「石田さん」と男は声をかけてきた。

「はあ」

私はワザと気のない返事をした。

「人が死んだんですよ」

「そうみたいです」

「二人も」

「それが、何か？」

人間なんていつか死ぬモノでしょ、何よいちいち。

「おかしくなってますか、あなたの心」

「ココロ？」

「道徳とか、倫理とか、そういうのが消えかけてませんか」

「なんだかうるさい。振り切って自転車に乗った。」

でもマンションに帰ったら、あの近所には大野がいる。これもうつうつしい。

何となく車輪を鶴橋の方に向けた。十二年も住んだ街だ。それに、発端となったあのマンションの現場をもう一度見ておきたい。

風はもう昼間のホコリを含んでいた。走っていてもちつとも爽やかじゃない。

鶴橋のマンションは私がいなくなってもそこにあった。国際市場

から少し離れたコンビニの上。ここに私は十二年住んだ。つもりだったのに。

私は少し気になることがあって、自転車を置いて二階の管理人室に行った。

「あの……」

「ああ」と管理人は言ってテレビから目を離し、「あの件ではお世話になりました」

「いいえ。それより、ちょっとお聞きしたいんですが」  
「なんでしょ」

管理人は私に向き直った。

「ちよつと税金の関係で、私がこことどんな契約してたか、知りたいんですけど」

「契約の関係は、ワシじゃわからんけどな」

「大家さんに聞いたらいいんですか？」

「そつやな。確かめちやるか？」

「お願いします」

管理人は受話器を取って短縮ダイヤルでどこかにかけた。

「ええつと、おたくは601やったよな」

そつ言つてまた受話器に戻り、はあ、はあと返事してすぐに切った。

「借り上げみたいやな、『オフィス・ゼロ』さんの  
やっぱり。

「いつから、ですか」

「一年前やつて。お宅が入居したのは半年前やけど」  
予想した答えだった。

「そうですね、ありがとう」

私は管理人室を出て、ふらふらと、この間まで住んでいた501の部屋のドアの前に行った。

「大生健多」

の表札がかかっていた。

ここに健多が住むようになった、のか？ そんなはずはない。

私は表札を見ながら呆然と立つしかなかった。

そして思いつき、六階のあの部屋の前に行った。

私は何も言わないのに、管理人はここが『ナイトライブ』の本体、『オフィス・ゼロ』の契約だと教えてくれた。

多分、健多の名前になつてゐる501も『オフィス・ゼロ』の契約だろう。「大生健多」とは、「江藤祐二」と同じ、デタラメな名前なんだ。誰かからの追跡を逃れるための。

私はゆつくりと階段を下り、五階の踊り場でまたあの不気味な男と目があつた。男は私が住んでいた部屋のドアの前に立っていた。

「石田さん、やっぱりここに戻られましたね」

「やっぱり？ やっぱりって……」

「人が死んだんですよ」と、私の質問には答えず男はまた言った。

「知ってますよ。見たんですから。目の前で二人、あつと言う間でしたよ」

「何も感じないんですか？」

何もって？ いったい何を感じると。人なんてすぐに死ぬモンでしょう。

「ほらその目、人間の死とか、そういうことが理解出来なくなった目ですよ」

「どういうことですか？」

「聞きたいですか？」

「ええ、とつても。その喫茶にでも行きますか？」

「喫茶で出来るオハナシじゃないでしょう。あなたのお部屋に入りましょうよ」

「難波の？」

「いいえ、あなたの方が大生健多の名前で借りている、このお部屋ですよ」

「鍵がないもの」

「あるはずですよ。今のマンションの鍵と一緒に」

私はバッグの中を探った。確かに難波のマンションの鍵と一緒に見慣れた鍵がついていた。

解約してなかったんだ。いや、解約のしようがないか。契約してたのは『オフィス・ゼロ』だから。

鍵を開けると、しばらく家を空けていたときの臭いがムツとした前にもよくしていたように、私は玄関を開けたまま息を止めて駆けて行ってベランダの窓を開けた。

春の風がさあつと通り抜けていった。

置いていったテレビ以外、部屋に家具は何もなかった。

男は六畳の部屋の真ん中に胡座をかいて座った。

冷蔵庫も何もない。

「何もないですから、下のコンビニで、何か飲み物でも買ってきましようか」

「いえ、お構いなく」

私も男の前に胡座をかいて座りながら、

「失礼ですけど、お名前はまだでしたよね、刑事さん」

「そうでしたね。それと、私は刑事じゃないんです」

「刑事じゃない？ 普通の警官ですか？」

「いえ、宮内庁の嘱託でしてね。研究員というか、そういう立場です」

「……宮内庁」

「ハタノと言います」

「ハタノ？」

ハタノといえば、あの変態も。

「あの……」

「畑野勝也ですか？」

「そう、私のオシッコ飲んで死にそうになった」

普通なら言いづらいことだろうに、私はスラスラと喋った。

何かおかしかった。また私の心が崩れ始めている。

「あれも私と同じ秦一族です。ただ、あいつは秦一族の中の裏切り

者ですよ。今は『常世の蟲』の使い走りに落ちぶれてます。もともと分家筋で、しかも趣味が良くない。知ってるでしょ？」

何人の女の子のオシッコを飲んだって言ってたっけ。忘れたけど、とにかく変態なのは変態だ。

「私は同じハタノでも、直系のハタノ、秦の始皇帝の『秦』ひと文字でハタノと読みます」

「あなたは変態じゃない？」

「もちろん、いかなる意味においても」

私はそのクソ真面目な口調に笑った。

「あの畑野はいかなる意味においても変態だった、と」

「まあ、でも、そのおかげで、あなたとセックスしても助かったみたいですね」

「そのおかげ？」

「あなた、さつき、大谷刑事の資料、全部もって出ましたよね。その中にありませんでしたか、『常世の蟲』ドリンク」

私はバッグの中を探った。紙袋の中に気持ちの悪いイラストのドリンクが入っていた。

「それね、厳密には詐欺じゃないんですよ、困ったことに。実際効くんですよ、どんな病気にも。延命効果は絶対にあるんでね。まあ、万能薬つてところですね」

「そんな都合の良いモノなんか、この世にあるわけないでしょう」

私は秦の言を早口で打ち消した。小馬鹿にされているような気がしたから。

秦は、ふ、と笑い、「あるんですよ。困ったことに」

「なんなんですか、それ」

「甘露です」

「甘露？」

「SMプレイで言えば聖水ですかね」

私は嘔き出して笑った。

オシッコですって！

私は手を打って笑い、笑って、笑って、笑って、脚を崩して笑った。

「石田さん」と、秦は私の股間を指さして言った。「パンツが見えてるんですけど」

秦のマジな調子にまた可笑しくて笑った。

パンツごとき、なんで気にするの。

そう思うとまた可笑しかった。

笑って、笑って、もう止められないくらい笑った。

「石田さん、人が死んだのに、よくそんなに笑えますね」

「笑えますよ、だって可笑しいんだもん」

「少し」と秦は重々しく言った。「真面目なオハナシをしませんか」

「どんな？」

それでも心の中で私は笑っていた。

「人間の『死』について、ですよ」

「死？」

なんでそんなこと。

「あなたは自分の死を考えたことがありますか」

「もちろんありますよ」

「どんな？」

「どんなって、そりゃ病気がしたり、事故にあったり」

「それは人間に降りかかってくる厄災でしょう。死はその結果としてあるだけです。たとえばあなたが病気にもならず、致命的な事故にも遭わなかったら……」

「老衰で死にますよ、もちろん」

「もし、ですよ」

秦は間をおいて私の目を見た。

「老いや厄災というものを取り除くことが出来たら、人間は死なないんじゃないでしょうかね」

秦の言葉が私の心のどこかに触れた。どこかで同じような話を聞いた。



「たとえば、ですよ。これは『たとえば』の話として聞いて欲しいんですけど、たとえば単細胞生物は、ずっと、この世に誕生してきてから、ずっと、生きてるわけですよね」

「まあ、そうですね」

私はうなづいた。確かにそうだ。死んだらそこで終わりだし。続いてるってことは、生きてきたってことなんだろう。

「性を持った生物だけが、個体として死ぬわけです。でも子孫という形で、遺伝子をのせた細胞は生き残ってる。細胞の連続性は維持されてる。わかりますか？」

「はあ、まあ」

「つまり、生物は個体の『死』と引き替えに、細胞レベルでの永遠の生命をつなぐ『性』を得たというわけですよ」

「よくわからないです」

私は正直に言った。実際、よくわからない。

「いえ、ごめんなさい、ちょっと話がずれましたね。じゃあ、ですよ。ものすごく長い寿命の寄生虫がいたとします。いいですか」

「どのくらいの寿命ですか？」

「基本的には単細胞生物と同じで死なないと思って下さい。こんな寄生虫はどんな生物を宿主にしたらいんでしょうね」

私は少し考えて、

「そりゃ、もともとの前提に無理がありますよ。死なない寄生虫の宿主なんて、ありえないでしょ。宿主の方が先に死ぬなんて。それで子孫を残してなかったら、共倒れじゃないですか」

「もし、ですよ」と秦は少し笑んで言った。「寄生虫が宿主の体そのものを変えてしまったら、どうでしょうね。宿主の遺伝子そのものを変えてしまって、老いない体にしてしまったら」

この話もまた、心のどこかに触れた。

「そうしたら寄生虫と宿主とが永遠に共存共栄出来るってことですか？」

「共存共栄かどうかはわかりません。一方的に利用されるってこと

「かもしれませんからね」

私はなんだか薄気味悪くなってきた。

「何が言いたいんですか？」と私はマジな口調で言った。

「少し話を戻しましょう」と秦は言った。「人間がもし死なくなつたら、どうなるでしょうね」

「どうなるって……そりゃ、人口問題が起きるでしょう」

「ごめんなさい、さっきの話を思い出して欲しいんですけど、『性』は『死』の代償でしたよね。だから死なない代わりに子孫は残さななんです。老いない代わりに生殖は出来ない。性交したら相手も自分も致命傷を負ってしまう。だから絶対に子孫は残せない」

「だったら、何も変わらないんじゃないですか？ その個体にとつては」

「記憶、はどうなります？」

記憶？ 記憶 これも心の何かに触れている。記憶 記憶

はどうなるの、記憶は。

「たとえば何千年も生きてたとして、その記憶は何人分の記憶でしょうね。そんな容量が脳にあるんでしょうかね」

首を横に振った。よくわからない。正直言つて。

私は自分の顔が仮面のように硬くなつていくのを感じていた。

「それから」と秦はまた重い口調で言った。「道徳や、倫理はどうなります？」

「わかりませんよ、そんなの」

「死なないんですよ？ 人間の根源的な恐れが消えてるんですよ？」

「道徳や倫理が消えるって、こと？」

「というより、何百年も生きてると、脳の中で、そういう道徳や倫理の機能を担った部分から先に、記憶に食われてしまつてことですよ」

「記憶に食われる？」

「なんだか薄気味悪い表現だ。」

「そして最終的には新しい記憶を受け付けなくなって、記憶全体が

崩壊する。記憶によって統一されていた人格が消える」

私は息を呑んだ。

「普通はそこで終わりです」

「死ぬの？」

秦は答えずに続けた。

「ただ、稀に、残った記憶と新しい情報を継ぎ合わせて、新しい人格の物語を次々に創作して生き延びる個体もあります。千年前の記憶と最近の記憶とを合成して、なんとか辻褄を合わせて再構成するわけですね。たとえば、本当は迫害されたのはもう千四百年も前のことなのに、それがまるで三十年前の幼少時のこととして、手近な素材を集めて新しい人格の物語を造ってしまうというわけです。新しい情報を全て想い出の中に組み込んでいきながら、まるで思い出したかのように辻褄を合わせながら……」

やめてよ、と言いたかった。けれど、

「私の人格は」と私は絞り出した。「私の脳が勝手に造ったものだからというの？」

「基本的には誰だってそうだとは思いますが、あなたたちの場合……」

…

「あなたたち？」

「常世の神の巫女たちですよ」

巫女 常世の神 日留子 日留女。

心の底が疼く。

「もうひとつ」と秦は言った。「死が無くなることは、心の境界線無くすことでもあるみたいです。個人と個人を隔てている『死』の壁が無くなるんでしょうかね。まあ何千年も生きているうちに脳が独自に発達して、脳波を自在にチューニングできるようになったというのが正しい見方だとは思いますが、生き残った個体は、比的に言って、他人の心に潜って入って、その他人を自在に操れるようになった。だから……」

「つまり」と私は秦をさえぎって言った。「今日の二人は私が殺し

たつて言うの？」

「あなたじゃありません。あなたの、脳が、です」

「脳？」

「正確には、あなたの中にいる蟲が、です」

「蟲？」

「寿命を決める遺伝子を無効化するウイルスのことを私たちは蟲と呼んでるんです。もともとこれは古代日本の風土病だったみたいですね。女にだけ感染して、不老不死になる。この女と交わった男は、死ぬ……」

「あなたはいつたい何者なの？ 私をどうしようって言うの？」

「何もしません。ただ、あなたは最後の生き残りです。あなたの最期を見届ければ、私たち秦一族の使命は終わります。徐福が流れ着いてもう二千年以上、私たちは貴女たちを追ってたんです。そして、たぶん、あなたが最後の一人です」

真面目な口調に、なんだか急にバカバカしくなってきた。

「誰が信じるの、そんなヨタな話」

「あなたはこの歌を憶えているでしょう？」

秦はいきなり歌いだした。

「ウヅマサハ カミトモカミト キコエクル トコヨノカミヲ  
ウチキタマスモ」

知ってる。

忘れるものか。

嫌な歌だ。

あれはアメトヨタカライカシヒタラシヒメノスメラミコト、今でいえば皇極天皇の御代だったわね、富士の麓で静かに暮らしていた私たちをあの秦河勝はたのかかつめが勝手に邪教だつて決めつけて都に連れてきて虐殺したのよ。でも、男たちはともかく、私たちが死ななかつた。だって私たちは常世の神に仕える巫女だったから、そう簡単に死ぬわけないじゃない。なのに、バカな民は私たちが滅ぼされたとも思っ、秦河勝を讃える歌なんか歌って秦河勝を英雄に祭り上げて

た。でも、よみがえった私たちを見たときのあの腰のぬかしよう、でもそこから河勝らしい。思い出しても笑えるわ。結局、河勝は歴史から姿を消してしまった。それで秦一族の太秦寺はマダラ神なんて常世の神のニセモノを祭ったりして、本当に可笑しい。忘れるモンですか秦河勝　ハタノカワカツ　ハタノ　秦　秦野！  
太秦は　神とも神と　聞こえ来る　常世の神を　打ち懲たますも

これは大生部多おおしへのおおが死んだとき、悪ガキどもが歌った歌だ。

私たちの屈辱の歌。

「あなたは」と私は言った。「河勝の子孫なの？」

「よく思い出しましたね」

これは、私の記憶なの？　ハタノカワカツのこと、大生部多のこと。

「思い出しましたか？　私たちは、時の権力者のもとで、あなたたちをずっと監視してきたんですよ、今では宮内庁の囑託ですが。囑託という身分で『常世の神』の巫女の生き残りを監視してきたんです」

「常世の神……」

「あの、大野とか言うガキが始めた『常世の蟲』じゃないですよ。

あれは何の歴史もない、一種の分派です。連中は二十年前に桜島の『常世の神』から十一人の巫女を拉致したんです。単に不老不死の甘露目当てでね。あいつら、あなた方の甘露で不老不死になろうとしている。確かに、この二十年、甘露のおかげであいつらは歳をとってませんがね、歳を取らないどころか、甘露を薄めて売って、莫大な富を得てる。政治家の中にもお世話になっている連中もいますよ。でも、そのツケは必ず来るはずですよ。もう来てますかね。あいつら、やることも言うことも支離滅裂になってきている。脳に來ますからね、あれは……それほど長くはないでしょう。それに、こう言っただけなんです……」

「なんででしょう」と私はふてくされた口調で言った。

「あなた方、巫女自身が劣化してきてます。いちばんマトモに行動してるあなたでさえ、自分の力をメチャクチャに使ってる。こんなこと、これまでなかったことですよ。『常世の蟲』の連中、慌てて巫女たちを拘束して、山梨の富士の施設に収容してなんだかゴチャゴチャやってみたいですけどね、もうだめでしょう。体自体がもう限界です。この上の部屋の方、あの方も私が把握した限りでは同じ巫女ですがね、きつと、劣化が一気に来て溶けてしまったんでしょう。やっぱり二十年も人に接触させないで、甘露を取る機械としてだけ扱ってきたのがまずかったですよ。都会に出して人間と接触するようにして少しはマシになっただけでしょうけど……」

少しはマシだって。

「私も、死ぬの？」

「人はいつか死にますよ」

そんなに軽く言わないでよ。

「私は、『常世の蟲』にいたの？ 二十年前も」

「いたんでしょうね。ただ、この一年は別行動してたんじゃないですか。上の女性と一緒に」

私にも大野たちのやってたことが見えてきた。SMのデリバリーとか言いながら、実際には客は大野たちで、それで巫女たちから取った甘露をドリンクにしていた。それを、自分たちも飲み、客にも薄めて売ってた。あのバカな店長を利用して巫女たちの管理と甘露の採取を同時にやってたんだ。社会的な行動を普通に取らせながら甘露を取ろうと思ったら、SMデリバリーはアイデアとしては最高かも知れない。そして 私と上の女性だけが別行動していた記憶はないけれども。

私はふと思いついて、

「もともとの『常世の神』はどうしてるの？ 私たちを盗まれて……」

…信者たちは黙ってるの？」

「『常世の神』ですか？ あれは、それこそあなた方が始めた、日本最古のカルト宗教運動です。黙ってはいませんよ。ただ……」

「ただ、なんですか」

「無力です。千四百年前の弾圧で鹿児島に潜伏して、以来、ごく普通の宗教団体になってます。チラチラと出てくることはありませんけど、何の力もありません。日本が仏教国になってから千年以上経ちますからね、今さら『常世の神』でもないでしょう」

秦一族らしい答えだった。

私は大生部多の最期を思い出した。仏像を拝むことを拒んだ多は大通りに掘った穴に押し込められ、河勝はその上に厠を建てた。道行く人の汚物でおぼれ死なそうとしたのだった。けれど蘇った私たちは定期的に多に甘露を飲ませた。結局、多は、五年間、穴の中で汚物だけを食って生き続けた。河勝は私たちに気づいて捕らえ、多を穴から引きずり出し、戸板に大の字に縛り付けた。そしてノミで肉を指先から少しずつそぎ取っていった。けれど多は骨だけになりながらもハラワタを全部取り出されて焼かれるまで仏の悪口を叫き続け。そうだ、私たちも食べさせられたのだった、多のハラワタを。大野の言っていたヨモツヘグイはそういうことか。私たちの屈辱を忘れないための儀式。

「あなたは私を殺すの？」

「殺す？ とんでもない。あなたをどうやって殺すんですか。大化の改新よりまえからずっと生き続けて来た人を、どうやって殺せるって言うんですか」

「だったら、あなたの目的は、何？ 何のために私を追いかけたの？」

「さつきも言いましたよね、見届けることです、常世の神の最期を。私たち秦一族が常世の神から解放されるために」

「私は、死ぬの？」

「他の巫女は、たぶん、みんな死んだんじゃないですか？」

「そう」と、私は安心して言った。死ぬるんだ。偽りの記憶の中で生きるより、いいかも知れない。

「でも」と秦は言った。「あなたが死ぬと言うことは、もう甘露が

とれないってことですからね、大野たちも必死で追ってくるでしょうよ。どうします?」

どうしますって言われても、困る。私に何が出来るって言うの? 「もし静かに最期を迎えたいのであれば、その場所は、私たちがきちんと用意します」

ふ、と私は笑った。

「河勝の子孫にそんなこと言われるなんて」

「お嫌ですか?」

秦は少し寂しそうな顔をした。

「いいよ。どこへでも行くわ。もう五千年も生きてきたんだし」

秦の携帯が鳴った。

秦はそれに出て「ハア、ハア」と返事だけを繰り返し、そして、

「テレビは、つきますか?」

私は膝と肘で歩いていつてテレビの電源を入れてみた。十二時のニュースで、山梨の宗教施設に立ち入り調査が入ったとか、そういうことをやっていた。

「これは……」と私は秦の顔を見た。

「バカなことを」と秦は言った。「警察が単独で動いたみたいですね。山梨県警は、あなたの件や他の巫女の件も誘拐だって線で追ってましたからね。私はね、警察がこんな風に暴走しないように、この件がそのまま表に出ないように、刑事たちをリードしてたんですよ。大谷刑事も私のことを公安の人間だと思い込んでましたよ……今朝、あなたと二人で会わせたのがまずかった。これで事態は一気に悪くなりますね……」

テレビは白い施設を遠くから映していた。まだ中の映像はない。

「中ではね」と秦は私を見て言った。「きっと、想像を絶するようなグロテスクな光景が広がってるはずですよ。溶けかけた巫女の体から強制的に甘露を……」

「やめてよ」と私は言った。河勝の子孫が言うべきことじゃない。

「しかし……」と秦はテレビに戻った。「山梨県警も無謀ですよね。」



大野たちを取り逃がしたら何にもならないじゃないですか。さっきの携帯、大阪府警のチームからだっただんですがね、声が震えてましたよ、ヤラレタって……さて、どうしましょう。ここも時間の問題で、大野たちにかぎつけられますよ。いや、もう、連中はここに向かつてるかも知れない。どうします？」

「行くわよ、どこにでも。千四百年前の決着をつけましょう。日本は仏教国になったんだし、あなたが言うように、今さら『常世の神』じゃないわ。あなたたちの勝ちよ。どうにでもして」

「では」と秦は立ち上がった。私も続いた。

外に出ると、秦はいきなり廊下の手すりをまたいだ。

それまで冷静にしていた秦の顔が恐怖に歪んだ。

「多がどれほど苦しんで死んだか」

私は秦の目を睨みつけた。

「助けてくれよお、オレは何も……」

「アンタが何もしてなくても、それでもアンタは秦の一族なんですよ」

「そうやけど、オレは何も……」

「直系なんですよ」

「そんな……」

「さつきはえらく自慢げに言ったじゃないか」

「あれは……とにかく、オレは何もして……」

「何も？ 私たちを監視してたくせに。千四百年も」

「オレは、オレは自分の仕事をしただけやんか」

フツと私は笑った。

「アンタ、まさか死にたくないのか？」

「そりゃそうやんか、助けてくれよお」

五十過ぎた男がみつともない。

「人は誰だつて死ぬんだろ？」

「……」

「さつきそう言ったじゃないか、ええ？」

「……」

「助かりたいか？」

「助けてください」

「じゃあ、何か歌を歌え」

「……」

「ほら歌えよ。私が満足したら許してやるよ」

秦は手すりに跨ったまま歌い始めた。

「こおじいかあのおくバンビイはあくあわあいいなあ〜」

おいおい、『子鹿のバンビ』かよ、いったいどんなセンスしてるんだ。

私は腹を抱えて笑った。笑って笑って笑った。

「みいみいずくおじいさんいってたよ〜」

下を見ると十人近い観客が集まっていた。

「上出来だ。死ねよ、秦」

秦は泣きながら手すりを降りこえ、そのまま宙に蹴り出した。下から悲鳴が聞こえ、ややあつて、湿ったズタ袋を叩きつけるような音がした。

「思い知ったか、秦め！」

ああ、爽快だ。

さて、見に行こう。

私は階段を一気に駆け下りた。

飛び散った血がコンビニのガラスを染めてこの世のものとは思えないほど美しかった。秦は足から真っ直ぐ落ちたらしく、ワイシャツの両肩からは大腿骨が飛び出して、まるで胴だけの寸足らずになって仰向けに血の池に横たわり、それでも、そんなになってもまだ息があるらしく、未練たらしく口をパクパクと動かしている。

なんて滑稽なの。

私は笑った。笑って、笑って、大笑いした。

「もう一人、秦がいたな。あのド変態が。あいつも殺さなきゃ」

私は血を浴びて立ちつくすコンビニの女の子にそう言って、自転

車に乗った。

その前に、大野たちも片づけなきや。あいつら、どうしてくれよう。私たちを利用しやがって。簡単に死ぬると思うなよ。考えたら秦も惜しいことをした。一瞬で死ぬなんて、なんて贅沢。もつと苦しめてやれば良かった。いや、秦はまだ生きていたんじゃないかな？

そう思うといてもたつてもいらなくなつて、私はUターンしてまたコンビニの前に戻ってきた。秦はそのまま横たわっていた。口を血でパクパク言わせていた。

私は自転車を降り、

「何が秦よ！ 偉そうに」と叫びながら、秦の顔に飛び乗った。アゴの骨が折れ、首の骨が外れる感じがして、秦の気配は完全に消えた。

キヤア~~~~

と、コンビニの女の子の叫び声が出た。

「何でもないので、ただの敵討ちだから」

私は女の子にそう言って、また秦の頭に飛び乗った。何度めかにやっと頭が割れ、脳天から脳があふれてきた。

何が「脳」よ、偉そうに。

私は丁寧に、ていねいに、ペチャペチャと音がするまで、両足で秦の脳を踏みつぶした。結構硬い。ついでに眼窩から飛び出して辛うじて肉の糸でつながってる目玉も踏みつぶした。これも結構硬い。白いスニーカーは血まみれになって赤い靴みたい。

そして満足して自転車に乗ると、春の風はこれまで味わったことがないほど爽やかだ。

これを溜飲を下げる、と言うのか、とにかく千四百年の恨みを晴らした爽快感だ。(つづく)

## 7 ナニワ燃ゆ

さて、大野たちだ。どうやって殺そう。やっぱり殺し合わせるのがいちばんよね。でも『美素人』の四人は刃物を持ち出させたからすぐに決着がついて全然楽しくなかった。やっぱり素手よね、素手。素手で殺し合わせよう。でも素手だと血が出なくて寂しいし。私は大野たちの最期をああでもないこうでもないと思いつくまでワクワクしながら高島屋前まで戻ってきた。

そうだ、お昼食べないと。

私はずっと前から難波に来たら食べてみようと思っていたラーメン屋のことを思い出して、市場の方に向かおうと左にハンドルを切った。すると、後ろから来ていた原チャリが私をよけて、それで、よけすぎて電柱にミラーをぶち当てた。ガシヤツというような音を後ろに聞きながら、私はそのまま自転車をこいだ。

バカな女が原チャリで追いかけてきた。私に併走しながら、「ちよつとあんた、待ちなさいよ」

私は赤信号で自転車を止めた。女は逆に原チャリの速度を上げて交差点に突っ込んでいった。原チャリは白のワゴン車に真横からぶち当てられ、女の体は吹っ飛んで反対側のタンクローリーのタイヤの下に消えた、その瞬間、女の血と油で滑ったのかタンクローリーはハンドルを切り損ねてそのままグルツと横倒しになり、中程から積み荷の何かが勢いよく噴き出した。女の気配は消えた。

バカだね、人間なんて。すぐ死ぬくせに生意気なのよ。ああ、お腹空いた。ラーメン、ラーメン。

すっ飛ばして五分ほどでついたラーメン屋には行列が出来ていた。時間からすれば当然だろう。でもこんな連中のために私が待つ必要はない。私は行列を無視して店内に入り、オッサンを押しのけて座った。豚骨醤油は注文する前にすぐに来た。

スープの色はうす茶色で、香りに葱油を使ってるな。トッピング

はチャーシューと葱ともやしと海苔。

私はラーメンを食べるときいつもするように、最初に一口、スープを含んだ。

豚骨は悪くない。そしてこの甘みは 魚介を少し合わせてる。鯖フシか、鰯のフシ。ホタテの貝柱も使ってるかも 悪くないじやない。

麺もまず一口。博多風の、素麺のような細麺だ。私はツルツル麺は豚骨には合わないと思ってるから、これは合格点。ちゃんと小麦の味がするし、この良い意味でのクセは、もしかしたら群馬かどっかの内麦を使ってるかもしれない。のつぺりとした北海道の麦じゃない。ましてや輸入小麦なんかじゃぜったいにない。

美味しい。

チャーシューもとろけるようだ。バラ肉をしつかりと煮込んである。バラはカロリー取りすぎるとか言うけど、このとろけるような感じはロースじゃ出ない。

んまい。んまいよ、来て良かった。

私はスープを最後の一滴まで飲み干した。

と同時にさつき私が押しつけたオツサンが厨房から牛刀を持ち出した。刃渡り五十センチはある、骨も切れるヤツだ。それも両手にこりやまずいつしょ、ただのケンカに。

と思う間もなく、ピチャツと、店と道を隔てているビニールシートに血が飛び散った。

店内は阿鼻叫喚地獄になった。私はゆっくりと立ち上がった。私が出た瞬間に三人の男の気配が消えた。

誰かが割り込みしたという情報を入れて、それで行列の順番を消しただけでケンカになって、次に猛烈な不快感と殺意を入れてやっただけで殺し合いだ。まったく、人間なんて

ここのラーメン、もう食べられないな  
。。。。  
それだけが残念だった。

店の外に出ると、私の自転車は血まみれになって倒されていた。

乗れやしないじゃない。ちえっ、バカな人間たち。

私は腹いせに力の及ぶ範囲の人間全てに不快感と憎悪と殺意を植え付けてやった。雄叫びか何かが起こるかと思ったのに、街は一気に静かになった。そして自動車が自動車にぶつかる音、自動車がビルにぶつかって壊れる音が猛烈に上がり始めた。そして見れば、さつきタンクローリーが事故ったあたりからは真っ黒な煙が上がっている。私は少し満足してシティエーターミナルへと歩き出した。

あそこの屋上の庭園が好きで、何度か健多と来たことがある。

健多？ そうだ、健多はいるのか？ それとも、あれも誰かが私に植え付けた記憶じゃないのか。そういえばしつこいくらい太秦の話をしていたな。あれもやっぱり幻影なんだな。

そう思うと途轍もなく寂しかった。

でも、健多がいたという記憶は確かに心のここにある。健多と過ごした日々の懐かしさは千四百年前に多が死んだ日の悲しみと同じくらい確かなモノとして心のここにある。ああ、健多と結婚すれば良かった。幻影でも良いから、健多と結婚して、一緒に住んで、愛し合って、子供を産んで、育てて、子育てに悩んで、ちょっとしたこと喜んで、ちょっとしたこと悲しんで、ただ真面目に、地道に、ただひたすら良く生きていれば良かったんだ。なんで不老不死になるうなんて思ったんだろう。五千年も生きて、こんな悲しみだけが残るなんて。

私は泣きながら歩いた。車が暴走する地上は危ないから地下に入り、つかみあって殺し合う連中を避けながら泣きながら歩いた。

シティエーターミナルに入ったのにエレベーターは停まっていた。仕方なく停まったエスカレーターを歩いて昇って屋上まで来ると、『常世の神 お祓い場』と書かれた受付があった。貸し切りでパーティでもやってるのか、聞こえてくる穏やかな談笑は地上の地獄とは全く違う極楽だった。私は受付なんか無視して庭園に出た。のに、受付は

「お帰りなさいまし」と声をかけてくれた。

確かに初めてとは思えなかった。

でも庭園に出ると、初めて見る景色だった。ここを懐かしいと思っただのはなんでだろう。私はフラフラと歩み出て柵の方に歩み寄った。

庭園のあの柵を乗りこえて飛べば、もう全てが終わる。蟲に操られるだけの私の五千年の人生をここで終わらせることが出来る。こんな簡単なこと、なんでこれまで思いつかなかったんだろう。

ローズマリーやラベンダーの小道を抜けて柵に歩いて行こうとした私の前に、庭園で和やかに談笑していたお年寄りたちが集まってきた。

「お帰りなさいまし」

「お帰りなさいまし」

「お帰りなさいまし」

口々にお年寄りたちは言うのだった。

私はふと、庭園の真ん中の椅子に座る女を見た。ハーブの中に桃色のブレザーが映えて、そして幅広のレースの帽子の下に、ひと目見たら絶対に忘れられない顔立ちがあった。美という概念をそのまま形にしたらああなるだろうと思われるような、美しさそのものの顔立ち。レイナでもあり、レイナでもなく、日留女でもあり、日留女でもない、私の妹、コノハナサクヤビメ。

待ってたのね。

私はコノハナサクヤビメの心に潜っていきこうとした。

けれど、コノハナサクヤビメの心そのものがつかめなかった。

美しく安らかなイメージしか感じ取れなかった。

ただ私を待っていたのだという、その安らかな感じ。

私はコノハナサクヤビメのそばに歩み寄り、しゃがんで、その手を取った。何も反応はなかった。

「イワナガヒメ」と『ナイトライヴ』の編集長が言った。「お帰りなさいまし」

ああそうだ、こいつは編集長じゃない。隼人のオサダ。一年前、

私と巫女を一人、山梨の『常世の蟲』から取り戻して、こんどはコノハナサクヤビメを取り戻すために私をアンテナとして使った男だ。そして私はコノハナサクヤビメの居場所をつきとめた。『美素人』が連中の隠れ蓑だということを暴き、そしてコノハナサクヤビメもあの写真という形で私たちにメッセージを送ってきた。たがいに記憶が無いのだから、ストレートな意思表示なんかできやしない。時間がかかったのも仕方ない。そうか、大野たちも私をアンテナにしてコノハナサクヤビメを探していたのか。

「これで『常世の蟲』一派を壊滅させることが出来たんです。俺が死んだと思つて安心した連中から、一気にコノハナサクヤビメも奪還しましたし。もう連中の山梨の施設に残ってるのは、反魂丹で蘇らせた死体だけですばい」

そうだった。私たちの尿が甘露、私たちの糞は反魂丹。私たち以外の巫女はみな、死体と反魂丹で造った私たちのお人形だった。お人形から甘露や反魂丹をとり続けたら、二十年もすれば溶けてしまつたろう。そして確かに溶けてしまった。私の前の部屋の上にあった巫女も。

「とにかくこの大阪のどこかにコノハナサクヤビメがいることはわかつつたんです。ただ、追跡のしようがなかったんです。今回はイワナガヒメの勘だけが頼りでした。大変お世話になりました」

涼子ちゃん、奈美ちゃん、山本ちゃんもそこにいた。みんな名演技だった。私の世界が破綻しないようによく頑張ってくれた。ああ、あの看護師も。

「こいつが」と編集長は言った。「『蟲』一派に潜り込んでくれたおかげでイワナガヒメを取り戻すことが出来たんです。でも、山梨のホテルで警察に渡したのは軽率じゃった」

「けんど」と看護師は穏やかに笑みながら反論した。「『蟲』を壊滅させるにはこれがいちばん手っ取り早かつたでしょ」

「まあ、そりゃそうばい、国家権力はこういふときにつかうもんばいね」



私は軽くうなづいた。

「さあ」とオサは用意されていた白い段上に私を導き、自分も壇上に上がって『常世の神』の信者たちに向かって吠えた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

犬吠えじゃ、オサの犬吠えじゃ、とお年寄りたちは嬉しそうに言い、自らも、

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

と唱和するのだった。

隼人たちの犬吠えは大阪の空に響き、数分間続いた。

オサは続けて、

「袂えの時がまいったとです。『始皇帝未来記』に書かれつつ今日この日に！」

おお！ と一斉に足踏みと拍手が起こった。

「このナニワの空を火に染め……」

「どういうこと？」と私はオサを遮った。

「この前には、コノハナサクヤビメがサツマの空を火に染めて世界を再生させたとですよ。こんどはイワナガヒメがナニワを焼いて世界を再生させる番でしょう。ご覧なさい」

編集長は下界を指さした。

煙と炎とがあちこちへ上がっていた。

「袂えは始まつとります。もう誰にも止められません」

なんだか気持ちが悪らついたので、これが、私の仕業なの？

「さて、姫に見て欲しかものがあるのですが」

白い布をかけられた四角い箱が六人がかりで運ばれてきた。看護師が布を剥くと、檻の中に三人の男が裸で縛られてしゃがんでいた。大野と、私を焼き肉屋まで連れて行った男、そしてもう一人の秦だった。三人の全身は黄色と黒のマダラに変色していた。あきらかな甘露中毒だった。

「まるで河勝ね」

そこにいた者は皆、私のこの一言に爆笑した。

千四百年前、多の様子を見て思いついた河勝は私たちを捕らえ甘露を飲み続けた。そして私たちが『常世の神』の助けで河勝のもとから逃げると、すぐにこいつらと同じようにマダラになってしまった。以来、河勝の一族はマダラ神を拝み続け、甘露を飲むことを戒めているのだった。

マダラになった大野は、

「こんなこととして、こんなこととして、俺らのバツクには巨大で壮大で並の人間は絶対に到達出来ないような、巨大で壮大で大きな意志がついてるんだからな、ただじゃスマンぞ」

看護師は、

「お兄さんは、もう、脳もかなりやられてますよ。何人が政治家にドリンクを売っただけで、自分たちが政府のエージェントになったみたいに思い込んでるんです。かなりキテますね。このまま放り出しても、ウイルス性脳炎って診断しかつかないでしょう」

お兄さん？ そうか、大野はおサの兄なんだ。二十年も甘露を飲むうちにオサが歳を追い越したんだ。

「ウイルス性脳炎、か」とオサは言った。「それでん、体のマダラはどう説明する？」

「大阪じゃけん」と別のお年寄りが言った。「猛虎斑ちゃ、どげんね」

一同から失笑が漏れた。そのお年寄りは、

「タイガースの猛虎、猛獣のモウと、虎のコ」

などとブツブツ言いながら恥ずかしそうに引っ込んだ。

「お前らどうするつもりなんだよ、ここも火事になったら、逃げようがないぞ」と大野がヒステリックな口調で言った。

「最初から生きて帰るつもりは無か。ワシら『常世の神』はこの時のために、子々孫々、女神様を伝えて来たつちやるが。ワシらが死ぬことでこの世は抜れるとよ。火の中から、こんどはイワナガヒメから、新しい皇子様が生まれなかって新しいこの世を統べなさる。新しい、美しい世をな」

「お前ら、完全に狂ってるよ」

「狂ってるのは兄貴じゃろが。女神様の甘露を売って商売するんなら、狂つとるとしか思えんぞ」

「なにを！ だいいち、俺らは誰にも迷惑をかけてないだろ。お前らのしたことを見てみる」

空はかなり黒く濁ってきていた。最初は私の通ってきた鶴橋からこのビルまでの線に集中していた煙の柱も、次第にあちこちに飛び火していた。もはや煙は面の広がりを見せていた。

「仕方なか。こんな大都市自体がヤマトの国に合わんとよ。こん薄汚え景色が、豊葦原の瑞穂の国ね、ああ？」

信者たちは一斉に首を横に振った。

「仏教を信じたこと自体が間違いやったとよ。間違いに間違いを重ねて、こげなこつになつてしもうたと。まずナニワの地から滅ぼさんね。そしてハヤトが美しい日本を再生させるとよ。ほんなこと、

『始皇帝未来記』に書きちよる通りばい」

オサは、感無量といった感じで泣き始めた。

「あんなの」と大野は呆れたという調子で言った。「ニセモノだろ。文字遣いにしても和習が強すぎて誰も本物とは認めてない、偽書中の偽書だろ！」

「なら、兄貴はこの現実をどう見るとか！ 見てみい、予言の通り、今日のこの日に、現実にナニワの街はイワナガヒメの怒りに触れて燃えよるとぞ！」

「こんなの予言じゃない！ お前らがやったことだろ！ そのテロメア無効化ウイルスに感染したバケモン女を使って！」

ウイルスに感染したバケモン女？ それが私なの？

「俺らがやったのは」と大野は叫んだ。「単に不老不死ウイルスの効果をおすそわけしてもらつて、それをこんどはおすそわけしただけだろ。そのどが悪いんだよ。けど、お前らがやつてるのを見てみる、人類にとって厄災そのものだろ。その、荒魂と呪いに凝り固まったバケモン女を使って、自分たちが何をやってるのか、よく見

る！」

私を使つて？ 私を使うつて、何？ 私は呆然とした。

「出せ」とオサは言った。大野は縛られたまま檻から引きずり出された。

「いくら兄貴でん、姫様に言葉が過ぎるう」

オサは、正座する大野の脳天にテールナイフを突き立て、一気にグイツと奥まで突き通した。大野の目は両目別々にあらぬ方向へとクルクルと回り、ゲゲゲとでも言うような、言葉にならない音が口と鼻から漏れた。

「このくらいじゃ、死なんぞ。兄貴もまた、甘露を飲んだバケモンじゃけんな」

オサがナイフの柄をグルツと回すと、また目があらぬ方向にクルリと回り、ゲゲゲと、人間のものとは思えない声が漏れた。そして次第に勃起してきたペニスから勢いよく失禁して、その様子に一同から爆笑と拍手が起こった。

オサは大野を蹴り倒して台の上に戻り、

「ウカラよお、ヨモツヘグイと隼人舞じゃあ！」

一斉に手拍子が起こり、一同手を打ち叩き、足を踏んで、踊りながら歌い始めた。

瑞々し 隼人の子らが 難波江に 撃たんにや止まん 難波江  
に 根と芽つなげち 撃たんにや止まん

瑞々し 隼人の子らが 難波江に 植えちハジカミ 口響き  
我は忘れん 撃たんにや止まん

みんな狂つてる。一人残らず狂つてる。

私は見ていられなくなつて台から降り、コノハナサクヤビメのそばに歩み寄った。

私、どうしたらいいの？ 私の行くところ、行くところ、人は狂つて殺し合うの。

私はコノハナサクヤビメの心に触れようとした。

そこにツバメが、たぶんこの季節いちばんのツバメが飛んできてコノハナサクヤビメの肩に留まった。白いツバメだった。

ふと、コノハナサクヤビメの心が伝わってきた。

あなたは荒魂の虜になってる。

「荒魂？」

そうよ。アマツヒコホノニギノミコトに避けられてからずっと、荒魂の虜になってしまってる。

「だって、ミコトはあなたを選んだのよ。私は捨てられたのよ。私は捨てられた女なのよ」

ちがうわ。選んだのはあなたよ。あなたは限りある生の喜びよりも、冷たい不老不死を選んだの。

「選んだのは、私？」

そうよ、あなた自身が選んだの。

「じゃあ、あなたは、コノハナサクヤビメは？」

私はもうとっくに死んでるわ。あなたの呪いで生かされてるだけ。

「私の呪い？」

呪いよ。私もまた、あなたのお人形。

「お人形？」

そうよ。お人形。でも私はあなたの和魂を呼ぶことが出来る。

「和魂？」

そうよ。あなたが不老不死の代わりになくしたもの。穏やかな心よ。

「それは、もしかして『死』？」

そうよ。人は「死」によってしか生かされない。人は死ぬから良くあるうと思う。「死」は和魂の源、「死」が消えたところには荒魂しか残らない。

「そんなこと、誰も教えてくれなかった」

ほら、また人のせいにしてる。荒魂は人のせいにする。人のせ

いじゃなく、あなたの選んだことなのよ。

「私の選んだ、こと」

私は少し混乱して空を見上げた。数え切れない煙の柱は空でつながって雲のようになり、下界では物の壊れる音が激しくなっていた。人の気配は千の単位でサクサクと消えていた。

庭園ではマダラになった三人の虐殺が始まっていた。

三人は千四百年前に多がされたように、指先から少しずつ肉を削られていた。ナイフが突き立てられる度に叫び声上がり、肉片を求めて老若男女の手が伸ばされた。しかも踊りは次第に激しくなつて、皆、互いの服をはぎ取ってほとんど全裸になっていた。

涼子ちゃんも奈美ちゃんも裸だった。涼子ちゃんは服の上からは想像も出来なかったほどに豊かな胸を上下左右に揺らしつつ、けたたましく笑いながら踊っていた。奈美ちゃんは誰かの立ちシヨンを両手に受けては肉に群がる老若男女の頭上に振り撒いていた。

瑞々し 隼人の子らが 難波江に 植えちハジカミ 口響き

我は忘れん 撃たんにや止まん

難波江の 血怒の海なん 大石に 這うち這い這う シダタミ  
の 這うち這い這う 撃たんにや止まん

私が来る前はあれほど穏やかに談笑していた人たちだったのに。

空は今にも降り出さんばかりに黒くなり、ただ、ところどころ地上の炎を映して不気味な色に染まっていた。煙と炎は大阪中に広がっていた。

「私が『死』を得たら、この騒ぎは収まるの？」

わからない。けれど、もう神の時代は終わったわ。神も、もう「死」を得てもいいのじゃないかしら。人間は勝手に産まれて勝手に死ぬ。人間と私たちとはもう「死」を通じてしかつながれない。そろそろ神が「死」を得ても。

私はコノハナサクヤビメの肩に留まる白いツバメを両手に受け入

れた。

私の和魂。

「これで、終わるのね」

少なくとも、あなたの「この世」は。

「受け取るわ、和魂と、そして『死』を」

ああ、ここは生命の樹　五千年前に捨てた「死」のもとへ。

.....

今日は健多が帰ってくる。

色々あったけど、本当に色々あったけど、私は私だし、私以外の私ではありえない。

これからも涼子ちゃんとは『ナイトライブ』の仕事を続け、奈美ちゃんからお金を貰い、質素でもなんとかやっていこう。

健多とも、健多ともきちんとしていこう。結婚して、そして子供を作つて、とにかく、良く生きよう。誰にも迷惑をかけず、良く生きていこう。

玄関のチャイムが鳴った。ドアのカメラ越しに見る健多は。

私は私の知らない記憶の束をどっさり持っている。それが私なんだし、いつまでこの私でいられるかわからないけど、私はこんな私を生きていく他はない。死ぬまで。

玄関に健多を迎えるなり、私は言った。

「ねえ、結婚しようよ」

「なんだよ、いきなり」と健多は面倒くさそうに言った。

「結婚よ、結婚。結婚して子供をたくさん作って、賑やかに楽しく生きようよ」

健多の笑顔が返事だった。

私は健多の首に飛びついた。

そして、キスをした。

ほんとうに、長い長い、素敵なキスを。(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1975d/>

---

常世の蟲

2010年10月8日13時45分発行